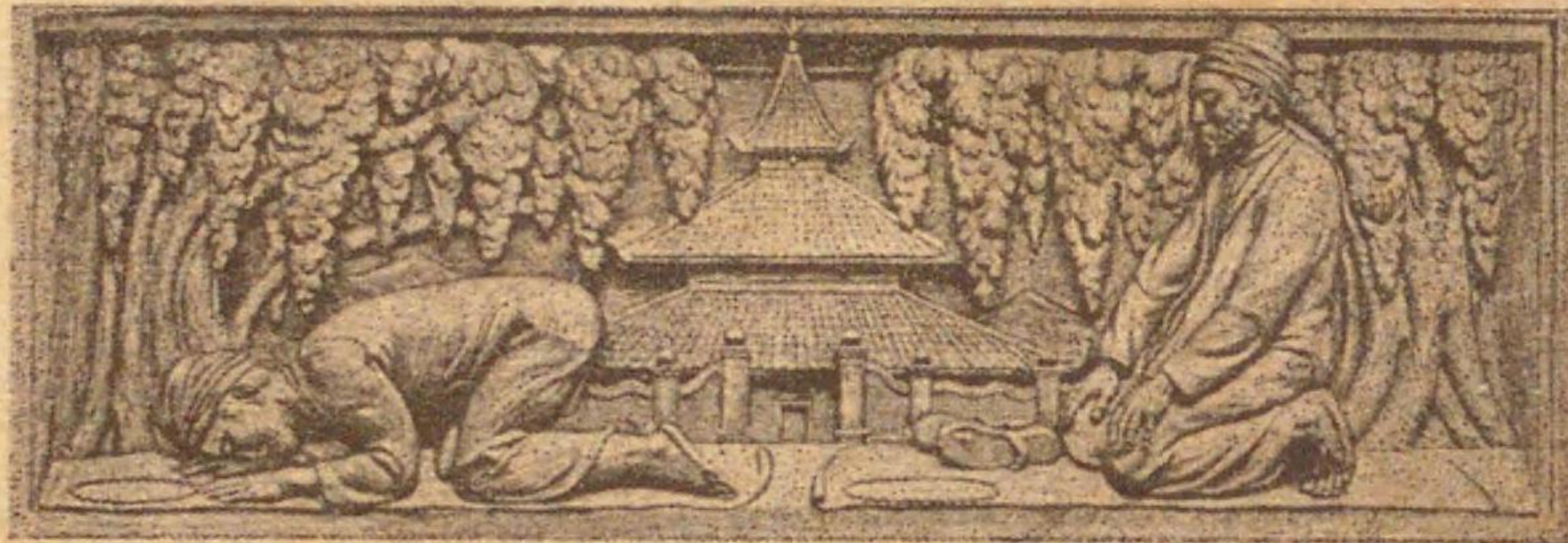


220-1735n



\*1200700369079\*



自 然 宗 教 · 佛 教  
回 教 · 基 督 教  
南 方 圈 文 化 象 徵

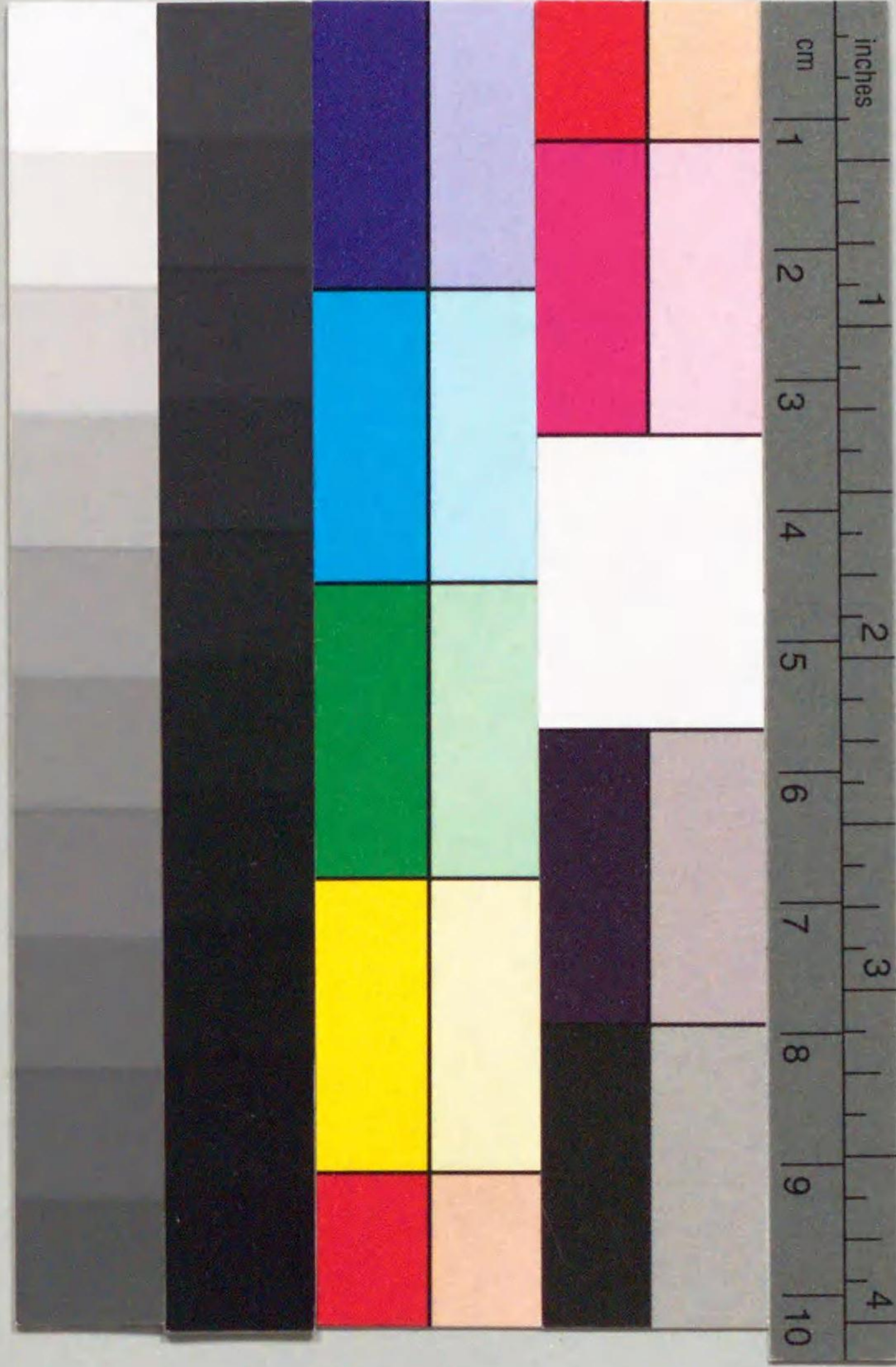
# 南方圈文化史講話

板澤武雄著

東 林 堂

貴族院

3571  
201







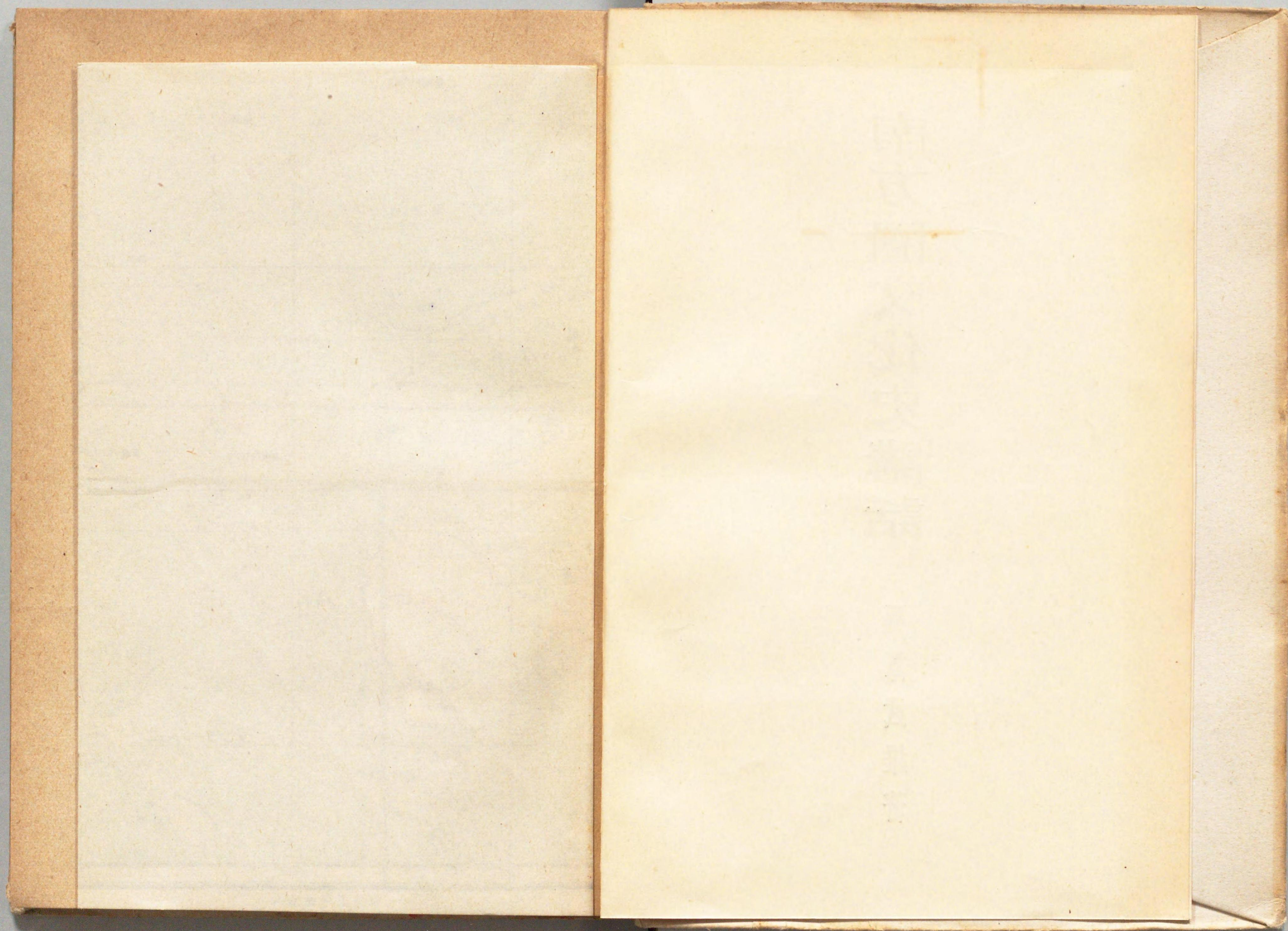




南方圈文化史講話

板澤武雄著



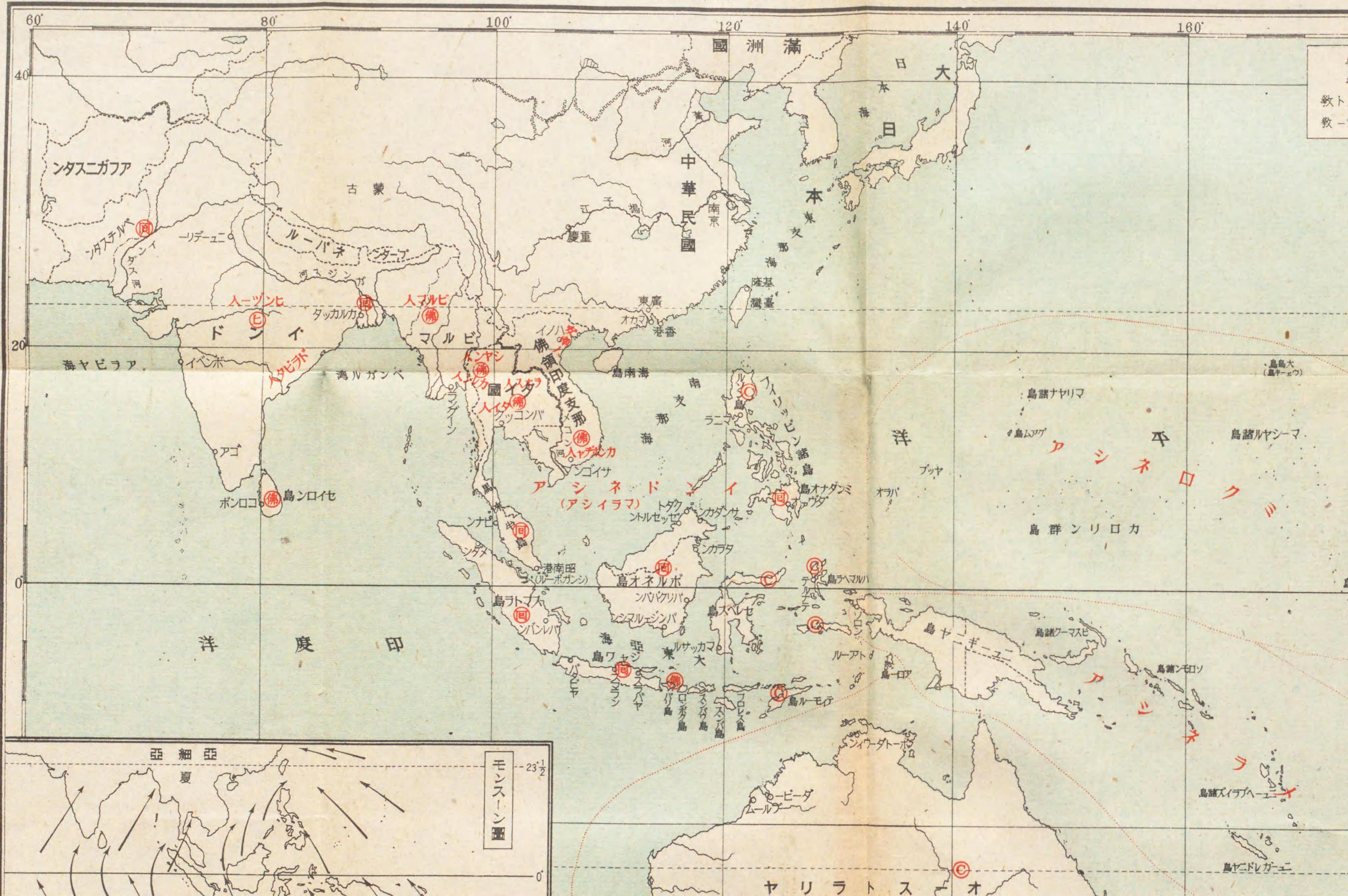








# 南方文化史話附圖



教  
教  
教トス  
教-ツ

島島大  
(島キエツ)

島諸ナヤリマ

島諸ルヤシーマ

島諸ナヤリマ

島諸クマズビ

島諸ンモロソ

島諸スライアヘエ

島ヤドレガエ

島ヤドレガエ

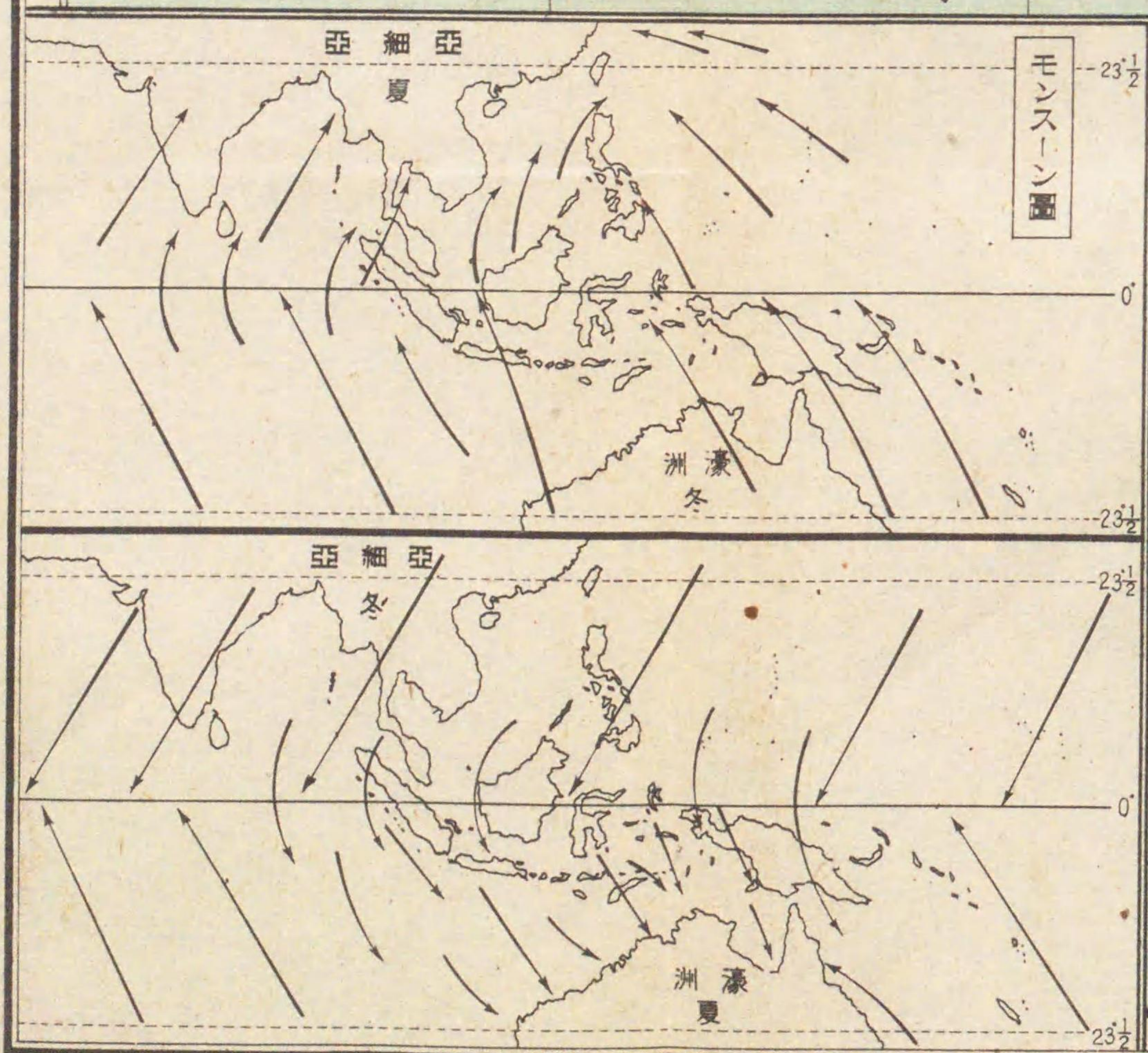
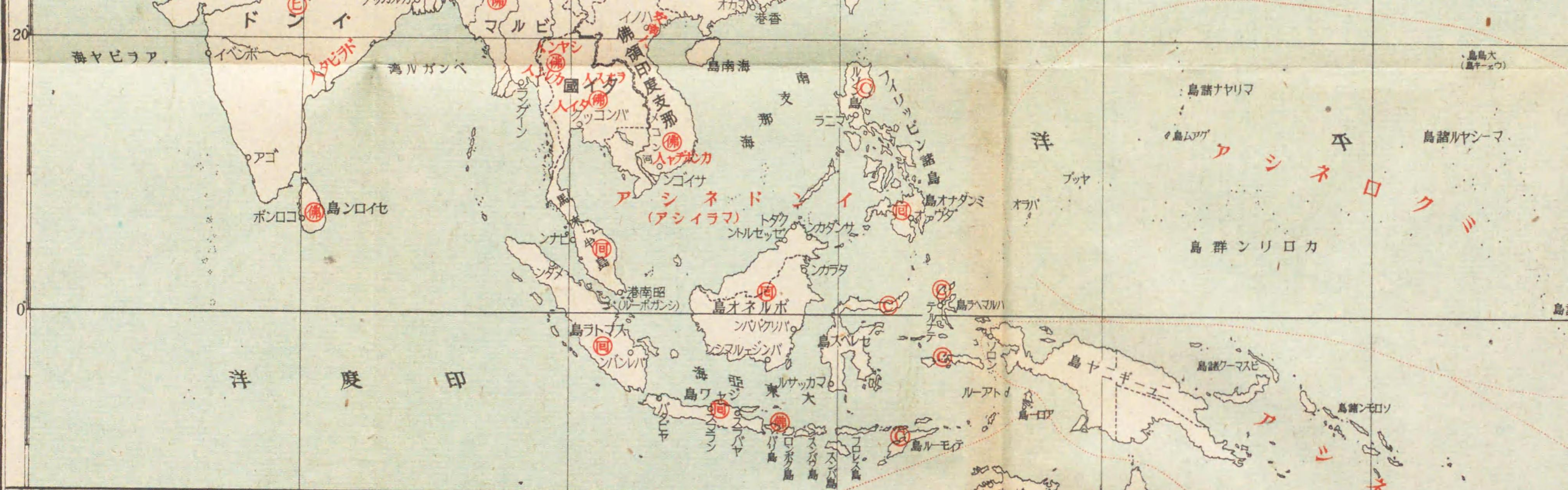
モンスーン圖

ヤリラトスーオ











## 序

本書の主題である「南方圏文化史講話」は、昭和十七年二月十三日より十九日まで七日間、毎早朝東京中央放送局から放送した講話の原稿に、補訂を加へたものである。私がこの講話において、特に南洋といはないで南方圏といつたのは、本文にも断つておいたやうに、今やこれまでの南洋の概念で南方を考ふべきではない。大東亞共榮圏の一環としての南方圏のみが、現在及び將來の我々の問題であるといふ意味からであつた。さて南方圏といつても、御承知の通り、廣くて、且つ中々複雑な地域であるから、これを概括的に把握することは、困難であるばかりでなく、危険を伴ふことさへ考へられるのである。それにもかゝはらず、一般國民の常識として、南方圏全體に通じた把握が要求されてゐることも事實であると思ふ。私はもとより



その任ではないが、この要求に應ずる一つの試みとして、この講話のやうな案を立てて見たのである。なほもう一つ、この講話に當つて私の念願したことは、これまでに我々の利用してゐた材料が西洋人の書いたものが多かつたために、とかく西洋人の見方にひきずられ勝ちであつた南方圏の歴史觀を改めて、日本人の立場から國史を根幹とする南方圏の歴史觀を樹立しなければならぬといふことであつた。ところが實際やつて見た結果、本講のやうな組立では、第一の目的に副ふことは、或る程度まで可能であるが、第二の目的のためには、構想を更に新たにする必要を自覺したが、これは他日を期することとする。

このやうな次第で、我ながら不満足に至りであつた講話の原稿を補訂して出版するに至つたのは、この放送は偶々二月十五日のシンガポールの陥落を中にはさんで試みられたためでもあつたらうが、意外に反響が多く、既知未知多數の方々から書状

を寄せられて、激勵または教示を忝うしたのである。この多數の方々への厚情に報いる意味からも、また放送者の責任の上からも、話しつ放しにしておけなくなつたのである。そこへもつて來て年來親しくしてゐる盛林堂の永田氏が、原稿の整理等一切引受けるから是非出版せよとすゝめるので、それでは寫眞や地圖をなるべく多く挿入して、せめて前述べた第一の要求に應ずるものにしようと、一氣呵勢に原稿に加筆して、一通り聞く話を讀む話の形に改めたのが本書の前半である。更に永田氏の助力で、大東亞共榮圈論以下昭和十五年秋以降の舊稿の一部を、補訂して附け加へることとした。これらの舊稿は今日においては既に時代おくれの感もないではないが、南方圏文化史講話を補足する意味で多少役立つことと思ふ。

かうした次第で、意外に早く校正刷を手にしなければならなくなつた私は、校正しながら、ふと「紙つぶて」を思ひ起した。子供の頃、神社や佛閣の額や鐘をめが



けて、何ごとか祈念をこらして投げつけるのを見たことのある、あの紙つぶてである。この小著の如きは、紙つぶて程度のものであらう。紙つぶてでもよい、大東亞戦争完遂の祈念をこらして、私も敢てこの紙つぶてを投ずる。

昭和十七年三月

著者識

目次

第一講 南方圏文化の特異性 ..... 一  
 ——多元文化の特異なる竝存態様——

第二講 固有民族文化 ..... 二三  
 ——生活文化としての強韌性——

第三講 支那文化 ..... 三四  
 ——南方圏に廣く浸潤してゐる華僑の生活文化——

第四講 印度文化 ..... 四七  
 ——南方圏を光被した印度の宗教文化——



第五講 回教文化……………六二

——南方圏における有力なる宗教文化——

第六講 西洋文化……………六九

——政治的、科學的支配力を恣にしてゐた西洋文化——

第七講 南方圏に對する皇國文化の使命……………八三

——文化にも必勝の信念をもて——

大東亞共榮圏論……………九七

一、新東亞建設の世界史的意義……………九七

二、積年の禍根を斷て……………一一一

三、文化的連繫の必要とその限界……………一二五

四、獨創的指導理念を確立せよ……………一三九

大東亞共榮圏の歴史的 성격……………一五五

和蘭人の蘭印經營……………一七七

日本人の對外活動……………一九一

一、世界觀の發展とアジアの認識……………一九一

二、旺盛な海外文化の攝取……………一九五

三、海外物資の獲得に活躍……………一九九

四、南洋に於ける日本人の生活……………二〇五

五、鎖國の様相……………二〇七

◎固有名詞綴對照

目次終



挿 圖 目 録

南方圏文化史講話附圖  
 往時の日本人活動要圖  
 モンsoon圖  
 マラッカ  
 スマトラ西岸メンタウエ島住民  
 ワーヤン  
 ソロの俳優  
 アロル島のナガ  
 ジャワ島の米搗  
 明甲必丹蘇鳴崗の墓  
 梵天像  
 シブ像  
 洋シユヌ像  
 バラブドゥールの大佛蹟  
 バラブドゥールの佛像  
 アンコル・ワット及びその彫刻  
 ラングーンの寺。バリ島の家庭佛堂  
 バティック

セイロンの僧。タイ僧の托鉢。支那僧  
 回教禮拜堂（ピナン、ジャワ）  
 デイボ・ネゴロ  
 西紀十七世紀初のマニラ灣の圖  
 西紀十七世紀の蘭船  
 總督ヤン・ピーテルスソーン・クーン  
 西紀一六八二年、西紀十七世紀のバタビヤ  
 マニラ市のサント・トマス大學  
 昭南市ラッフルズ博物館  
 敵味方供養碑拓本  
 加世田六地藏の塔  
 フェリベ二世  
 ゼウ島マゼラン記念堂  
 ラッフルズ肖像  
 總督デンデルス  
 清水寺奉額末吉船  
 バタビヤにある日本人の墓  
 マニラにある閩南の先覺者菅沼貞風の墓  
 アユティヤの日本町（ケンブフェル日本誌）

# 南方圏文化史講話

## 第一講 南方圏文化の特異性

——多元文化の特異なる竝存態様——

(一)

昭和十五年七月、私は「昔の南洋と日本」と題して四回にわたつて放送いたしました。したが、その結びの言葉として、次の如く申しました。

明日の南洋の歴史は、斷じて昨日の南洋の歴史であつてはならない。

南洋の歴史の建替、否世界歴史の建替がはじまりました。昭和十六年十二月八日以前の南洋は、すでに昨日の南洋の歴史となりました。今や吾々はこれまでのやうな



概念で南洋を考へてはならない。大東亞共榮圏の一環としての南洋のみが、現在及び將來の吾々の問題であります。私がこの講話で特に南洋と云はないで、南方圏と申しますのは、これがためであります。

## (II)

大東亞戦争は御稜威のもと、忠勇なる皇軍將士の必勝の信念と、水ももらさぬ必勝の作戦によつて、着々輝かしい戦果を擴大し、英・米・蘭の曾ての據點が次々に崩壊してゆきます。「御民われ生けるしあり、天地の榮ゆる時にあへらく思へば」の感激を禁じえないのであります。しかし、この感激は、同時に吾等の責任の重大を痛感させるのであります。肇國以來の皇國の大精神を顯現して、大東亞の各國家及び各民族をして、各々その所を得しめ、皇國を中心として、道義に基づく共存共榮の新秩序を建設し、進んで世界新秩序建設の大なる役割を果さうとするこの

大東亞戦争は、前途なほ遼遠であります。幾多の困難のあることはもとより覺悟の上のことでありますが、ほんたうに一億一心、國力の總てを傾けつくして、やりとげなければならぬ大業であります。皇軍將士の輝かしい戦果を、むだにするやうなことがあつては、相すまない。否戦果を最大限に大東亞の新秩序建設に役立てなければならぬのであります。それがためには建設諸政策が、あくまでも雄渾な構想から發し、その具體案が水ももらさない周到なる用意と準備とから生れるものでなくてはならない。相手を知り、己を計る上に、遺算があつてはならない。國民の一人一人が、大東亞の認識をもつて、銘々の職域を通じて、力の限り、根かぎり、御奉公を上げなければならぬのであります。

## (III)

この重大な時局に當つて、私は日本武尊の御事蹟を偲び奉るものであります。第



十二代景行天皇の御代、東の方の蝦夷が叛きましたので、皇子の日本武尊に征討のことを仰せつけられました。日本武尊は吉備武彦、建稻種命等を随へさせられて、御東征の途に上らせられました。その御途次、伊勢の皇大神宮に御參拜遊ばされました。その時、御姨倭姫命は御神慮によりまして、天叢雲劍と燧囊とを尊に授けたまうて、「慎みて怠りたまふこと莫れ」と懇にお諭し遊ばされました。日本武尊御東征の赫々たる御功業は、實に「慎みて怠りたまふこと莫れ」といふ御諭を拳々服膺せられた結果であると拜察いたす次第でございます。昭和十六年十二月八日換發せられました米英に對する宣戰の詔書に、

朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕カ  
眾庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ舉ケテ征戰ノ目的ヲ達成スル  
ニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

と宣はせられました。叡慮洵に深遠適切なるに恐懼感奮を禁じえない次第でございます。吾々は謹みて大御心を奉體し、慎みて怠ることなく、征戰の目的を達成するために、遺算のないやうにしなければなりません。それがためには南方圏について部分的及び総合的研究を進めて、南方圏の認識を深めることが大切であります。本講において、私は南方圏の文化を歴史的に概観しようと思ひますが、南方圏の文化の姿を一般の方々に理解していただく一助ともなれば、ありがたい仕合せと存じます。先づ第一講として、南方圏文化の特異性から始めます。

## (四)

大東亞の一環としての南方圏の範圍は今こゝでは限定しないことにいたしますが話の内容は大體従來南洋と呼んでゐた範圍即ち、わが南洋群島、フィリッピン群島、ボルネオ、スマトラ、セレベス、ジャワ、ニューギニア、ティモール、佛領印度支那、泰國、マライ半島、ビルマ等を含めたものと御承知置き願ひたいのであります。



す。その面積は約四百四十八萬三千方籽わが國の約六倍半、人口は約一億四千七百萬、わが國より約四千七百萬人多い、赤道の南北にわたつてゐる熱帯地域が主でその一部分は亞熱帯地域に屬してゐます。このわが國の總面積の六倍半もある廣大な、そして重要資源に富んでゐる南方圏が、大東亞戰爭のはじまる前は、どんな状態におかれてゐたでせうか。獨立國は泰一ヶ國で、その他の大部分の地域は悉く歐米人によつて分割支配されてゐたのであります。即ち和蘭が四九%、英國が二四%、佛蘭西が一九%、米國が七・五%、ポルトガルが〇・五%といふ風に分割支配してゐたのであります。しかもその歐米人の數は僅に三十數萬人にすぎなかつたのであります。一億四千七百萬人を三十數萬人の歐米人が支配してゐた、この一事だけでも大東亞戰爭が必然的なものであることがわかつて思ふのであります。更に印度に至つては僅々十八萬人位の英人が三億五・六千萬人に近い多數の印度人を支配してゐるのであります。濠洲の如きは七百七十萬方籽即ちわが國の十二倍に近い廣大

陸に僅かに六百八十萬人ざつと東京府の人口位しか人間がゐないのであるが、その九七%は英國系で、原住民は昔百萬人もゐたといはれるのが、今日では僅かに五萬二千人位しか残つてゐないといふ。吾々は歐米人の支配の現實をはつきりと見きはめなければなりません。

ヨーロッパ人の南方圏への進出がいつ頃からかと申しますと、ポルトガルのワスコ・ダ・ガーマがアフリカ大陸の南端を廻つて印度に到着したのは後土御門天皇の明應六年(皇紀二二五七)、今から四百四十五年前のことです。それからマゼランが南米の南端を廻つてフィリッピンに到着したのは後柏原天皇大永元年(皇紀二一八一)、今から四百二十一年前のことです。次に和蘭人の南方圏への進出は後陽成天皇慶長元年(皇紀二二五六)にはじまり、今から三百四十六年前のことです。英國も和蘭と雁行してわが江戸時代のはじめから南方圏に進出し、佛蘭西は江戸時代の元祿前後のルイ十四世時代から進出して來ました。これを要するに、



南方圏におけるヨーロッパ人の歴史は四百四十五年以上には溯らないのであります。しかるにヨーロッパ人の書いた歴史はこの頃を發見時代といつて、あだかもヨーロッパ人の發見によつて、はじめて南方圏の歴史がはじまつたかの如き、錯覺を起させるのでありますが、これは飛んでもない誤りであります。南方圏の歴史はそれよりも更に更に悠久なるものをもつてゐるのであります。明治二十四年（皇紀二五五一年）和蘭の醫者のヅボアによつて中央ジャワのトリニールにおいて發見された原生人類（學名ピテカントロプス・エレクトウス・ヅボア）の骨骸化石は地層から考へて大體三十五萬年位前と考へられてをります。これによつても南方圏の人類のはじめは極めて古いことは明かであります。現存する南方圏住民の歴史も古いところは文字がなかつたために、書きしるされたものがないが、獨木舟による航海術の如きは非常に古い時代から發達してゐたことが容易に想像することが出来るのであります。今日南方圏住民はその人種、言語、生活、習慣を異にして、これを一ま

とめに考へることは大なる誤謬を生ずる本であります。何といつても固有の住民がその數が最も多く、且つその固有の文化が、現に生活の基調をなして生きてゐるのであります。吾々はこれ等南方圏の住民とその固有文化の強靱性について、再認識する必要があります。

## (五)

次に南方圏は、佛印、泰、マライ半島、ビルマはアジア大陸の半島部をなしてゐますから、これを半島圏と呼んでおきます。爪哇、フィリッピン等の島々は太平洋中の島嶼部をなしてゐますから、これを島嶼圏と呼んでおきます。半島圏と島嶼圏とでは、その文化の史的様相がものづから異なるのであります。半島圏におきましては、それが印度支那半島と呼ばれるやうに、印度と支那との間に突出した半島でありますから、その文化の影響を受くる場合も、それぞれ近接してゐる方からの影響



が、早く且つ濃厚であるのが當然で、北西部や南東部が印度の文化の影響を受くることが、早く且つ深く、北東部が支那の文化を受くること、早く且つ深かつたのは自然であります。しかもこの半島部の最南部のマライ半島が狭長く南方に伸びてスマトラ島と共に、印度洋と太平洋とを隔て、マラッカ海峡とスンダ海峡とが、夙くから東西兩洋交通の關門をなしてゐたのであります。そして古くはマライ半島のマラッカやスマトラ島のパレンバンが東西兩洋交通の要衝として榮え、近く百二十年位前からはシンガポールが東西交通の要地として重きをなしてゐたのであります。そしてマライ半島やスマトラには西洋文化に先立つて回教文化が傳はり、こゝから半島圏及び島嶼圏に回教文化が傳播浸潤して行つたのであります。西洋文化の傳つて來る前の、南方圏文化は、固有の文化と、支那文化と、印度文化と、回教文化と、四つの文化要素が混然として竝存してゐたのであります。そしてこの文化の傳播とその存續の有様を考へて見まするに、いづれも自然であります。海は民族の移動と

文化の傳播に、自然にして容易な道を提供します。半島より島へ、島より島へと、飛石を傳はるやうに接近布置された南方圏の地形に、加ふるにモンスーンが更に民族の移動と文化の傳播に都合のよい條件を恵んでゐます。印度洋から東亞の海洋にわたつては季節風即ちモンスーンが吹いてをりまして、これが氣候、産業は勿論のこと、文化にも非常なる影響を與へてをります。モンスーンといふ言葉は中世にアラビヤ人がマウシム即ち季節風と呼んだのを、近世になつてポルトガル人がモンサンと訛り、イギリス人が更に訛つてモンスーンといつたのであります。冬季には氣壓はアジア内陸に高く、濠洲北部に低いから、赤道以北では北東風が卓越し、赤道に近いところでは北風となり、赤道を越へて南半球に入ると、北西風にかはる、これが冬のモンスーンであります。夏季には氣壓が印度北西部に低く、濠洲内陸に高いから、赤道以南の南半球では、南東風であり、赤道を越へると南西風となり、印度洋や支那海では南西風、東支那海では南東風となる、これが夏のモンスーンであ



ります。圖についてその大體をごらん下さい。昔の帆船時代の航海は、このモンズーンを利用して行つたものであります。

## (六)

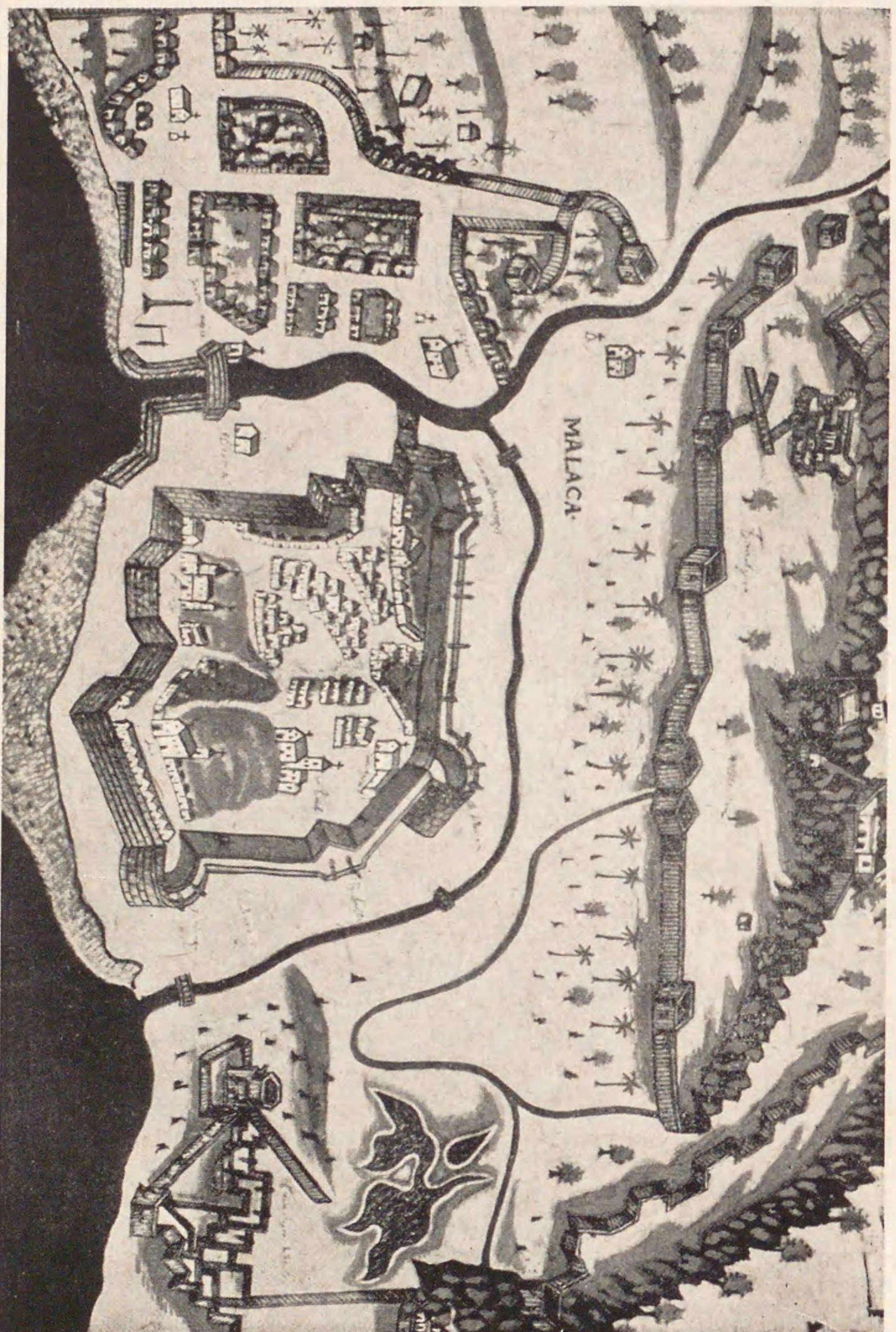
昔、平安時代から鎌倉時代に、日本の博多から支那の寧波間に貿易船の航海が行はれた頃は、日本より支那へは多く三、四月頃春季の北東季節風を利用して赴き、支那より日本へは多く五、六月頃初夏の南西季節風を利用してやつて來たものであります。鎌倉時代の末からはじまつて、吉野時代、室町時代にかけて、わが私貿易の徒が支那の沿岸に活動して、支那人が大いにこれを恐れて防海を嚴にしたのであります。その頃、支那人の書いたものを見ますと、日本船の來るのは恒に清明（春分より十五日目、三月上旬）の後即ち北東季節風の吹く時期である。五月を過ぎると風が南に變るから日本より來るに不便である。重陽（九月九日）の後はまだ北

東風が吹いて再び日本船に便になるが、十月を過ぎると北西風に變つて、また不便になる。故に三、四、五月を大汛（汛は注ぐ意）といひ、九、十月を小汛といつて防海を嚴重にすべき時節としてゐます。右は日本船についてであります。支那人の船については、西に往くには仲春（二月）を以てし、北に往くには仲夏（五月）を以てし、東に往くには仲秋（八月）を以てし、南に往くには仲冬（十一月）を以てすと書いてをります。日本船も支那船も季節風を利用して航海したことを示してゐるのであります。また近世のはじめ、ポルトガル船が印度のゴアを起點としてマラッカ海峽を過ぎ、南支那海を北してマカオ、廣東に達し、それより臺灣海峽を通り、東支那海を東へ走つて日本に達し、歸りはまたほゞ同じ航路を逆に追うて歸つたのであります。これも季節風に左右されたものであります。即ち四月ゴアを發し、七月頃に南支那に着き、そこで糧食の補給や貨物の積みおろしもありました。季節風を待つために翌年五月まで十ヶ月もそこに碇泊しましたから、通例ゴアから



日本まで十七ヶ月もかかったのであります。日本から印度へ歸るには年末に日本を出帆し、北東季節風のなくならないうちにマラッカに着き、翌春南東季節風が印度洋に吹きはじめると、そこから直ぐゴアへ向つたのであります。江戸時代バタビヤと長崎を定期航海したオランダ船の長崎入港は多く夏で、太陰暦の七月が最も多く六月がこれに次ぎ、五月、八月のこともありました。そして太陰暦の九月二十日限（遅着船は特に五十日以内延期することを得）長崎を出帆する定めになつてゐました。オランダ人の航海記録を見ますと、バタビヤより日本へ向ふには太陽暦の六月十四日から同月二十日の間に出帆するのが最もよいとありますが、これも風向きを主とする航海の経験から得たものでありませう。

世界の米作地帯はこのモンスーン地帯でありまして、産業と深い関係があります。更にまたモンスーンは南方圏の文化に大なる影響を與へてをります。即ち、單に航海がこれによつて左右されるばかりでなく、モンスーンの卓越する南方圏にお



カッタマ



いては、雨季と乾季とがはっきり分れ、これが生活文化に深い関係をもつてゐるのであります。例へば、佛教國で行はれる安居アングといふのは、雨季に行乞に出ないで、一定の場所に住して専ら修養に努めることであります。

(七)

さて文化の傳播を考へますに、水の高さより低さにつくがやうに、自然な流れは急速ではないが、絶えず、確實に浸透して行きます。南方圏における支那文化の浸透や、印度文化、回教文化の浸透は、國家や政治の背景なしに、主として商業路や航海路に乗つて傳播したものであつた。そして商業やその他の仕事に従事する間に固有の民族と親和しつゝ、自分達の生活圏を確立し、文化圏を擴大して行つたのであります。支那文化と印度文化及び回教文化の場合とは、少しく趣きを異にしてゐます。支那人は由來國家生活よりも、社會生活において、傳統的に民族的に強靱



さをもつてゐます。どんな所へも出かけ、どんな所でも、自分達の社會を、自分達の生活を営みます。必ずしもその文化を他の民族に傳へやうとしない。ありのままの彼等の生活をありのままに、どこへ行つても平氣でやつてのけて、それぞれの土地において適應性は發揮するが、強いて自分達の習慣や文化的傳統を改めやうとしない。そして専ら經濟的活動において彼等獨特の手腕と忍耐とによつて、着々地歩を占めて、退けやうにも退けることの出来ない存在になるのが、海外に進出した支那人所謂華僑の一般性であります。これに反して、印度人やアラビヤ人の進出には宗教文化が伴はれてゐるのであります。印度人は婆羅門教、佛教、印度教を南方圏に傳播させました。この所謂ヒンヅー文化なるものは南方圏文化に、過去においても現在においても大なる影響を示してゐるのであります。印度文化よりは遙かにおくれて南方圏に傳つた回教文化はイスラーム教といふ有力な宗教によつて完全に統制されてゐる文化であります。それだけに政治性も強大で、南方圏の大部分がヨ

ロッパ人がこの方面に現はれた頃は、殆んど回教の政治的勢力に蔽はれてゐたと申しても過言でなかつたのであります。現にマライ半島からスマトラ、爪哇にかけての回教の勢力は實に支配的でありまして、この回教文化の過去及び現實を見極めることは、今後日本人が南方圏に働きかける上に、大いに研究し、大いに慎重を期すべき重大問題であります。

しかし南方圏の固有文化に浸潤し、影響した點においては、印度のヒンヅー文化の方は遙かに強く、且つ深く、回教文化の及ぶところではないのであります。私は南方圏における固有文化の生活文化としての強靱性、支那文化の社會性、印度文化の浸透性、回教文化の宗教性をあげて、それぞれの文化要素の性格を一通り考察いたしました。以上の四つの文化要素の外にもう一つ歐米文化の要素が加はりました。この歐米文化は、はじめから政治的意圖によつて、國家の實力を背景として南方圏に進出して來たのであります。西曆の十六世紀以降世界政策遂行の好箇



の對象となつたところが、南方圏であつたのであります。政治的統一力が稀薄で従つて抵抗力の少い、そして重要資源に富む南方圏は、十六世紀以降、ポルトガル人、イスパニヤ人、イギリス人、フランス人、アメリカ人等の世界政策の一環として彼等の支配するところとなつたのであります。かくて歐米の文化は政治的、軍事的の力と相俟つて支配意慾を恣にしたのであります。右にあげた歐米人のうち、最も夙く南方圏を支配したポルトガル人とイスパニヤ人とそれからおくれてフランス人はカトリック系の國で、カトリック系の文化を南方圏に移植したのに反して、オランダ、イギリス、アメリカの諸國は大體プロテスタントの國で、カトリック系の國々のやうな宗教文化ではなく、専ら自然科学に基礎をおく近世的物質文化を以つて、南方圏を搾取し、南方圏を征服したのであります。ポルトガル、イスパニアのうち、ポルトガルは今日なほマカオ、ティモル島の半分を領有して南方圏に昔の名残りを留めてをりますが、イスパニヤは完全に政治的にはその影を没してをります。イス

パニヤ人の植ゑつけたフィリッピンにおけるカトリックの信仰は、現に住民の八割をその信者にもつてゐることを、吾々は忘れてはなりません。僅々四十年のアメリカのフィリッピン統治は、今やその政治力の壊滅と共に精神文化においては、恐らく何物も残さないであります。イスパニヤ人とアメリカ人とは吾々に深い暗示を與へてをります。文化の浸透力、支配力を伴はない政治的支配は、決して永續するものではありません。今後日本人に課せられた南方圏への文化工作に、透徹した見識と卓越した方法の必要であることが、痛感せられます。一時的な、便宜主義的な、安易な途を選んで、後年の患をのこすことのないことを希望してやまないであります。

## (八)

以上述べましたやうに、固有文化、支那文化、印度文化、回教文化、歐米文化の

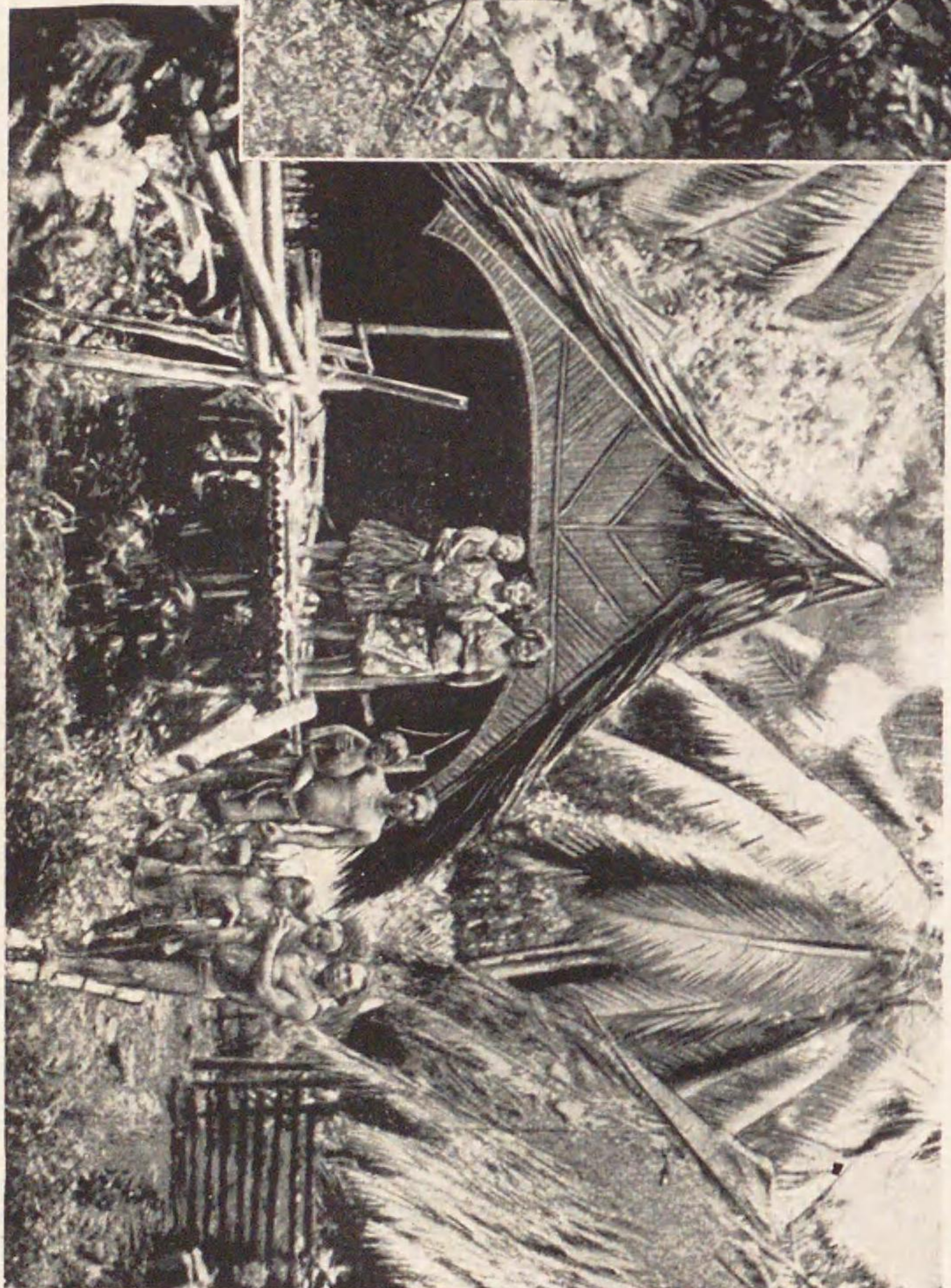


五つの文化要素が、それ／＼の文化的秩序をもちながら、並び存してゐるのが、南方圏文化の實相であり、特異性であります。並び存するといふのは渾然たる融合でもなく、權威ある統一でもなく、さればといつて雜然たる混合でもなく、五つの要素が、それ／＼別個の背景と歴史とをもち、地域的にまた社會的にそれ／＼の勢力圏をもつて、並び存しながら、程度の差があるが相互に若干影響しあつてゐる意味であります。背景と申しますのは、例へば支那文化を考ふる場合に南方圏に住む六百萬乃至八百萬と稱せられてゐる華僑だけを考へてはならない。その背景には四億の支那人と何千年といふ長い歴史を有する支那文化のあること、印度人にしても、その背景に三億五千萬の印度人と、支那に劣らない何千年といふ長い歴史を有する印度文化のあること、回教徒にしても、その背景に三億の回教徒と、獨特の文化傳統のあることを考へなければならぬといふことであります。歴史とは長い時の経過の試練を経たものには現在及び將來にわたつて根強い存續力を有してゐることを意

味します。次に地域的に社會的にそれ／＼の勢力圏をもつてゐるといふことは、歴史的に、地理的にその地域と、その社會に深い關係をもち、根をはつてゐて、これまた容易に動かし難い事情にあることを意味します。然らば一體何故に南方圏の文化にこのやうな特異性があるのでせうか。それは南方圏は地理的に分散してゐるとまつてゐないこと、モンsoon地帯がいろ／＼な文化の傳播を容易にしてゐること、歴史的に南方圏だけで、獨立した政治的、經濟的、文化的の力を發揮したことがなく、昔から今日に至るまで、外部からの政治的、經濟的、文化的の働きかけを受けつゞけて來たからであります。文化には自律性と他律性とを考へることが出来ますが、南方圏には文化的に自律性が乏しく、他律性が多く認められるのであります。そして南方圏に存在する五つの文化要素が渾然たる文化を形成するに至らないで、各文化要素が特異なる並び存態様を示してゐるのが現状であります。しかしこれは渾然たる文化圏をつくるに至るまでの過渡期でありまして、今や皇國文化を中心

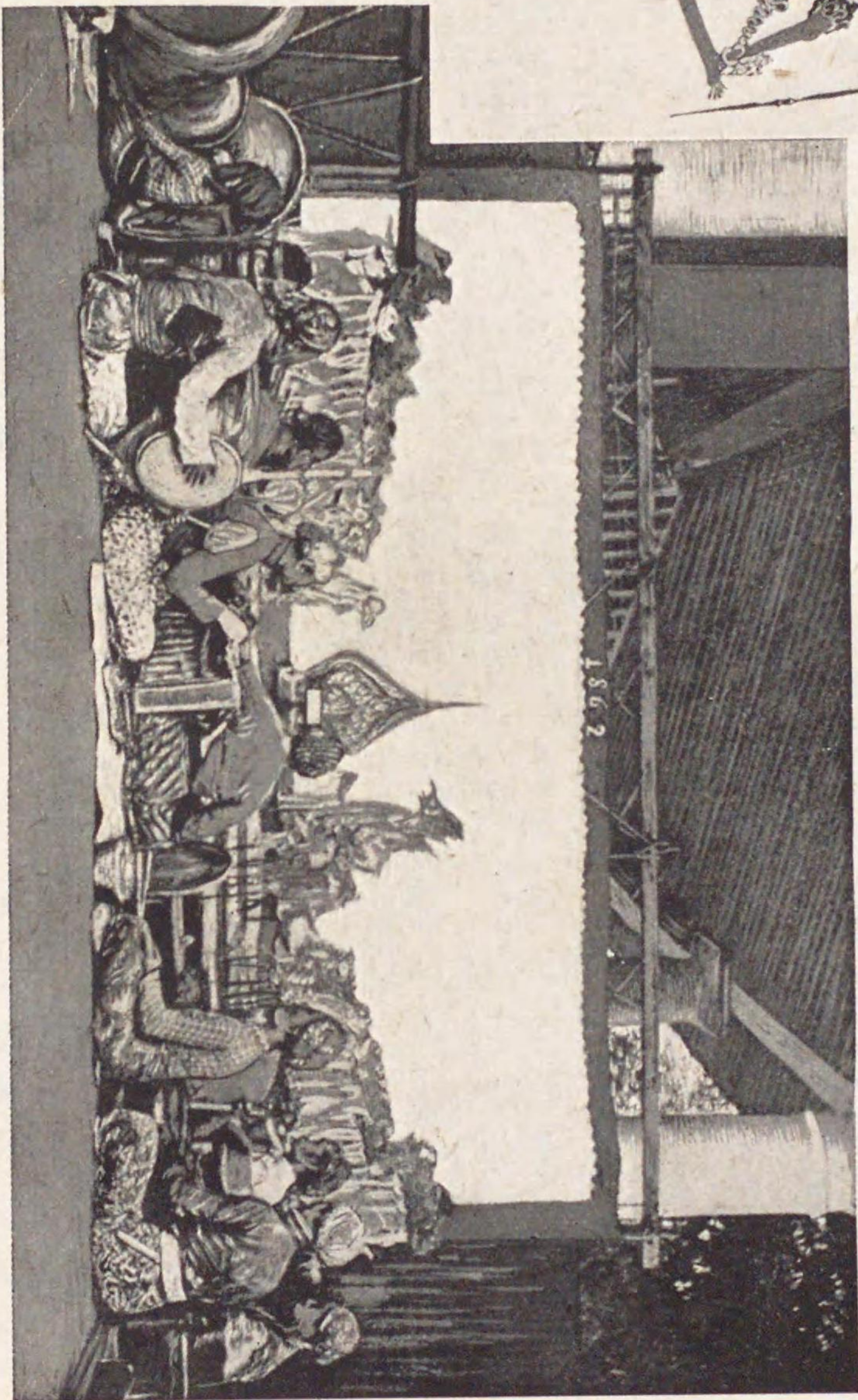
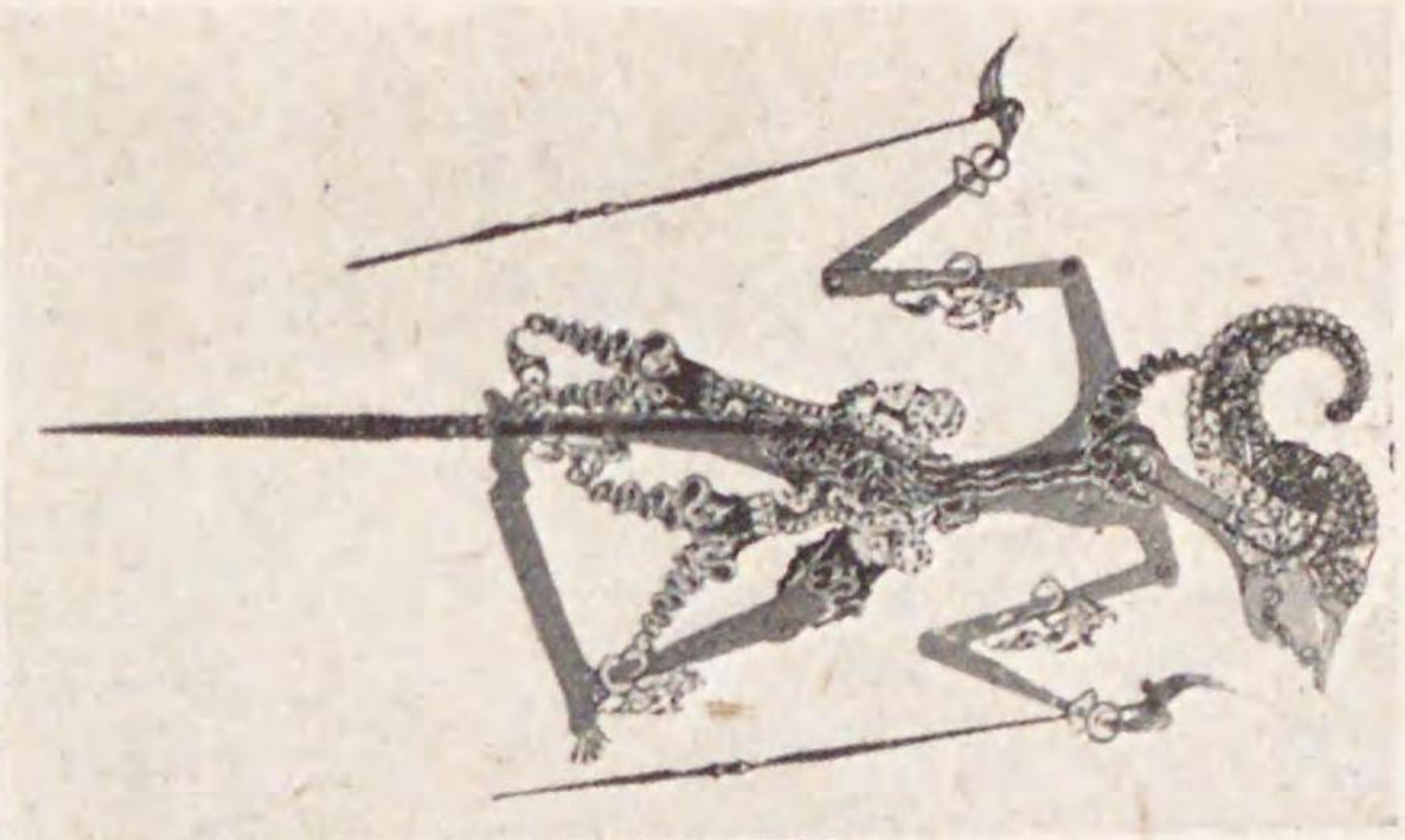


として、南方圏の文化相は一新されようとしてゐます。悠久三千年の皇國の文化は天壤無窮の御神勅のまにまに生々發展を遂げ、その間に支那文化も、印度文化も、西洋文化も、その採るべきものはこれを攝取し、たくましい成育を遂げて今日に至つたのであります。支那の文化も、印度の文化も、回教の文化も、アジアに發した諸文化が皇國文化の光被によらなければ長い沈滞から脱しえないのであります。南方圏を包含する大東亞共榮圏の確立は、政治的、軍事的、經濟的意義が大であるばかりでなく、皇國の荷ふ文化的使命の上からも意義づけられなければならないのであります。

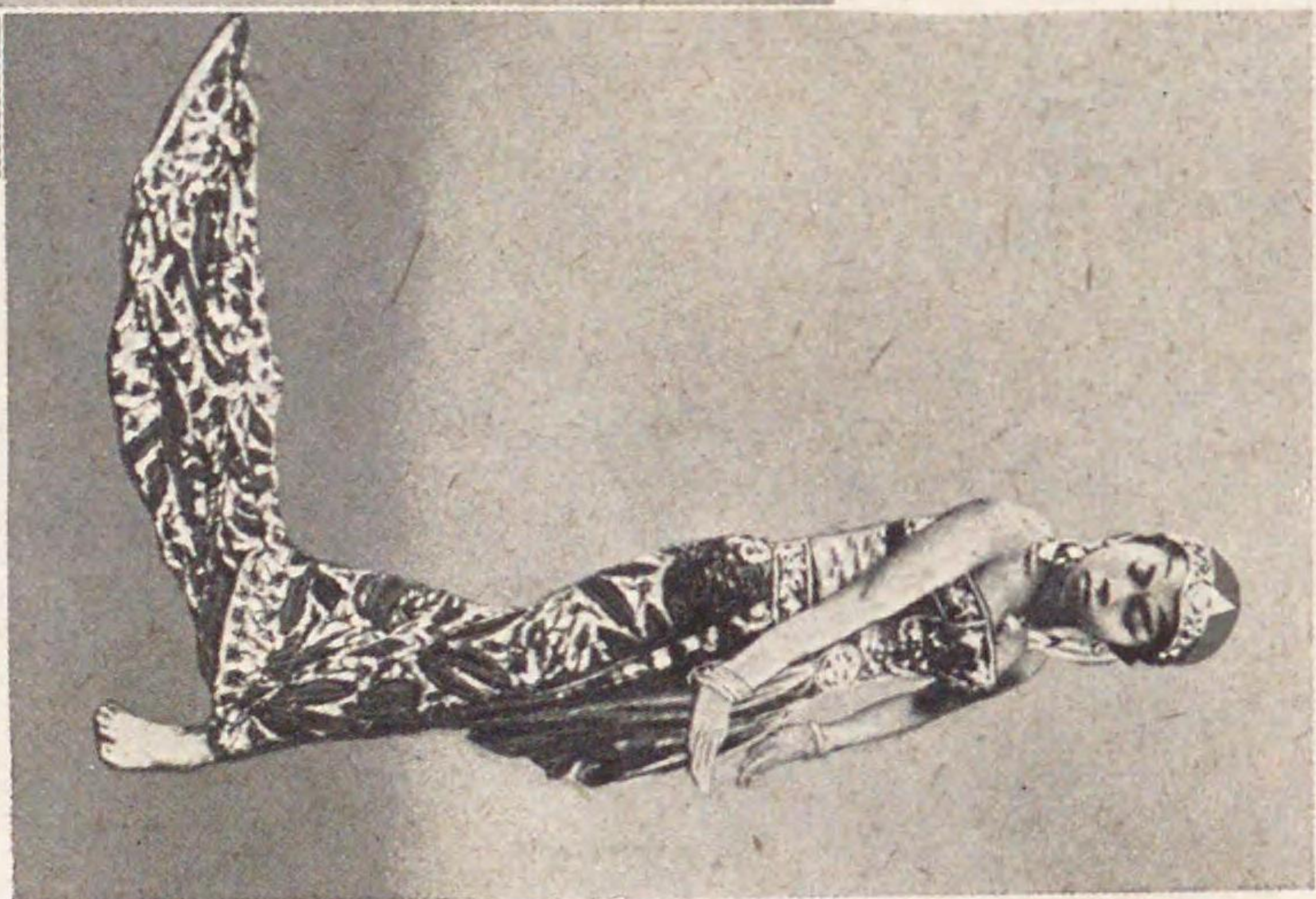
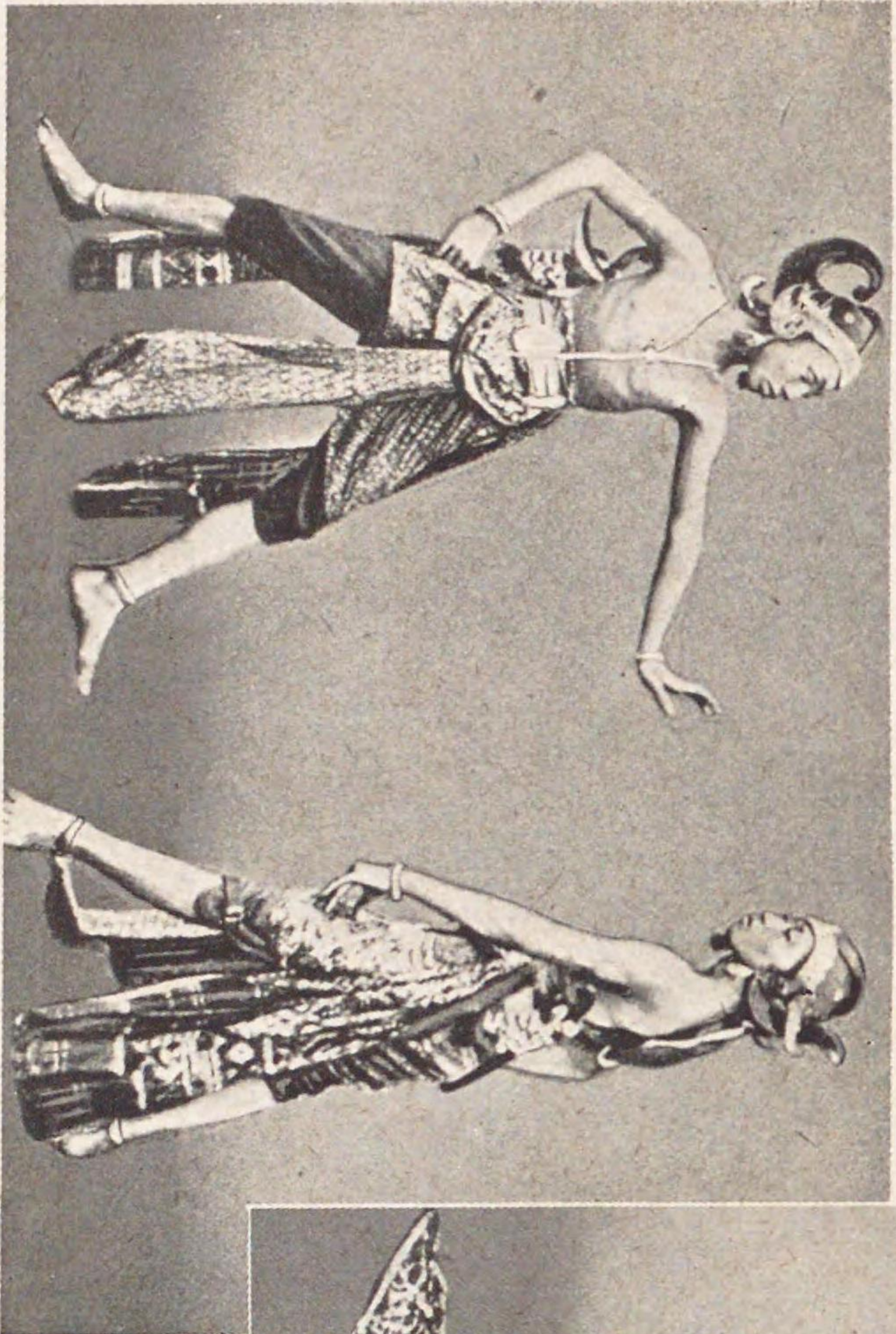


民住島エウタソメ岸ラトマス



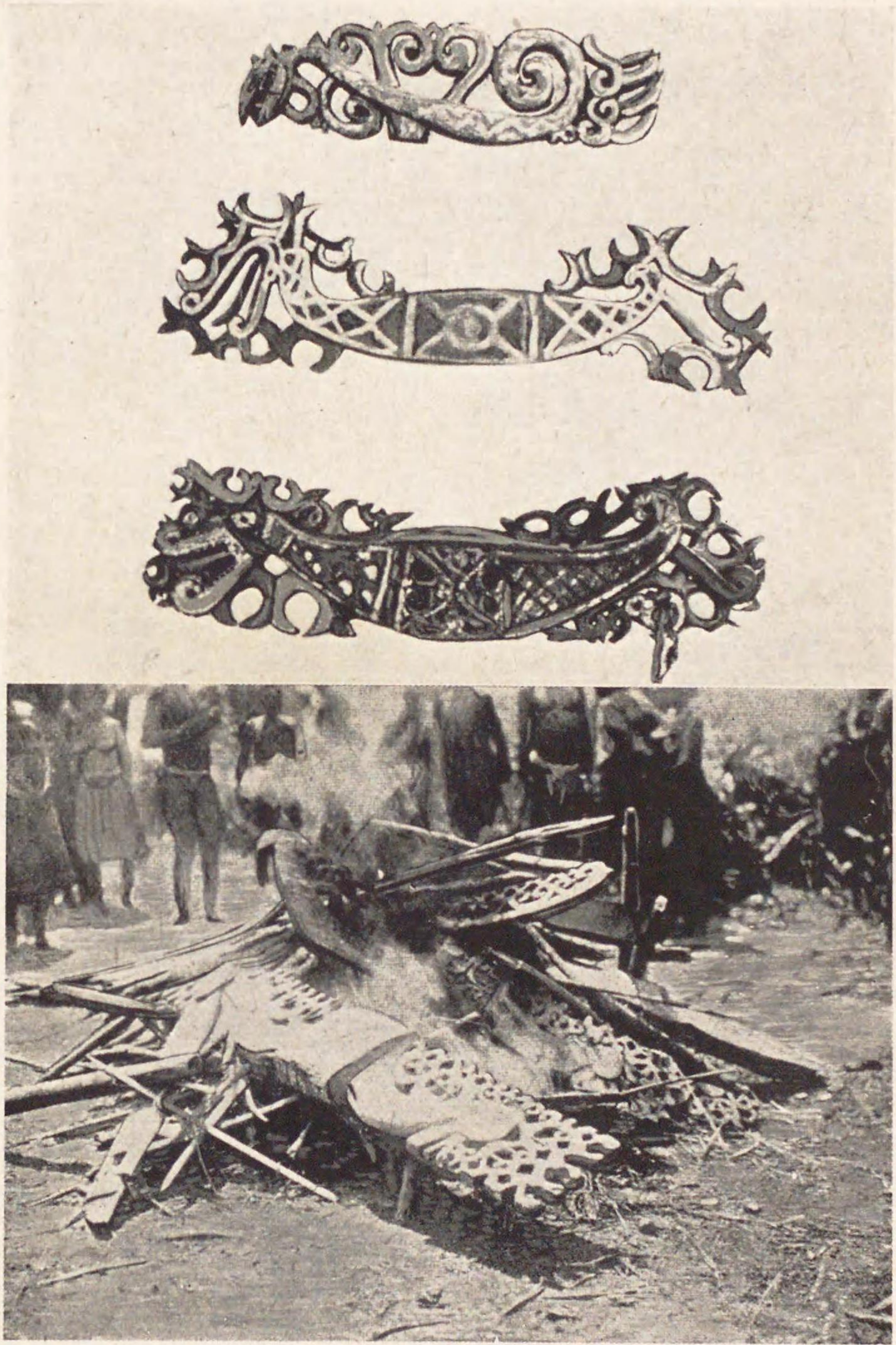


シヤーク



優非のロソ





ガーナの島ルロア

## 第二講 固有民族文化

—生活文化としての強靱性—

(一)

南方圏の民族は實に多種多様であります。半島圏の民族はオーストロ・アジア族、安南人、タイ族、チベット・ビルマ族、インドネシア人の五つに大別されます。

第一のオーストロ・アジア族といふのは南亞細亞的言語を話す民族で、この半島圏の先住民族といはれるモン・クメール語族がこれであります。モン・クメールとはイラワディ河の下流沿岸平原即ち今のビルマ地方に居住したモン人と、今の佛印地方に居住したクメール人を代表者として名づけたものであります。しかるにこの



モン・クメール人は北方雲南方面からラオスが南下するに及んで壓迫されて移住しまた混血したのであります。カムボヂャ人はこの原住民のクメール人と印度人の混血したもので、有名なアンコール・ワットの建設者で印度文化が深く浸潤してをります。安南の南の方の狭長い海岸平野に居住してゐるモイ人はカムボヂャ人について多いが、この方は印度文化の影響を餘り受けてゐないのであります。安南の南部に住むチャム人は原住民とインドネシア人（マライ人）との混血種であります。

半島圏の第二の民族安南人は、佛印の人口の七割二分を占めてゐるのであります。これは原住民族であるオーストロ・アジア族に、南方支那から移住して來たモンゴール系の要素が濃厚にまじり、更にインドネシア人の血が混つてゐるのであります。

安南人は久しく支那に隸屬してをりました。安南といふ名は支那の唐代に邊要の領土に東方に安東、西に安西、北方に安北、南方に安南都護府を置いたが、この安

南都護府から起つた地名であります。安南人は久しく支那に隸屬してゐたが、唐の滅亡を契機として、宋の初から一つの民族國家をつくるやうになつたのであります。が、かういふ歴史的因縁から著しく支那文化の影響を蒙つてゐます。

次に半島圏の第三の民族はタイ族であります。タイ族は前に述べたラオスと同種族で、支那の雲南方面から南下して、一部はビルマに入り、一部はメーコン河の中間流域に、一部はメナム河流域に入つて今日のタイ國民の根幹をなしたのであります。タイ族は、わが平安時代の初期頃から小國家を形成してゐましたが、わが鎌倉時代四條天皇の御代（皇紀一八九八）今日のタイ國の北部に獨立國を建設いたしました。スコタイに都しましたからスコタイ王國と稱せられます。その後百年餘りしてわが吉野時代後村上天皇の御代（皇紀二〇一〇）に至り、メナム下流平野の中心地アユタイヤにタイ族の一王國が建設せられ、やがてスコタイ王國をも併せました。これが江戸時代の初め日本と關係の深かつたアユタイヤ王朝であります。この



王朝は建國以來王統が二度替りましたが、都はひきつゞきアユティヤでありました。わが後櫻町天皇の御代即ち田沼時代に至り、一旦ビルマのために滅ぼされたが、ピヤ・タクなる者が起つて、ビルマ軍を撃退して、タイの國を恢復し、自立して王位に即きましたが、在位僅か十五年にして斥けられ、わが天明二年(皇紀二四四二)先にピヤ・タクに従つて戦功をたてたチャクリが推されて王位に即いて、バンコックに都しました。これが今日のタイ國のチャクリ王朝であります。タイ國は佛敎國で印度文化の影響を多分に蒙つてをります。

次に半島圏の第四の民族はチベット・ビルマ族であります。このうちで最も多數を占めてゐるのがビルマ人であります。ビルマ人はタイ族と同人種で、雲南方面からサルウィン河に沿つて南下して來たものであります。そしてビルマの北方に定住したのがシャン族で、やがて更に南下して居住したのが、カレン、モン、の諸族であり、イラワディ、チンドウインの兩河に沿つた谿谷に移住して、原住民との間に混血

種を生じ、なほビルマ人よりは後れてビルマの西北地方にチベット族が侵入して來ました。このやうにしてビルマには三つの民族の集團を生じ、更に西方印度からインドアーリアン族の浸潤があり、前の三集團の民族との間に衝突を見たのであります。文化的にはこのインドアーリアンの影響が著しく、全面的に佛敎化されて行つたのであります。ビルマの歴史には國內諸民族間の紛争がたえず見られ、それだけ昔から獨立心に燃えてゐることを注意すべきであります。

次に半島圏の民族の第五に算へるのが、インドネシア人即ちマライ人であります。これは島嶼圏の方で述べることにいたします。

## (II)

赤道の南北にわたる大小の島嶼圏の民族は大別して五つになります。一は、ミクロネシア人で日本の南洋群島廳下の島嶼の住民であります。二は、ポリネシア人で



ハワイからニューギニアを連ねる島々の住民であります。三は、メラネシア人でニューカレドニア、ニューギニア等の島々の住民であります。四は、オーストラリア人で濠洲及びタスマニアの住民であります。五は、インドネシア人即ちマライ人で、マライ半島、スマトラ、ジャワ、ボルネオ、セレベス、フィリッピン等の南方圏島嶼の主なる住民であります。地圖に大體を示しておきましたからごらん下さい。本講でいふ島嶼圏の民族は右五つのうち、インドネシア、メラネシア、ミクロネシアの三つであります。

インドネシアはまたマライシアともいふ。これはこの島嶼をインドネシア即ち東印度諸島とも、マライシア即ちマライ人の住む土地といふ意味で呼んでゐるからであります。島嶼圏民族中最も重要な要素をなし、マライ語が島嶼圏の最も広い通用語になつてをります。

このインドネシア人またはマライ人と呼ばれる人種のうちには、更に多種雑多な種族があり、方言があります。フィリッピンだけでも、種族の数が四十三、方言の数が八十七もあるといはれてゐます。このマライ人のうちにアジア大陸からの移住民の屬が加つて新舊のマライ族を發生せしめ、舊い方を文化程度、居住地によつて原始マライ人と古代マライ人とにわけ、新しい方を近代マライ人または海岸マライ人といつてゐます。原始マライ人や古代マライ人はスマトラ、ボルネオ等の奥地や未開地に逐ひこめられて、海岸、平地を占據し、航海術に優秀な技能を發揮したのが、近代マライ人また海岸マライ人と呼ばれるものでありまして、今日この大部分が回教徒であります。

次にメラネシアに屬するのはニューギニア島及びその附近の島嶼に住む原住民でマライ語を語らない。その文化程度は頗る低いのであります。それからミクロネシアといふのは前申した通り、わが南洋群島の住民であります。

以上南方圏の民族について大觀いたしましたが、その民族が多種雑多であると共



に、その文化の程度のへだたりが、また甚しいのであります。低いになると石器時代そのまゝといつてよい原始的な生活をしてゐるニューギニアのパプア人があり高い方では半島圏は勿論さうであります。島嶼圏のジャワ、フィリッピンの住民になると、著しく文化程度が高いのであります。従つて南方圏の民族や文化を十把一からげに考へることが最も誤つた考でありまして、日本人に先づこの認識が要求されるのであります。

## (三)

文化的に南方圏を大観いたしますならば、第一講でも申しましたやうに、各民族の固有文化、支那文化、印度文化、回教文化、西洋文化の五つになるのであります。例を爪哇にとりますと、爪哇の歴史は四期に分けて見ることが出来ます。第一期はジャワ原住民の時代、第二期はヒンヅー時代、第三期は回教時代、第四期は蘭

人統治時代であります。そしてその各時代の文化を特色づけるものは宗教であります。

アムステルダムに国立植民地研究所がありますが、その博物館に舊蘭領印度の宗教を象徴した四つの浮彫があります。本書の表紙に示してあるのがそれでありま

す。即ち、アニミズム、佛教、回教、キリスト教であります。アニミズムといふのは、あらゆるものに靈魂を認め、これを禮拜する原始的な信仰であります。自然宗教と名づけておきます。尤もこの自然宗教も民族によりまして、その内容がそれぞれ異なるのでありますが、この民族に固有した信仰及びそれを基調とする文化といふものは、非常に根深く、常にその民族の生活のうちに生きてゐるものであります。この固有の文化が、他の文化の影響を受けながら、なほ現在に存する適例として、ジャワの影芝居ワイヤンをあげて見たいのであります。このワイヤンは薄い小牛の革でつくつた人形で、それは小さい鑿くわで、緻密な彫刻が施してあります、ダーラン



といふ人形使ひがこの人形を巧みにつかつてその影を幕にうつして観せるのであります。このワーンを研究した人の説によると、これはジャワ人の自然宗教であるアニミズム特に祖先の靈魂禮拜にその起源を發してゐるので、偉い人の結婚式とか葬式などにこの影芝居がやられ、悪い病氣が流行したり、凶作の時に村人が人形使ひのダーランの所に行つて御祈りを頼むと、ダーランは人形の入つた木箱の前で香を焚いて、菓菜を具へ、呪文を唱へてお祈りをするさうです。即ちジャワの影芝居は宗教的な意味がその本來のものであります。ところが劇としてワーンの内容を豊富にし、おもしろくしてゐるのは印度文化、アラビヤ文化の影響であると申しまゝす。印度人はすでに西暦紀元一世紀頃からジャワに移りかけ、四世紀には盛んになり、五世紀には佛教がジャワに傳つた。ジャワ人のワーンの内容は印度の昔物語、印度の有名な叙事詩のラーママーヤナ或はマハーバーラタからとつたものといはれてゐます。後にアラビヤ人が來てイスラーム教が入ると、ワーンの人形の様子

が變り、面と體は引伸ばされて手と足を馬鹿に長くしたものになりました。かくの如くワーンは印度文化、回教文化の影響を受けてゐるにかゝはらず、元のジャワの民族信仰、民族文化が決して失はれてゐない。そして西洋文化の支配時代になつても、現にジャワ民衆の生活のうちに、根強い存続を示してゐることは、南方圏における固有民族文化の強靱性を考ふる上に参考になる事柄であると存じます。

【附】こゝに掲げたジャワの俳優の寫眞は、ソロの王室直屬の俳優のものであります。劇は主として時代劇で、口碑に傳はる古代の英雄譚からとつたものであります。

なほ表紙に示したアニミズムの浮彫に見える崇拜の對象物に類似した寫眞が見つかったから参考に掲げておきます。ティモール島の北方にあるアロル島の住民（原始マライ人）が崇拜するナーガであります。下の寫眞は彼等がキリスト教に改宗した時ナーガを焼却してゐるところであります。



## 第三講 支那文化

— 南方圏に廣く浸潤してゐる華僑の生活文化 —

(一)

海外にある支那人を華僑といひます。華は中華の華、僑は僑居の僑で、かりずまゐ、たびのやどりの意味であります。華僑は全世界に約一千萬人存在し、そのうちの七、八割、即ち七百萬乃至八百萬人は南方圏にゐるといはれます。正確な數字はわかりませんが、泰國、英領、マライ、蘭印が最も多く、いづれも二百萬を超えてゐると思ひます。それに次いで佛印、ビルマ、フィリッピンが多く、南方圏のどこへ行つても華僑のゐないところがないといふ程、華僑は南方圏の人的構成要素として重要な位置を占めてゐるのであります。支那人が南方圏のことを支那人の南洋と

いつてゐるのも、無理ではない程多いのであります。特にマライ半島における華僑の勢力は甚大で、シンガポール時代の昭南市の如きは昭和十六年二月發表の人口七六〇、二二六人のうち華僑は五九一、七〇四人で總人口の七八%を占めてゐたのであります。大東亞共榮圏における華僑の問題は、今日以後吾々の重大關心事でなければなりません。

(二)

華僑の出身地は、福建、廣東、海南島、汕頭、客家（福建省廣東省及び廣西省の相境する高地に住す）が主なるもので、就中福建人が南方圏全體としては一番多數で、それに次いで多いのは廣東人です。尤も場所によつては廣東人の方が多いところもあります。佛印では廣東人の方が斷然多數で華僑總數の五〇%を占め、福建人の方が二〇%に當ります。西貢・堤岸附近がこの廣東人の特に集つてゐるところで、西貢だけは廣東語で



なければ通じないのです。泰國でも廣東人の方が多く、その大部分が汕頭附近の潮州人、それに次ぐのは海南島人であります。しかし潮州は省は廣東ですが、言葉は福建語系であります。右の外の南方圏においては福建華僑が多く、言葉も福建語なら、どこでも通じます。臺灣語も福建語であります。

さて支那人、特に福建人や廣東人が、何故かくの如く多数南方圏へ進出したでせうか。それは、これ等の地方が南方圏に近いためでもあります。また一つには福建、廣東の地方的經濟事情にもよります。即ち福建が山地が多く土地が瘦せてゐて生活が困難である。廣東の方は人口が多過ぎる。かういふ事情がある上に、支那人の郷黨相ひき、相たすける民性も同一出身地のものが、同一地方にかたまるやうになつた一原因であります。一體支那人の海外進出は、全く政府の保護奨勵を受けないうでなされた。保護奨勵をしないばかりか、海禁といつて、海外渡航を禁じてゐたのであります。清朝が數百年にわたる海禁を廢棄したのは光緒十九年、わが明治二

十六年のことでもあります。従つて支那人の南方圏への進出は、個人的進出でありまして、それは一つには南方圏が生活に恵まれてゐるために牽きつけられたことにもよりますが、また一つには支那が軍閥の横暴や土匪の跳梁するなどがありました。この社會的不安が國民の海外進出を促したためでもあります。またヨーロッパ人の南方圏への進出によりましても刺戟され促されたことも考へられます。更に支那人のどこにでも平氣で樂に住み得る適應性も然らしめたものでありませう。

## (三)

右のやうに申しますと、支那人がはじめから、移民や商人として南方圏に進出したやうに聞えますが、使節や僧侶の往來も夙くからあつたのであります。南方圏への使節はすでに漢代にあつたといはれます。また支那で佛教が盛んでありました頃、佛教の經典を求めたり、或は佛跡を巡禮するために支那の僧侶で印度に赴いた



人々が相当多數ありました。當時の交通路は西域を経由する陸の西域路と海路による南海道とがあり、海路の方が南方圏を経由したものであります。支那僧の南方圏渡航の記事で一番古いのは東晋の僧の法顯のものであります。法顯は安帝の隆安三年わが仁徳天皇崩御の年（皇紀一〇五九）に數人の従者を連れて長安を出發して陸路印度に赴き、歸りは海路によつたのであります。これは今から千五百年ばかり前のことであります。佛國記によりますと、法顯は師子國（セイロン）や耶婆提（ジャワ）等を経由して歸つたとあります。耶婆提國はジャワのことであります。ジャワといふ島名は印度人がこの島をジャワドヴィーパ（米の島）と呼んだのに由來するといふことであります。これから少し話を飛ばしますが、唐代即ちわが奈良時代から平安時代にかけて盛んに交通した唐代であります。唐代の後期頃から南方圏に渡航する支那の船舶も多くなり、一方アラビヤ商人の支那に來て貿易に従事するものもあり、廣州（廣東）や泉州等がその中心で、アラビヤ商人を介しての南方圏との



搗米の島ワジャ



貿易も盛んに行はれました。日唐貿易及び次の日宋貿易によつて、わが國で輸入した唐物のうちには香料をはじめとして南方圏の産物も随分まじつてゐたのであります。これ等は主としてアラビヤ商人によつて支那にもたらされ、支那商人によつて日本にもたらされて、平安時代の貴族や僧侶に喜ばれたのであります。唐から宋にかけて、支那人の南方圏進出がだん／＼見られるやうになりました。唐代の僧侶で最も詳しい南方圏の記事をのこしたのは義淨であります。義淨は咸亨二年わが天智天皇崩御の年（皇紀一三三一）に廣州を出發し、スマトラの東南部にある室利佛逝國（パレムバン、デアムピ地方）に立寄り、そこから佛逝の王の所有船で印度に向ひ印度のタムラック（ガンヂス河口）に達し、經文を求むこと十年、歸途再び佛逝國に立寄つて、そこに居ること六年、出發以來十九年ぶりで廣州に歸りましたが、同年の冬また佛逝國に行つて歸りました。義淨の通うた道筋から考へると、當時支那から印度に至る航路はマライ半島の東岸を南下しスマトラやジャワを経由するのが常であ



つたやうであります。

## (四)

わが清和天皇の貞観十七年(皇紀一五三五)唐に黄巢の亂が起り、廣州も危殆に瀕しましたので、在留外人が西に引き上げましたが、この時支那人で難を避けてスマトラのパレムバン地方に移住して耕作に従事したものゝあつたことが、アラビヤ人のスマトラを訪問した旅行記に見えます。即ち唐代にすでに南方圏への支那人の集團的進出があつたこと、しかもそれが亂を避けてのことであつたことは、支那人の南方圏進出の歴史の上に注意すべきことでもあります。かういふ例は後世にも多く見られるのであります。

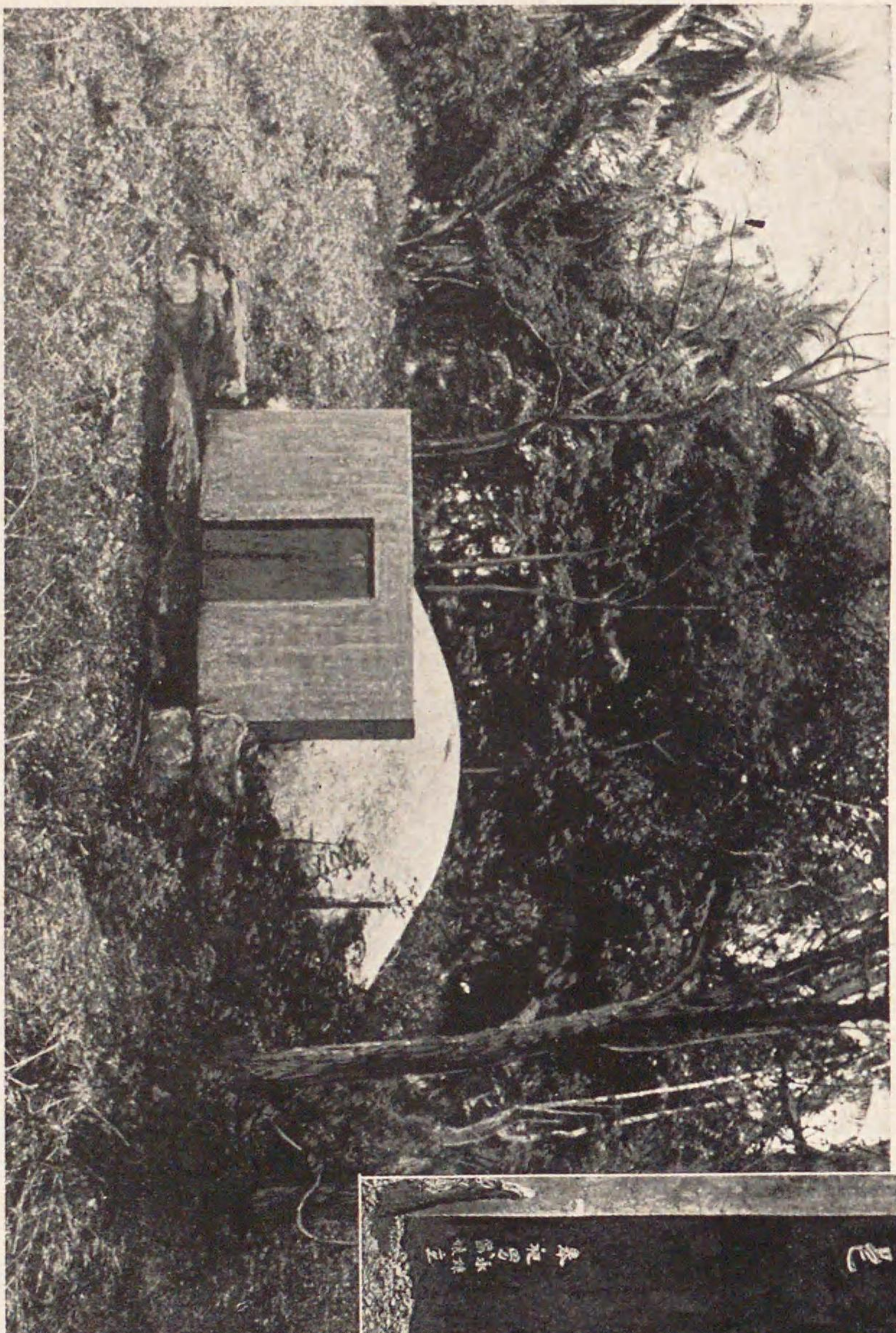
宋の次の元代になりますと、海上交通は中々盛んで、泉州・上海・澈浦・温州・廣東・杭州・慶元<sup>(寧波)</sup>等に市舶司といふ海上貿易を掌る役所を置きました。なほ元

代における南方圏との交渉において特筆すべき事件は元の爪哇遠征であります。わが國に元軍が襲來した弘安四年から十一年後、至元二十九年(皇紀一九五二)に始まり、ジャワのケルタナガラ王の時であります。世祖は史弼(陸軍)亦黒迷失(海軍)をして福建・江西・湖廣三省の兵約二萬の兵を發してジャワを攻めてこれを降したが、この遠征は元軍の損害が多くて成功したものといふことが出來ません。世祖はまた一方、スマトラ及びマライ半島に使を遣はして宣撫降貢を傳へさせ、スマトラ、ジャワ、マライ半島、ボルネオ等南方圏一帯に元の勢力を及ぼして、今日この方面における華僑勢力の基礎を築いたのであります。

元の次には金陵(今の南京)に據つた朱元璋が、明の創業に成功しました。これはわが吉野時代の正平二十三年(皇紀二〇二八)のことでありました。明は貿易を、經濟上の利潤のためばかりでなく、それによつて自己の力を中外に誇示しようといふ政治的意圖をもつて、海外諸國に對してそれを單に貿易の對象としてではなく、



入貢の形をとり、その正朔を奉じ、從屬することを要求したのであります。入貢とか朝貢とか體裁のよいことをいつてゐるが、實は貿易の一つの形にすぎないのであります。成祖の時には安南に兵を出してその地を併せ、また宦官鄭和に命じて兵を率ゐて南方圏諸國を經略せしめました。鄭和は前後七回(皇紀二〇六五—二〇九〇)南方圏から遠く波斯灣まで進み、都合二十餘年の間に招撫朝貢せしめた國三十餘國を算へ、チンバ占城・カムボヂヤ眞臘・シヤム暹羅・マラッカ滿刺加・ボルネオ渤泥・ジャワ爪哇・スマトラ蘇門答刺・ベンガル榜葛刺・セイロン錫崙等の諸國みな來貢するやうになりました。明代になると明の舶の南方圏への交通も漸く盛んになり、その渡航地には支那町がつくられ、この支那町はチエン澗又は澗内の文字を以て表し、フィリッピンではバリヤンと呼びました。そして支那町には甲必丹があり、バタビヤには立派な甲必丹の墓が澤山残つてゐます。バタビヤ最初の甲必丹を蘇鳴崗ソウビンゴンといひました。寫眞はその墓です。



明 甲必丹蘇鳴崗墓



(五)

わが戦國時代になつて西洋人が南方圏に進出するに及びまして、支那人のこの方面への進出は一段と活氣を加へて、一時期を劃すやうになりました。即ち西洋人によつて南方圏の開拓が進むにつれて、これと貿易のために、支那船の入港するものも増加しました。南方圏各地方で開發のために特に勞働力の需要が多くなるに及び各地の當局者は困苦に耐え、從順で賃銀のやすい支那の勞働者や職人等を歓迎いたしました。ジャワの聯合東印會社でも支那人を随分備うた。そしてこの頃移民は男子の單身渡航者が多かつたから、バリやスンダの住民の女が好んで支那人と結婚したのであります。奥地では支那人と固有の南方圏住民との融和が比較的容易であつたが、都會地では先に述べた如く支那町を形成して固有の住民とは分離して生活をしました。明が滅んで清朝が起るに及んで、海禁を實施した。官吏兵士等が私かに



海外に出洋し、或は交易する者は、通敵の罪をもつて論じ、共謀の地方官吏も亦同罪を科すと布告しました。しかし三藩の亂以後は密に下海移植するものが益々増加しましたので、清朝は堅壁清野の計を樹て、沿海五十支里内に人民の居住を禁じたが、これにより匪賊の横行を容易ならしむるに至りましたので、康熙二十三年わが貞享元年（皇紀二三四四）臺灣平定後は海禁を解き、從來の出洋者に歸國を許しました。しかし雍正六年（皇紀二三八八）彼地に在留して歸らないものは皆異域に甘心せるものである、違禁密航者は回籍を許さないことにしました。乾隆十四年（皇紀二四〇九）には爪哇に密航しようとしたものに對して懲治を嚴加すと諭告を發しましたが、以上數次の密航者處罰令は外洋に赴いたものを益々その土地に土着せしむる結果を見たのであります。當時出洋の認可を得るには保證人を立て、期限を定めて官廳に願ひ出でることになつてゐました。道光二十二年（皇紀二五〇二）わが天保十三年阿片戦争の結果清朝と英國等との間に通商條約が出来ましたので、密航の

禁令は自然廢棄せざるを得なくなりました。支那において、何故出洋を禁じたかと申しますと、支那では移民なるものは先祖の墳墓を放棄し、國家の基礎的な社會法則を破つた卑しむべきものと考へられたのであります。従つて支那歴代の政治家は華僑に對して何等の保護手段を講じなかつたのであります。海外華僑の多數に上るに及んで、彼等の海外活動が祖國に貢獻することを知り、清國政府も領事館を設置して華僑を保護するやうになりました。

支那における革命が成功して中華民國が出来てからは、本腰に華僑工作に乗り出して、國民政府は僑務委員會及び華僑招待所を設けました。これは華僑の保護も勿論目的であるが、更に華僑の支持と財的援助を求めためであつたのであります。支那事變以來、支那各地から南方圈特にマライ半島に避難した人數は夥しいものになりました、シンガポールの華僑は、陳嘉庚を盟主とする華僑籌賑會等があり、つい最近まで重慶政權の有力な後援團體を組織して、英米にあやつられて大東亞共榮



圏建設の妨害をなしてゐたのであります。しかし、マライ半島をはじめ、南方圏の華僑は、皇軍の戦果擴大と共に、必ず覺醒するやうになると信じます。たゞ功利的な彼等の指導は決して、簡單に考へてはならないのであります。

前にも申しましたやうに、支那人の南方圏進出は半島圏において最も古く、島嶼圏の方は所によつては古くからの所もありますが、多くは近世歐人東漸以後に多くなつたのでありますから、これも一まとめには申されませんが、既に混血して南方圏の社會に浸透してゐることも顯著であります。混血の者は所によつて、いろ／＼と呼ばれてゐます。マライ半島やスマトラ邊では峇峇ババと呼ばれ、ジャワではペラナカンと呼ばれてゐます。これ等の混血兒は殆んど支那語を話すことが出來ないにかはらず、儀禮や慣習において、支那式なものを生活のうちに保つてゐるのであります。この生活文化に浸透して根をはるところに、支那文化の強靱さがあるのであります。



梵天像





像ヌユシ#

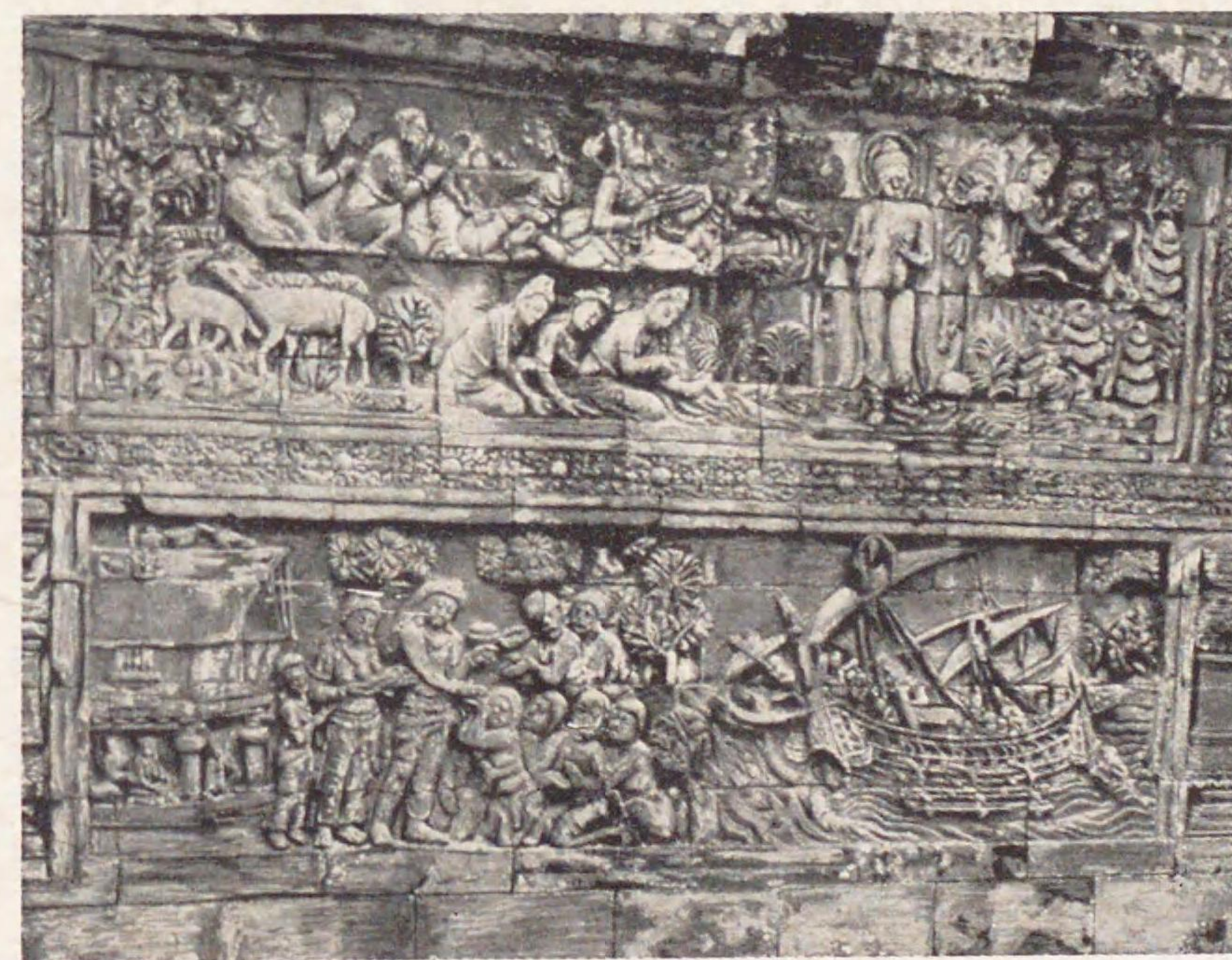
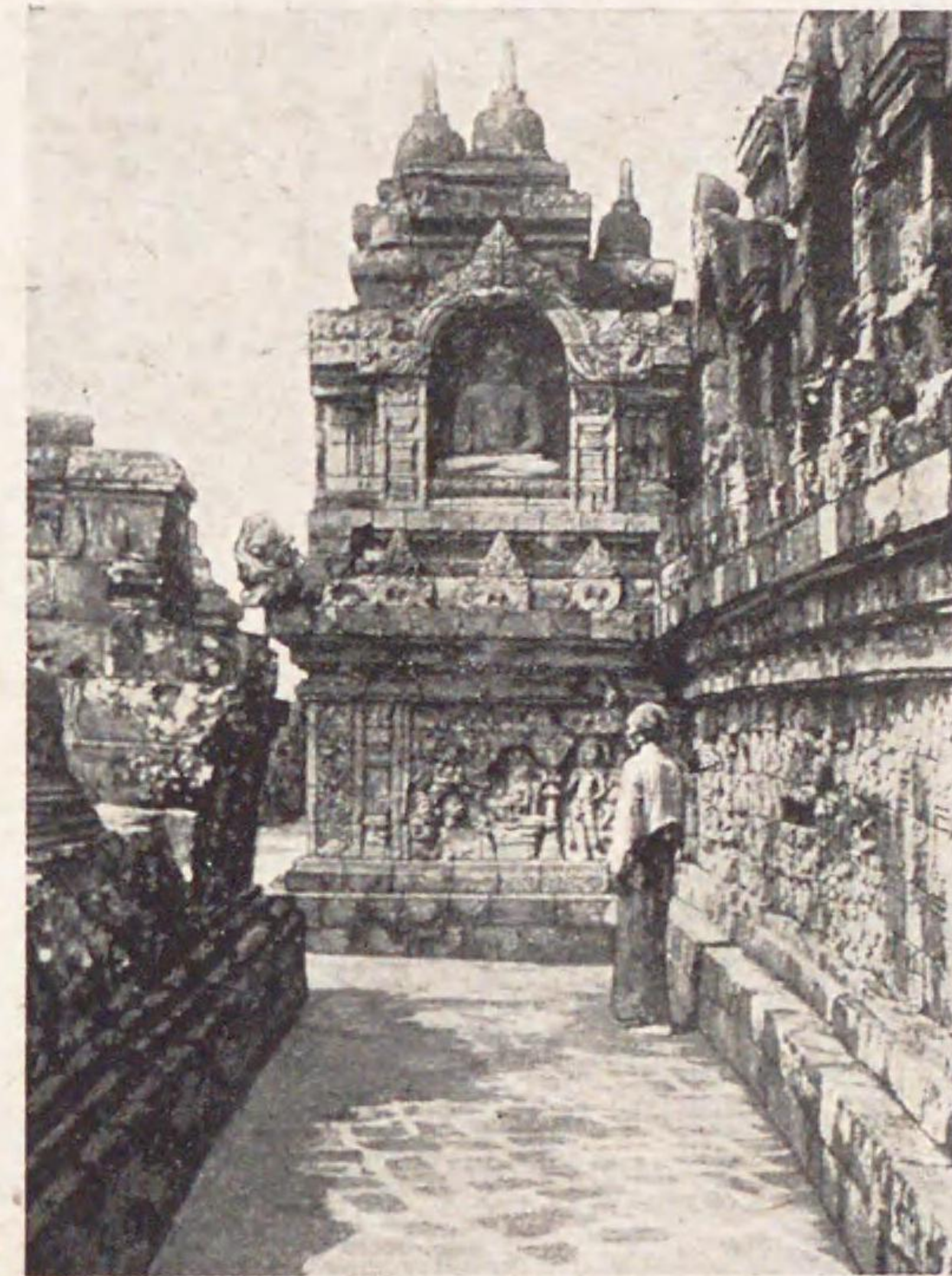


像ワシ



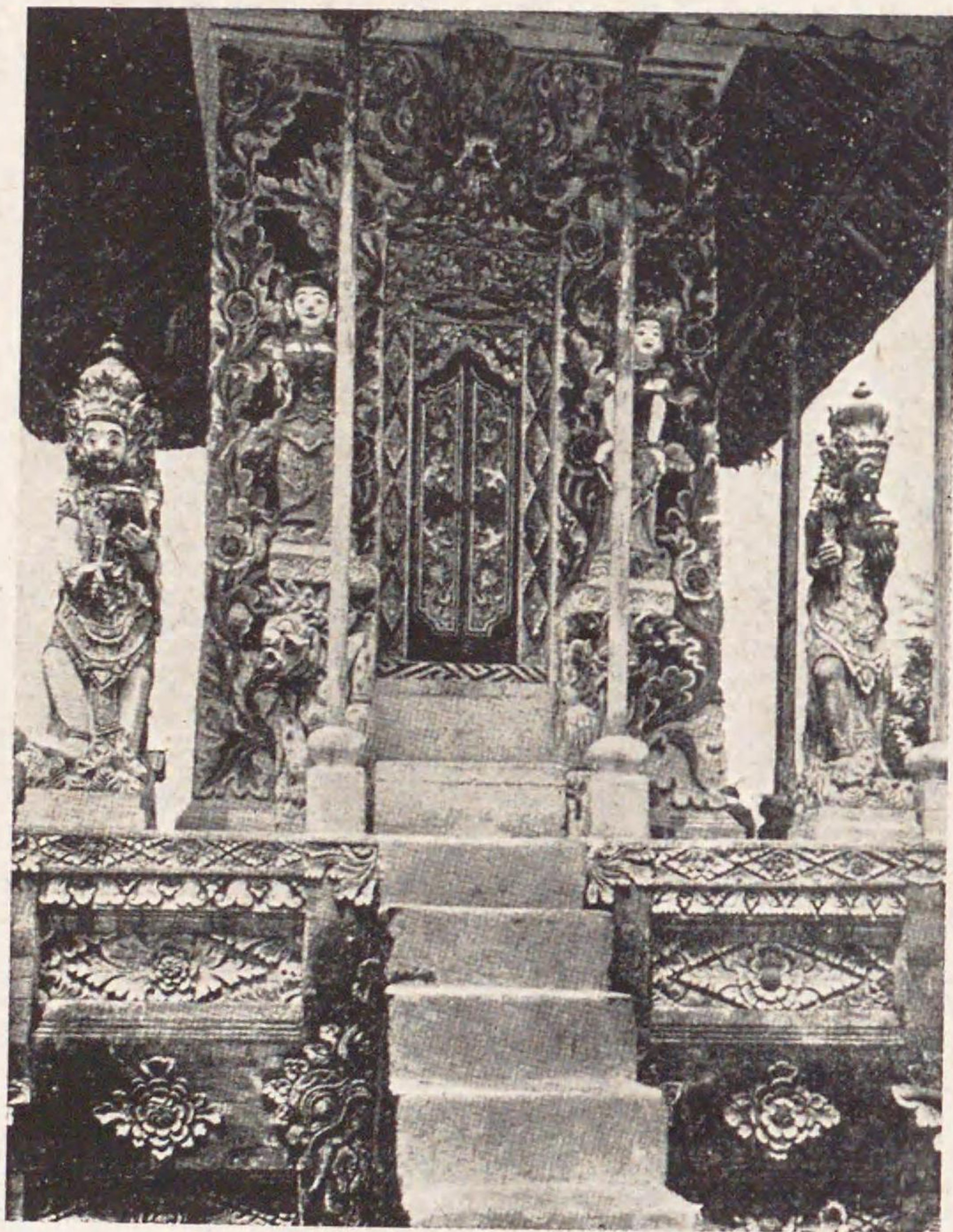
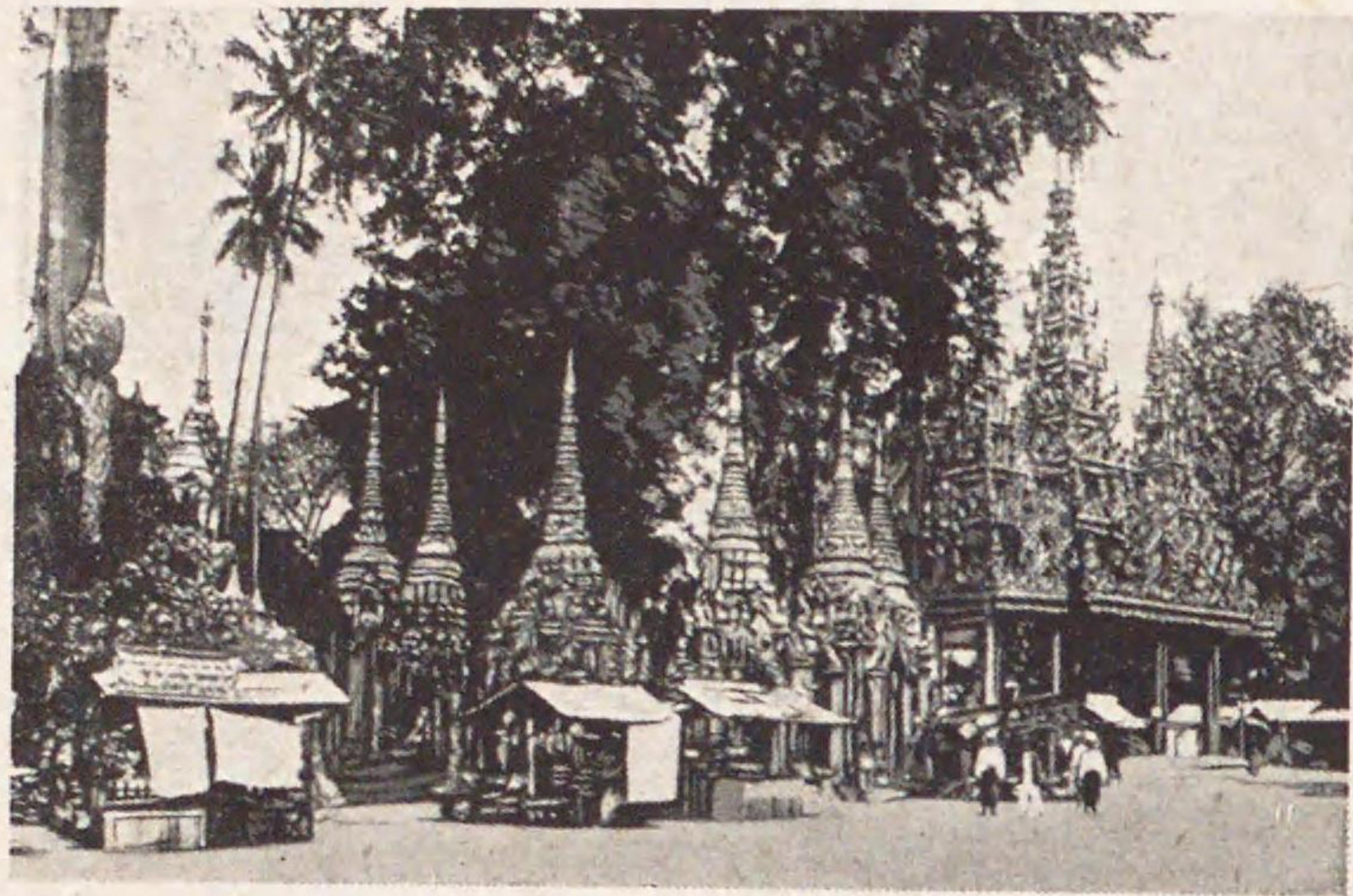


像佛のルーッドブラバ

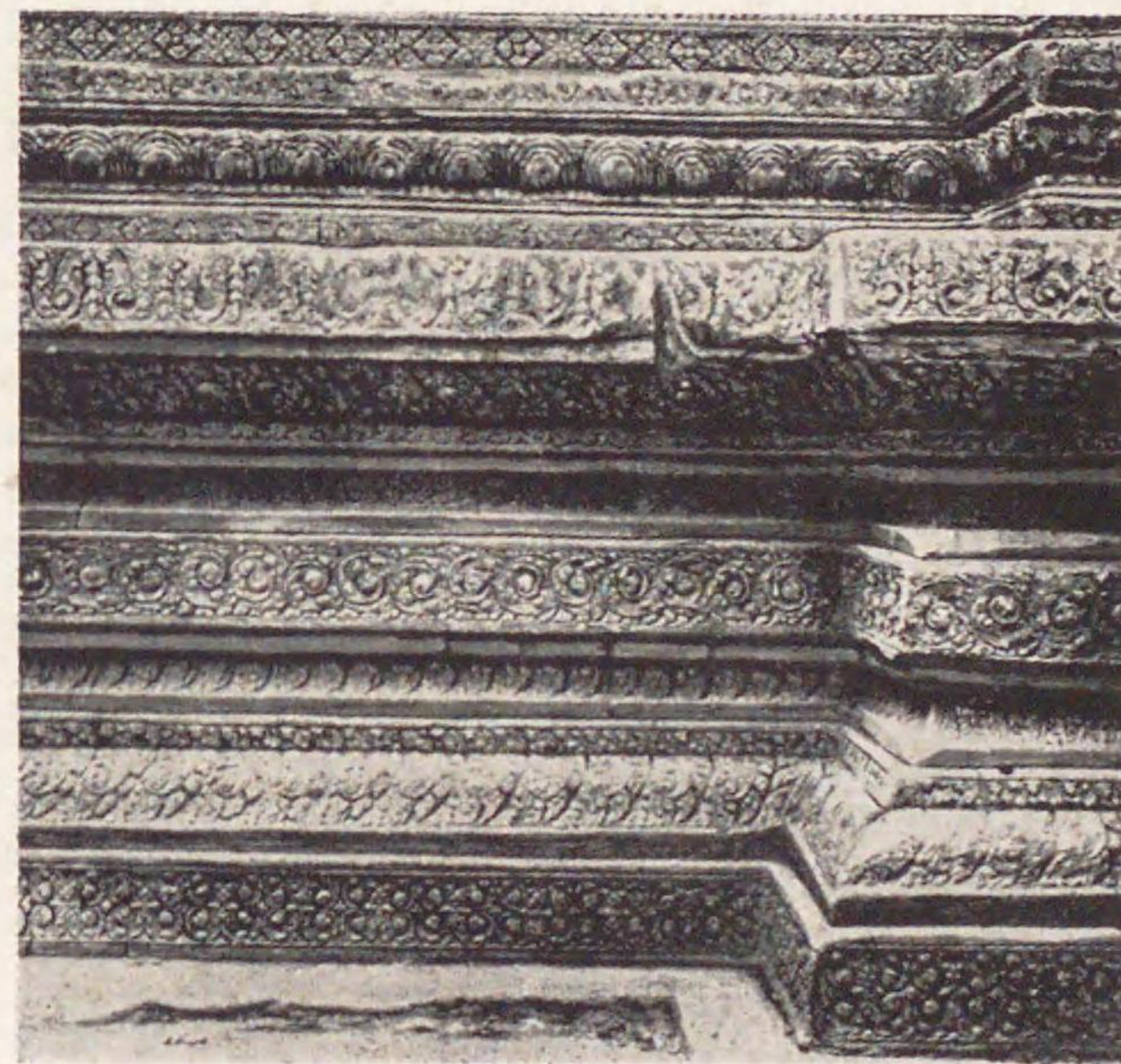
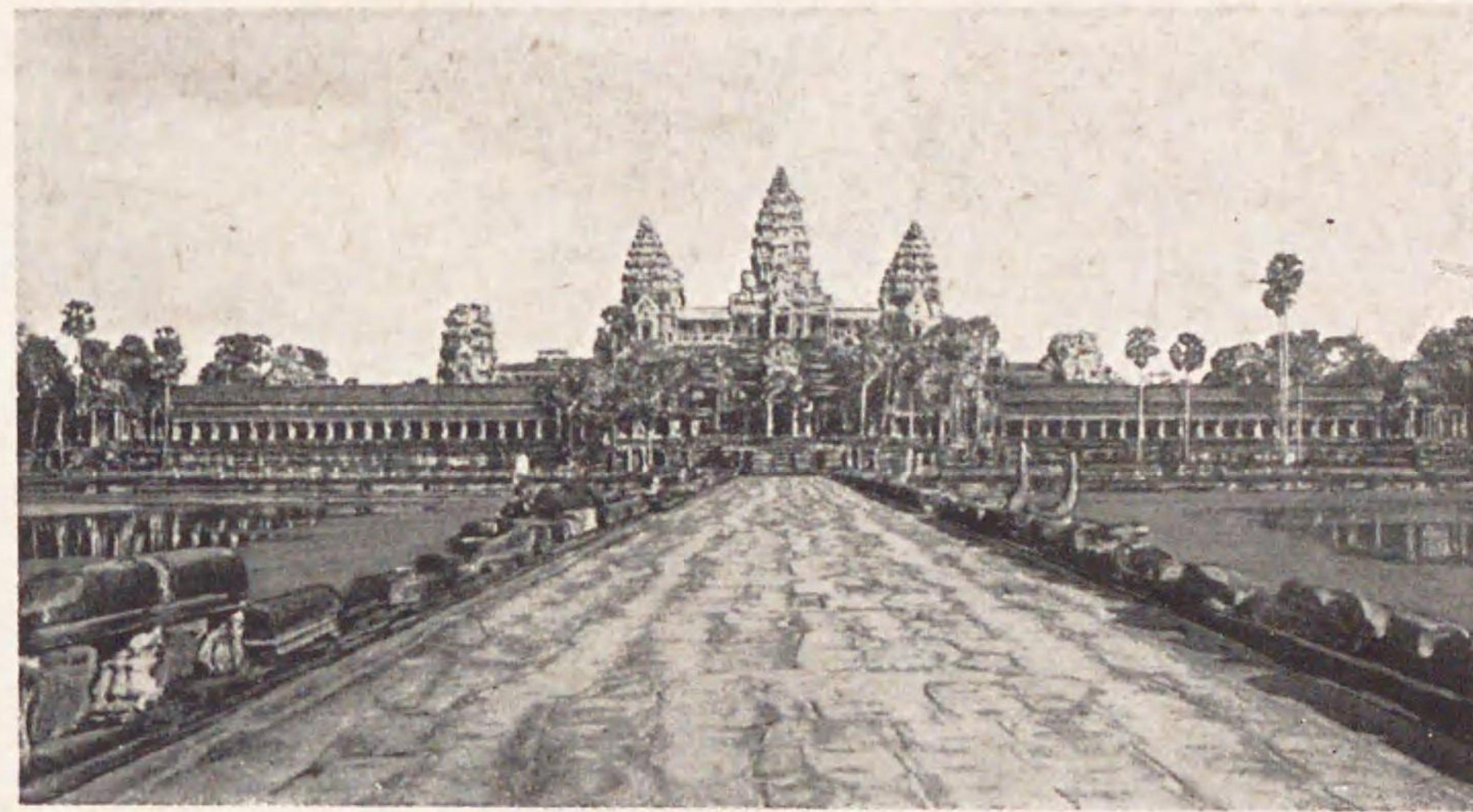


蹟佛大のルーッドブラバ





堂佛庭家の島リバ 寺のンーグンラ



刻彫のそび及トッワ・ルコンア





ク ッ イ テ バ

#### 第四講 印度文化

— 南方圏を光被した印度の宗教文化 —

(一)

支那文化の次に印度文化を講じますと、何となく年代の前後がさうなつてゐるのかと思はれるおそれがありますが、これは便宜上のことで、或る場所では印度文化の方が先であり、或る場所では支那文化の方が先になつてゐるのであります。

インドス、ガンヂス等の大きい河の豊かな流域をもつ農業國印度は、支那と共に東洋における二大文明の發祥地であります。この印度の文化をつくり上げたのは印度アーリアン民族であります。このアーリアンの印度侵入は前後二回にわたつて行はれました。その第一回の侵入者をヴェーダ吠陀讚歌を持つてゐるアーリアンと呼び、彼等



はヒンズークスを越え、はじめインダス河の上流のパンジャブ地方に定住し、吠陀文學を創り、種姓の制度をはじめました。

吠陀は神々の祭祀に際して神徳を讚美し、その加護を願ふ讚歌を集めたもので、西紀前千年頃には已に編集せられたといはれてゐます。この吠陀の説明的文献に奥義書ニシャットといふ哲學があります。これを基礎として組み立てられたのが婆羅門教で、その崇拜の中心は梵天ブラフマーであります。

この民族の社會階級制度は頗る嚴重で、第一階級は祭祀を司る神職でこれを婆羅門とよび、第二階級は王者及びこれに屬する武士、第三階級は一般民衆、第四階級は被征服民である賤民であります。

次に第二回目に印度に侵入したアーリアン民族を吠陀をもたないインド・アーリアン民族と呼びます。これはパミール或はメソポタミア方面より侵入して中印度の西、南、東部へと移動發展しましたが、彼等は吠陀の儀式に反對し、先住民族とも

混血し、階級制度を嚴守せず、反婆羅門教の自由思想の所有者でありました。

婆羅門の宗教が一時印度の思想界を統一した趣きがあり、ウパニシャット哲學研究の結果は數十の分脈を生じましたが、そのうち名高いのは六派哲學であります。婆羅門の社會制度が固定しその思想が硬化するに及んで、反婆羅門の思想が生じ、佛教と耆那教ジャイナとが産れました。就中釋迦の佛教が最も偉大なるものであります。佛教は人類に眞の平等解脱の道を説いたもので、婆羅門教の民族的なるに對して佛教は普遍的宗教であります。

## (11)

印度佛教史は(一)原始佛教時代、(二)部派佛教時代、(三)大乘佛教時代、(四)密教時代と普通四期に分けられてゐます。釋尊の出世年代については諸説があります。が、皇紀二七五年に八十歳で入寂したといふ説をあげるにとどめておきます。釋尊



の成道から佛滅後三十年間位を原始佛教の時代と申します。その後、佛教教團の中に、律及び法に關する見解の相違から長老達の保守派と、若い比丘達の進歩派の對立を見るに至りましたが、やがて進歩派の比丘達が獨立して大衆部と稱し長老達の一派は上座部と稱し、佛教教團は二つに分れましたが、これは阿育王(皇紀四六歿)の晩年か歿後のことであらうといはれてゐます。阿育王の歸依したのは上座系統の佛教でありました。その後更に大衆部からも上座部からも分派を生じました。上座部の佛教がいはゆる小乗佛教ヒナヤナであり、大衆部の佛教がいはゆる大乘佛教マヘヤナに發展したのであります。大乘・小乗の乗は乗物の意味であります。迷ひの岸(此岸)から悟りの岸(彼岸)に衆生を運ぶ乗物の意味であります。大乘は菩薩乗と申して、菩薩の行願たる衆生濟度を理想とし、小乗は聲聞乗と申して、個人の救済に重點をおく阿羅漢への到達を理想とする戒律中心の佛教であります。中央亞細亞から支那朝鮮を経て日本に傳はつた佛教を北方佛教といひ、大乘佛教であり、梵語の經典を所依と

するものであります。それに對して、セイロンからビルマ、タイ國方面に傳はつた佛教を南方佛教または南傳佛教といひ、教理の上から小乗佛教に屬し巴利語パリーの經典を所依としてゐます。

大乘佛教の時代は皇紀一三六〇年頃まででありまして、その後、大乘佛教時代後期の觀念的な教學の反動として事相に重きをおく密教時代が展開したのであります。しかるに印度の佛教は左道密教にわざはひされまして墮落をいたし、遂に皇紀一八六三年わが鎌倉時代のはじめに回教のために滅ぼされて、あはれ、佛教はその本土である印度から姿を消すことになつたのであります。

## (III)

以上便宜上佛教のことを一まとめにして申しましたが、印度は決して佛教一色にぬられてゐたのではないのであります。偉大なる佛教擁護者であつた阿育王の歿後



に英明の君主に乏しく、その國は次第に衰へ、皇紀四七六年に滅びたのであります。この情勢に乗じて、それまで壓迫されてゐた婆羅門教は復興し、佛教と婆羅門教との競争が益々はげしくなりました。一體佛教が婆羅門教にかちましたのは、四民平等の庶民宗教であつたからでありまして、この佛教の刺戟によりまして婆羅門教も民衆的な宗教に形をかへようとして、印度民衆の宗教的要求の一面である通俗的な迷信的な俗信仰と結びつく方向をとるに至りました。かくて婆羅門教の通俗化したものが印度教（ヒンヅー教）であります。正統婆羅門教と印度教との相違は、正統婆羅門教はその神に關する思想において觀念論的から一步進めて汎神論的な立場をとつてゐるに對して、印度教の方は人格的な唯一神を立て、神と人、神と世界との對立を強調し、この神が化現して一切衆生を救ふものであると見るのであります。主神は梵天ブラフマとギシュヌとシヴの三大神であります。この三神は同一絶對神格の三種の顯現で開發、保存、破壊をもつてその神格が呼ばれてゐます。民間では三神の神

格的な特色によつて、それぞれ自分の欲する神を最上とし、他を從屬神とするやうになりました。そして梵天は一般の信仰からだん／＼縁遠いものになりまして溫和神としてのギシュヌと破壊神としてのシヴの二神のみが、多くの人々から崇拜されるやうになり、印度教の主流はギシュヌ派とシヴ派の二大派に別れてゐるのであります。二神のうちでも、シヴの信仰が壓倒的で、民間ではシヴ一神の崇拜となつたと申してもよい位でありました。

## (四)

さて印度そのもの、宗教の説明はこの位にして、この印度の宗教文化が、南方圏に傳播光被した事柄の説明にうつります。先づスマトラ、ジャワ方面について申しますと、印度人（ヒンヅー人）はスマトラへ、それからジャワへと入り込みました。印度とマライ及びジャワとの關係はプトレマイオスの地理書に西紀二世紀の初にお



けるジャワの黄金に富んでゐることを記してをります。ジャワ方面への印度人の移住は西紀一世紀頃から見られ、西紀五世紀頃わが允恭天皇の御代頃から盛んになり多くのヒンヅー王國が建てられたのであります。

さて印度人はスマトラとジャワにいかなる文化を傳へたかと申しますと、宗教としては前に説明いたしました婆羅門教、佛教、印度教を傳へたのです。西部・中部ジャワに婆羅門教が主として根をはり、スマトラと中部ジャワには佛教が光被したのであります。佛教は主として上流支配階級に信仰されたやうであります。そして廣く一般民衆の間に浸透して、後まで影響を與へたのはむしろ印度教的信仰でありました。西部ジャワのヒンヅー人はギシュヌ教徒であつたらしいといはれてゐます。スマトラ及び中部ジャワに傳つた佛教は大乗佛教であります。遺物から考へると、印度教の影響のあるものでありまして、純粹な佛教と印度教と並存して影響を及ぼし合つたものか、それともジャワに印度教化した佛教が傳播したものか、これ等の點はなほ問題として残されてゐるやうであります。

## (五)

スマトラのパレンバンを中心としたシーリ・ヴィジャヤ國のシャイレンドラ王朝は有名な佛教王でありましたが、わが奈良時代の初め、中部ジャワを征服して、そこに外くの佛教伽藍や塔を建立しました。デョクジャの東方にあるカラサン寺の建立は皇紀一四三八年、光仁天皇の御代で奈良時代の終りであります。それからデョクジャの西北二十五哩の所にある有名なバラブドゥールの大佛蹟の建設は皇紀一五一〇年頃即ち平安時代の初期に着手されて、完成までには長い年月を要したであらうといはれてをります。この佛蹟が長く埋もれてゐたのは、ジャワ人がアラビヤ人の破壊からこの佛蹟を救ふために埋没せしめたともいはれ、また佛蹟の北にあたるメラピ火山の爆發のためであらうといふ説もあります。江戸時代の末期、ジャワが



英國統治下にあつた時代、副總督のラッフルズがこれを調査させてから、世にもてはやされるやうになりました。基臺が約五百尺四方、中央覆鉢の頂邊まで二百餘尺、暗青色の安山岩で築きあげたこの大佛蹟は、鐘形の石龕に安置されてゐる佛像、九層の臺座を繞る廻廊の浮彫、共に南方圏における佛教藝術の代表としてうたはれてをります。浮彫はジャータカ（佛陀の前生譚）及びそれに似たその他の物語から主題をとつてゐるさうであります。

## (六)

中部ジャワの佛教國スマトラのシアイレンドラ王家の勢力はわが醍醐天皇の延喜の頃から衰へかけて、代つて東部ジャワのサンジャヤ王朝が興隆しました。後、わが藤原時代になりました。東部ジャワ及びバリ島まで征服したエルランガといふ強大な王がりましたが、彼はギシユヌに歸依し、世人はエルランガを以てギシユヌ

の權化であると信じました。寫眞に示すギシユヌ像は實はこのエルランガ王であると申します。乗つてゐる怪奇な形をしたのが、金翅鳥といつてギシユヌの乗物であります。次にもう一つ寫眞に示すシヴ像は新モジョポヒツ王朝の建設者ケルタラジャサワのシヴ像であります。一體印度人の宗教は擬人的性格をそなへた多神論であります。ジャワに展開されたヒンヅー王國の佛教を見てもこのことが思はれるのであります。モジョポヒツ王國といふのはジャワのヒンヅー王國のうち最後にして最大なものであります。この王國はわが鎌倉時代の末に中部ジャワのモジョポヒツといふ部落から興りまして、わが室町時代のはじめにかけて、中部ジャワ、ジャワの東方諸島、ボルネオ、マラッカ、スマトラにわたるインドネシア民族としては史上空前の大版圖を有したのであります。間もなく回教徒のために滅ぼされるに至つたのであります。



(七)

ジャワの話ばかりいたしましたでしたが、附け加へてカムボヂャの佛教について申しま  
す。寫真に示すアンコル・ワット（アルコルの大寺）は西貢から西北方五百キロの  
奥地にある宏壯な石造の佛寺で、わが平安時代の初期、西紀でいへば九世紀頃の建  
立にかゝるもので、クメール文化の最高水準を今日に遺してゐる注目すべき南方圏  
文化の遺跡であります。アンコル・ワットの方もバラブドゥールと同じやうに純粹  
大乘佛教の遺跡でなく、そこには印度教的分子も含まれ、多彩なヒンヅー文化を示  
してゐるのであります。當時カムボヂャに榮えた佛教もスマトラ、ジャワと同じく  
大乘佛教であつたのであります。

今日セイロン、印度、ビルマ、タイ國、カンボヂャに行はれてゐる佛教は小乗佛  
教であります。この南方圏の小乗佛教は、セイロンの佛教を元にしてゐて、ビルマ、



僧那支 鉢托の僧イタ 僧のンロイセ



タイ國、カムボヂャの僧侶もセイロンに渡つて受戒して、祖師マヒンダの法燈を相承するを例としてゐるのであります。マヒンダは阿育王の王子でセイロンに佛教を傳へたといはれてをります。セイロンの外に印度のカルカッタを中心に佛教徒がゐますが、これはわが明治時代の初年になつて、矢張セイロン佛教を傳へたものであります。ビルマの佛教は神功皇后の攝政時代に傳つたと申します。現在ビルマには少數の印度教徒、キリスト教徒、自然宗教がありますが一千五百萬人の人口の八割四分が佛教徒であります。タイ國は今日佛教を國教としてゐる唯一の國でありまして、一千萬人の人口の九割五分が佛教徒であります。タイ國の佛教はビルマを通じて入つて來たものであります。それから今日のカムボヂャの佛教はわが吉野時代から室町時代にかけてタイ國のカムボヂャに對する政治的支配力の加はつた際に傳入したものであります。カムボヂャでは少數の印度教徒を除いて大部分の住民は小乘佛教を信奉してをります。ラオスも小乘佛教を信じてゐます。



なほ現在南方圏には以上述べました小乗佛教の外に大乘佛教も存してゐるのであります。安南には支那から道教・儒教と共に大乘佛教が傳はりまして、今日にその形骸を傳へてゐるのであります。タイ國、マライ半島等の華僑の間にも本國支那の大乘佛教が行はれてゐるのであります。

## (八)

南方圏に行はれてゐる佛教は、同じ佛教と申しましても、今日の吾々が日本の佛教で見馴れ聞馴れてゐる佛教とは、大分趣を異にしてゐることを申し上げなければなりません。日本の各宗に見るやうな種々な色衣や、美々しい袈裟などを用ひてゐるではありません。一樣に黄衣を纏ひ戒律を嚴重に守つてゐるのであります。ビルマでもタイ國でもさうであります。佛教徒の男子は一定期間寺院に入つて寺院生活を體驗してをりますから、僧侶に對する尊敬も日本などの比ではないのであり

ます。寫真にタイ國僧侶の托鉢を示しましたが、日本のやうに聲高にお經を誦んだり、鐘や鈴をうちならして托鉢するのではない、黙々として托鉢する。民衆は早朝焚立ての御飯と副食物を一輪の花と共に合掌してさゝげるのでありまして、實に敬虔なその風景は羨しい程であります。

インドネシアにおける印度文化の光被は實に著しいものがありました。地名にも言語にも今尙サンスクリット(梵語)から導かれたものが多く、それはフィリッピンにおいても多くを見ることが出来るのであります。曆も印度で皇紀一一五九年に出來たアーリヤバータがジャワに行はれました。それからこれは、ずつと後世のことと想像されますが、ジャワの民藝として有名な蠟染更紗(バティック)の技術はやはり印度のコロマンデル海岸から移入されたものであるといふことであります。



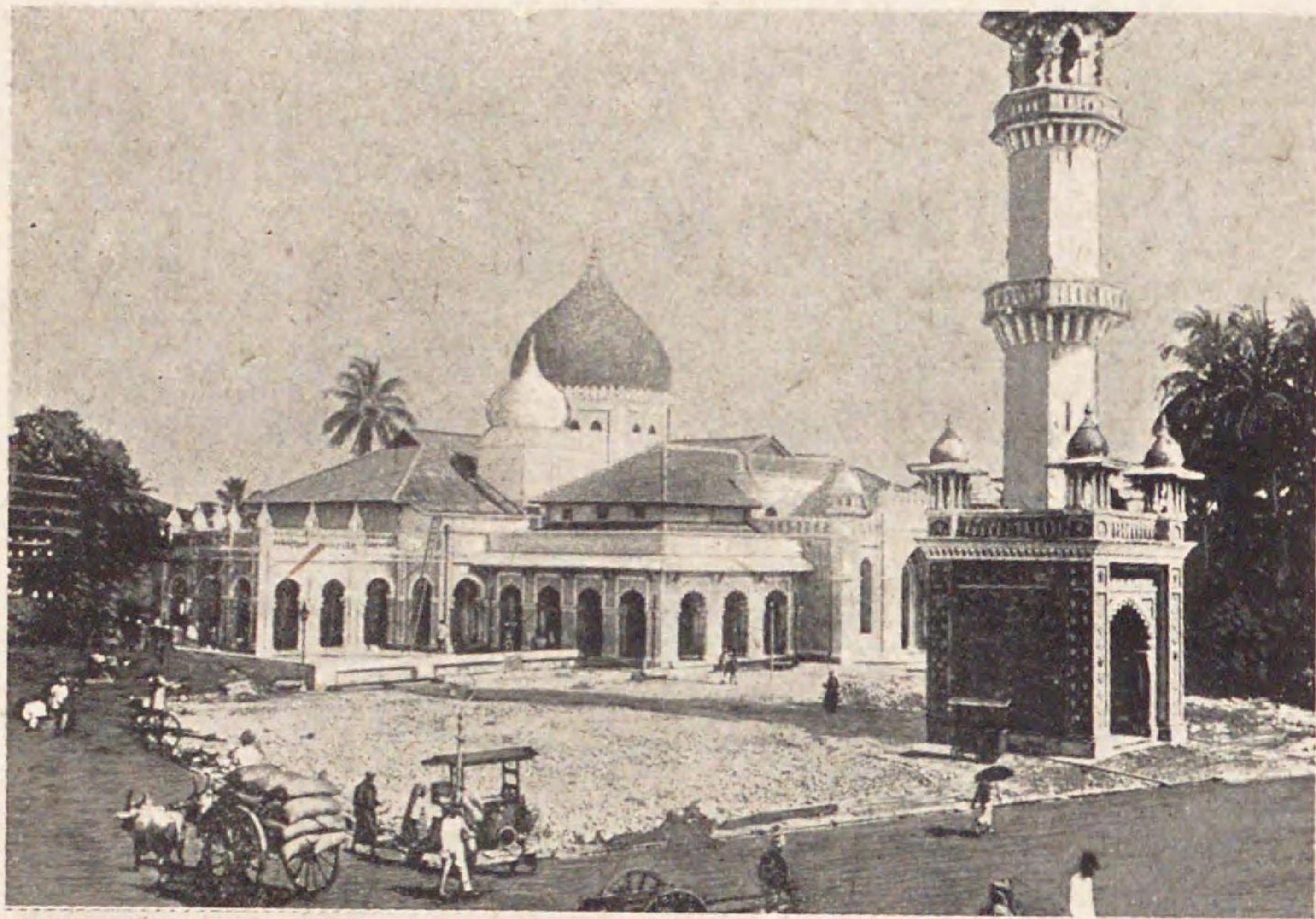
第五講 回教文化

—南方圏における有力なる宗教文化—

(一)

今日は従来一般日本人にとつて最も縁遠い回教文化のお話をいたします。回教は一般日本人には縁遠かつた宗教であります。大東亞共榮圏といふ廣い立場から申しましても、南方圏について申しましても、現在インドネシア住民の約九割が回教徒であるといはれてゐる有力な宗教でありますから、これからの日本人は回教に對して一段と關心をたかめる必要があります。

(二)



ワჯ(下) ンナピ(上) 堂拜禮教回





ロゴネ・ボイデ

佛教、キリスト教及び回教を世界の三大宗教と申しますが、そのうち佛教は最も早く皇紀一六〇年頃に開かれ、キリスト教は佛教よりおくれること約五百年、回教はキリスト教におくれること約六百年に開かれたものであります。即ちアラビヤの豫言者ムハマッド(皇紀一二三〇頃—一二九二)によつて開創されたのであります。ムハマッドがアラビヤ沙漠の西南涯メッカに生れましたのは、わが欽明天皇(佛教傳來の時代)の御代の末年でありました。ムハマッドは年四十餘にしてメッカの郊外の丘山に入つて俄かに豫言者たる自覺を懷くに至つたと傳へられてゐます。しかしメッカではアラビヤの固有信仰の叛逆者として迫害せられましたので、メヂナに赴き、そこで教勢が張つて、宗教としての地盤が出来たのであります。このメッカからメヂナへ避難したヒヂュラ(逃亡)即ち皇紀一二八二年を回教暦の紀元元年としてゐるのであります。

回教の正しい名稱はイスラーム(絶対なるアルラッブに對して歸依する義より出づ)であります。ムハマッド教



(ヨーロッパ風にマホ)とは教祖の名に因んで呼ぶ名であります。回教または回回教といふ漢字が宛てられてをりますのは、トルキスタンに占據してゐたトルコ系の回鶻(廻紇)人即ちウイグル人がわが平安時代の初期に回教に改宗したことから由來してゐるといふことであります。回教徒は五信と申しまして神(アルラーツ)、經典(クルアーン)、豫言者(ナビー)、來世(アヒラット)、定命(カダル)を信じ、五行と申しまして、信仰の告白(シアーハダ)、禮拜(サラート)、斷食(サウム)、喜捨(ザカート)、巡禮(ハッジユ)の實踐を勵行する。毎日五度(日出時、正午、夕方、日没後、就寢前)の禮拜と一週一回金曜日の禮拜所における禮拜を缺かさず、一生一度のメッカ巡禮を念願して働く回教徒は世界のうちにおいても最も敬虔、厳格な實踐的信徒といつてよいでせう。インドネシアの回教の八割までがシャアファイ派に屬してゐるさうであります。南方圏の回教は西南アジアのそれとは著しく趣きを異にして、この地方の回教徒は社會生活においても回教的偏狹さを認められない、餘程妥協性

があるといふことを聞きます。回教といへば、すぐ「コーランか、劔か」といふ戰鬥的な宗教を聯想いたしますが、南方圏への回教は貿易商人と宣教師の傳へたものでありまして概して平和的の進出であつたのであります。ジャワについて見ますと回教は先づ商人や名門の家に結婚によつて浸潤し、それからだん／＼に民間に弘通したのであります。

## (三)

回教が南海貿易の商業路によつて東漸し、平安時代の末からマラッカ半島及びスマトラ島の一部に及び、鎌倉時代の末に北スマトラのペルラ國(爪哇のモジョポヒツ王國に隸屬してゐた國)が回教化し、皇紀一九五二年スマトラを訪ねたマルコ・ポーロがペルラの市民が既に回教化してゐたと記してゐます。ついでこれに近接してゐたパセイ國が回教化し、室町時代に入つて回教徒の中心となつたマラッカ國が



興隆し、同じ頃にジャワのモジョポヒツ王國(皇紀二一七八滅)の衰微に乗じて、回教はその版圖に急速に進出、漸次西部ジャワから東南ボルネオ、南セレベス、モルッカ諸島まで回教化してしまつた。そしてジャワにはデマ王朝(皇紀二一七八頃—二二〇六)、マタラム王朝(皇紀二二四六—二四〇九)、バンタム王朝(皇紀二二一六—二四一二)などの諸回教王朝が興つたのであります。はじめオランダ人と交渉をもつたのはマタラム回教國でありました。詳しいことは略しますが、ジョクヤカルタの王族ディポ・ネゴロがオランダのデ・コック將軍に降つたのは、わが天保元年(皇紀二四九〇)のことでありまして、それまでオランダ人も回教徒にはさんく手焼いたのであります。ですからその後回教問題は慎重に深入りしないやうにしてゐたのであります。フィリッピン回教は吉野時代(皇紀二〇四〇)アラビヤの高僧ムクダムがジョホールからスルー島に傳へたのがはじめでありまして、イスパニヤ人の渡來した頃はミンダナオ、スルーのサルタンの勢力は北部の島々にまで及

んでゐたのであります。イスパニヤ人は強壓的にこれを滅滅せしめる策をとつたのであります。アメリカは回教の問題には深く觸れないで、寛容な態度に出ました。マライ半島のイギリス人のやり方も回教を完成宗教として認め、帝國の實權圏外のものとして許容してゐたのであります。

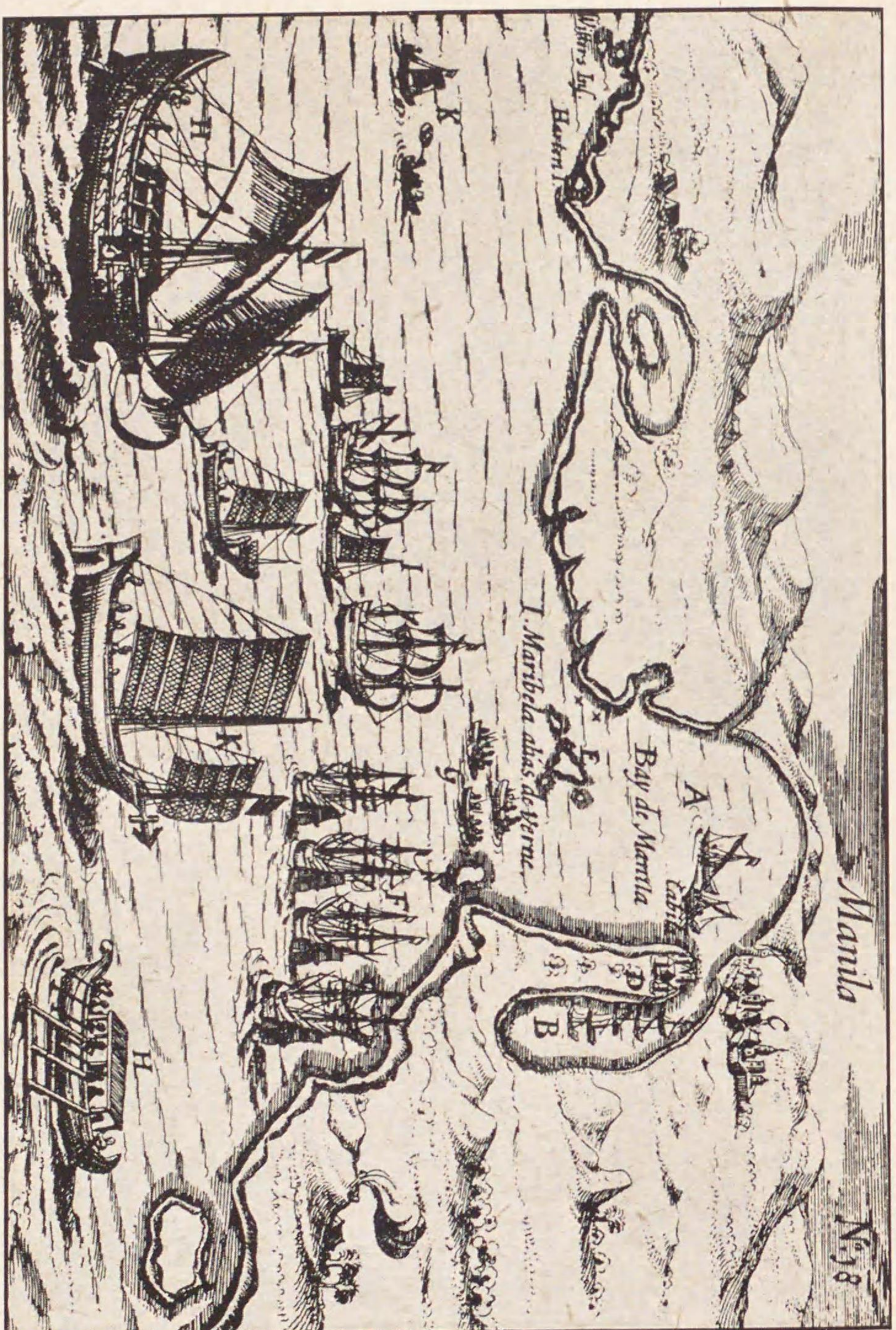
## (四)

さて回教文化であります。回教文化の典型は何と申してもサラセン文化でありまして、今日でもイスパニヤの南のゼビィヤに參りますと、西洋といふ感じがしない位サラセン文化が残つてゐます。代數學(アル・チアブル)、アルカリ(アル・キリ)アルコール(アルクフル)、砂糖(スッカレ)等のアラビヤ語が、西洋の現用語になつてゐるのを見ても、その文化の影響は廣いのであります。南方圏にしてもマライ語を書くためアラビヤ文字がローマ字と共に廣く行はれてゐるのを見ましても回教文



化の現實の文化勢力は侮るべからざるものであることがわかります。しかし回教文化のインドネシアに浸透の程度は到底ヒンヅー文化には及ばないのであります。

いづれにしても回教は現に南方圏における有力なる宗教である以上、今後日本人のこの方面の研究と、それに對する誤らない文化對策が要請される次第であります。表紙の浮彫に見える回教の場面は、禮拜のところであります。背後に見える象徴的な建物は禮拜堂であります。挿入の寫眞は爪哇のフォート・デ・コックの釣池に面した禮拜堂であります。

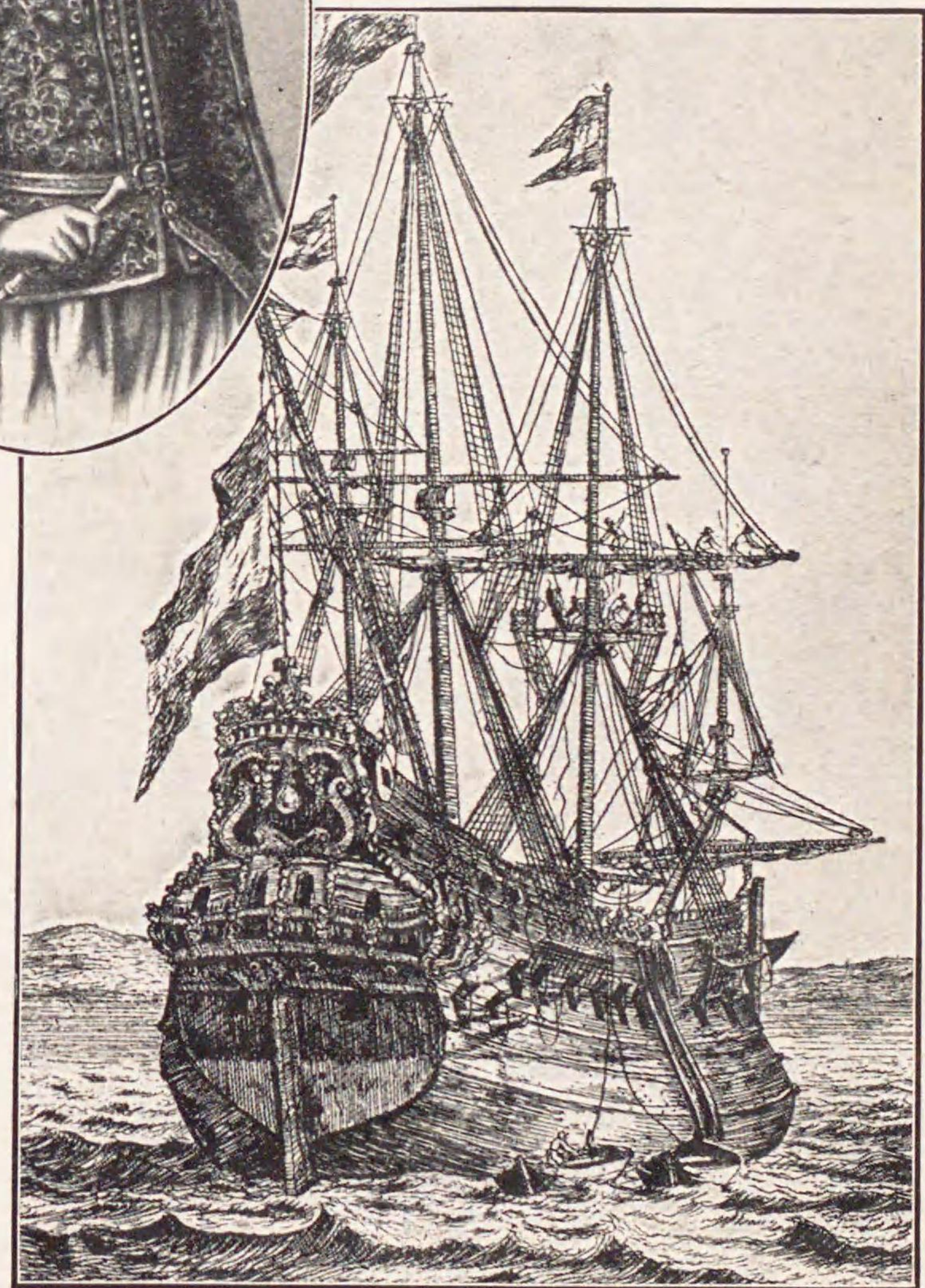


(行紀ソヘルベルピス)圖の灣ラニマの初紀世七十紀西



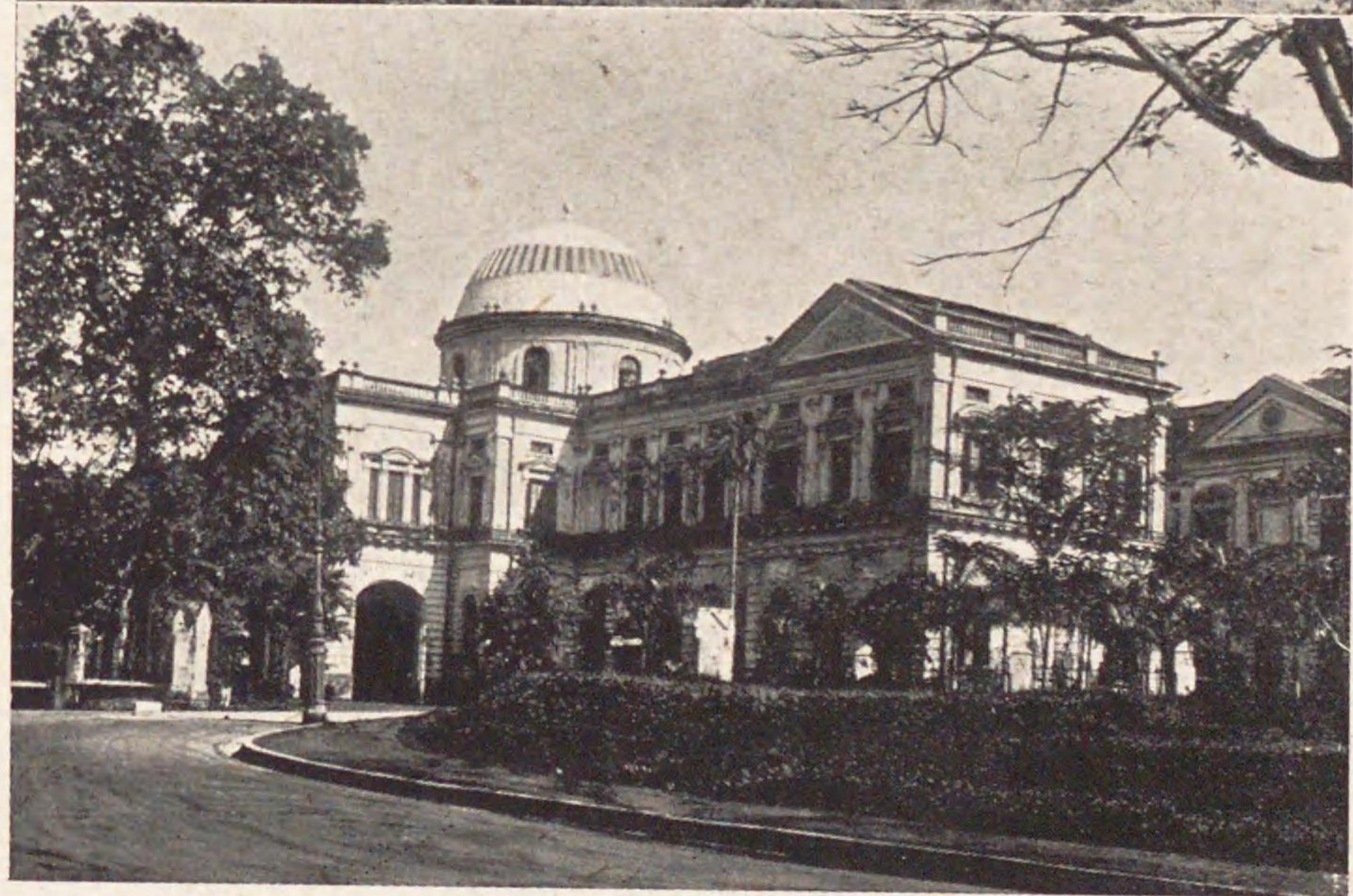
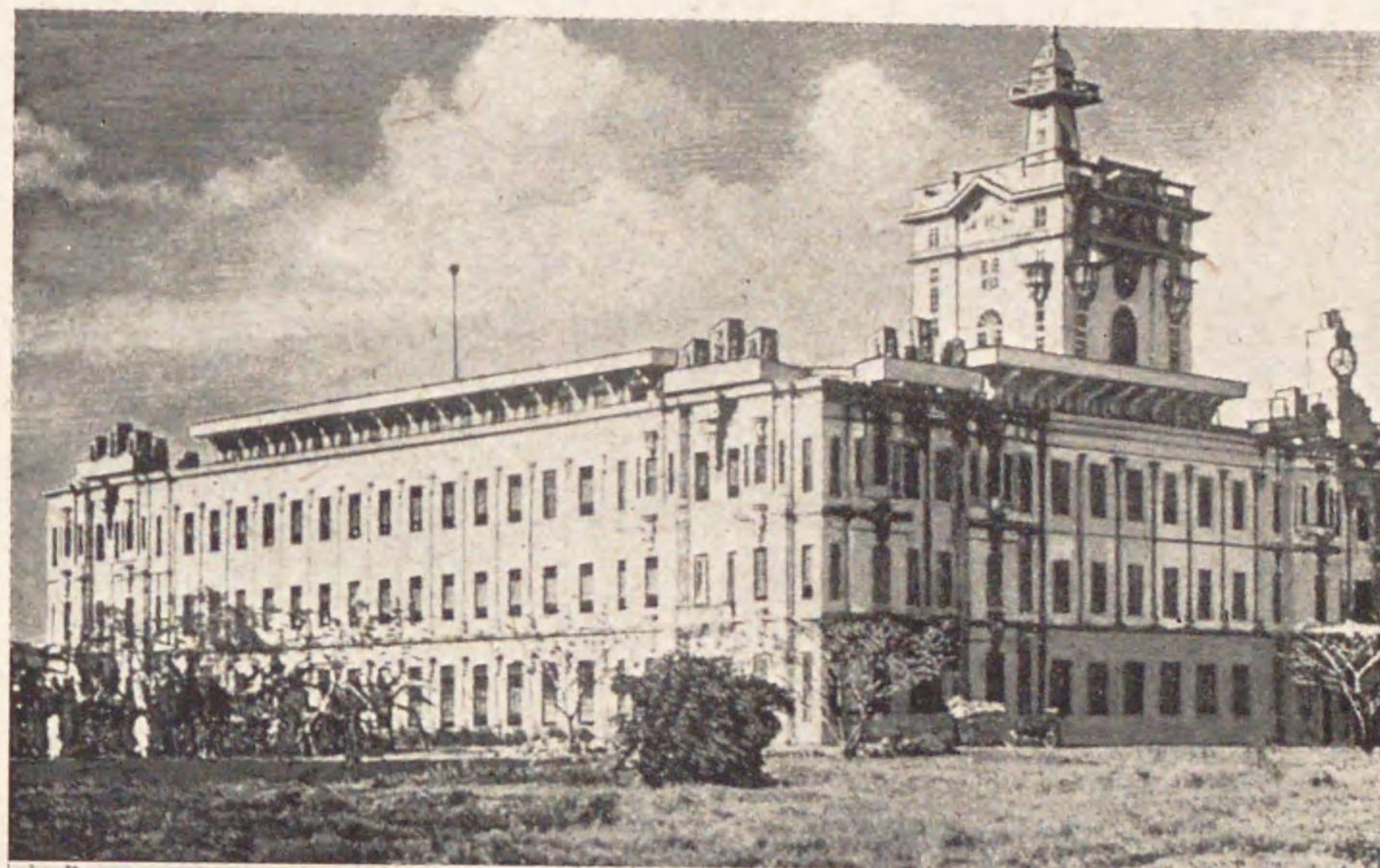


ヤビタバの紀世七十紀西 (下) 年二八六一紀西 (上)



ソーグ・ソーソスルテーピ・ンヤ督總 船蘭の紀世七十紀西





館物博ズルフッラ市南昭(下) 學大スマト・トンサ市ラニマ(上)

## 第六講 西洋文化

— 政治的、科學的支配力を恣にしてゐた西洋文化 —

(一)

以上私は南方圏の文化要素として、南方圏固有の民族文化、南方圏に浸透してゐる支那文化、印度文化、回教文化の四つに分けて申し上げました。本日は南方圏の文化の現段階を支配してゐる西洋文化について申し上げます。

(二)

今から四百五十年前コロンブスの新大陸到着は、人類の歴史に、そしてわが大東亞の歴史に、わが南方圏の歴史に、大いなる時代を劃した出来事でありました。そ



れ以後の世界歴史は世界政策を中心とする展開を見せてをります。

世界政策とは、世界全體にわたる關係において自國を優越の地位に置かうといふ政策であります。わが戰國時代から安土・桃山時代にかけて、西紀十五世紀より十六世紀まではイスパニヤとポルトガルの優越時代でありました。イスパニヤ人は西廻りで、ポルトガル人は東廻りで、發展し、やがてこの兩國人は、共に南方圏において出會ひました。イスパニヤ人の南方圏における策源地はフィリッピンで、三百二十七年にわたつてイスパニヤ人がフィリッピンを統治いたしましたが、四十三年前にアメリカに奪はれて、イスパニヤの領土は南方圏から全くその影を没し去りました。ポルトガル人の方はマカオとティモールに僅かながらその存在を示してゐます。

## (III)

世界政策第二期は江戸時代初期西紀十七世紀前半のオランダ優越時代であります

オランダはイスパニヤの屬領から獨立した國であります。オランダ人が蘭印に進出したのは今から三百四十六年前からであり、また聯合和蘭東印度會社の蘭印經營のはじまつたのは今から三百三十九年前になります。即ちオランダの蘭印統治は三世紀半にわたり、オランダ人は南方圏においては古顔でありまして、本國が獨軍に占領されても、本國の五十八倍の蘭印をもつてゐたのであります。

世界政策の第三期はわが元祿・正徳頃、西紀第十七世紀後半でオランダとイギリスの競争時代でありました。英國も和蘭と殆んど同時に東印度會社を組織して東洋へ進出し、はじめは蘭・英兩國は世界政策における先進國であるイスパニヤ、ポルトガルに對抗するために防禦同盟を結んで、英蘭聯合艦隊が一時わが平戸に入港したこともありましたが、間もなく蘭西兩國は世界政策で競争することになりました。英國のクロンウェルが有名な航海條例を發布して、アジア、アフリカ及びアメリカ諸地方よりイギリスに輸入せらるべき貨物は悉くイギリスの船舶若くはその貨



物を生産した國の船舶で運ばなければならぬと定めて、オランダの海運業に直接大打撃を與へましたのは、わが國の慶安四年（皇紀二三一一）で、由井正雪等の牢人の陰謀事件のあつた年であります。英國は皇紀二三二一年には東印度會社の組織を改めて株式會社の形を替へ、更にチャールズ二世の時代（皇紀二三二〇—四五）に、會社に領土獲得、貨幣鑄造、軍隊の指揮、官吏の任免及び非キリスト教國との戦争、講和の諸權能を與へました。そして印度においてモガール帝國の衰微に乘じて侵略の手をどん／＼海岸より内地へと伸ばしたのであります。

世界政策史上の第四期は、わが江戸時代中期享保頃、西紀十八世紀前半の英佛競争の時代であります。フランスもルイ十四世の時、東洋に進出し、印度において東南地方に活動をはじめ、英佛の競争衝突をひき起しました。クライヴがブラッシーにおいてベンガル軍とフランス軍の聯合軍を撃ち破つたのは寶曆七年（皇紀二四一七年）で、わが國では竹内式部事件が漸く表沙汰になつた年であります。このブラッ

シーの戦こそは印度における英國の覇權を確立せしめたものであります。

(四)

世界政策における第五期はわが明和・安永・天明の所謂田沼時代から、松平定信の寛政改革の頃にかけての西紀十八世紀後半以後の英國優越の時代で、英國の所謂「七つの海」(南大西洋・北大西洋・印度洋・西太平洋・北太平洋・北氷洋・南氷洋)の支配の基礎が確立したのであります。

わが寛政七年（皇紀二四五五）にフランス革命が勃發しましたが、和蘭は佛國の侵入を蒙り、文化七年（皇紀二四七〇）には完全にフランスに併合されたのであります。この頃活動したのがラッフルズでその頃蘭印全部が英國の奪ふところとなつたのであります。ラッフルズがシンガポール(昭南島)を狡猾な手段で土侯から獲得したのは皇紀二四七九年二月二十六日わが文政二年のことで、今から百二十三年前



のことでありませう。それに先つて皇紀二四七三年ライプチッヒの一戦にナポレオン一世が惨敗し、それまで英國に亡命してゐたプリンス・ファン、オランエが歸國してオランダの王位に即き、皇紀二四七四年四月ナポレオン一世は帝位を退いてエルバ島に流され、ヨーロッパは再び平靜に歸しました時、英國は和蘭とロンドン條約を結び、先に奪つた蘭印等の地を和蘭にかへしたのであります。しかし喜望峰やセイロンはかへさなかつたのであります。

蘭印の廣大な地域を英國が和蘭に還したのは、ヨーロッパ大陸で、佛國に對する緩衝地帯として和蘭の地を強化せしめんがためでありました。

## (五)

さて世界政策の歴史は、西紀十九世紀に入つて一時衰へ、アダム・スミス等によつて自由貿易主義が唱道されて、忽ち世界を風靡したのであります。これは商業貿

易振興の意味における世界政策は獎勵すべきであるが、植民地獲得は不必要であると説く、また實際において過去の諸植民帝國衰頽の跡を見、最後の大植民帝國たる英國さへ北米十三州の獨立に悩むのを見て、植民地を厄介視し、植民地獲得に重點をおく世界政策は一時衰へたのであります。しかるにわが幕末時代西紀十九世紀後半になると、かゝる傾向はまた一轉して、植民地獲得熱が再燃し、植民地獲得のためには帝國主義的態度をとるに至り、世界列強は擧げて世界政策に没頭する有様となりました。この世界政策を前の世界政策と區別し新世界政策と呼びます。これは西紀十八世紀後半以來の産業革命の結果であります。原料の供給地と販路の獲得、餘剰資本の投資地及び過剰人口の捌口を求めようとする新世界政策の時代となり、海上航路の外に鐵道、更に航空路の獲得を必要とするに至りました。

かくて世界政策の様相もだん／＼複雑になりました。そして英米の強力なる世界政策の進路が期せずして、アジア、アフリカ、大洋洲へ向つて集中されたのであり



ます。そして新世界政策は、その目的の地域を自國の政治的勢力の下に屈伏せしむるか、或は或る程度の政治的、經濟的、文化的の勢力を扶植することを必要とするやうになりました。大東亞に對する英米の支配意慾はかくして益々擴大されたのであります。

## (六)

以上簡単に申述べました世界政策の遂行方法を要約して見ますと、經濟的要求が第一に考へられた。この要求をみたすために、第一期に優越したイスパニヤ、ポルトガルは王室獨占政策を採用して、王室とそれをめぐる特權階級が利益を獨占してその利益を自國の民間にも開放しない、いはんやこの場合植民地の住民の利益は全然顧みられなかつたのであります。即ち云ひ換れば、經濟的要求を強力な政治的軍事的實力で強引に満足せしめようとしたのであります。その時代これに協力し、兼

ねて文化的活動をしたのが、キリスト教のカトリック諸教團であつたのであります。次にオランダ、イギリス、フランスになると東印度會社といふ國策會社を設立して國家がこれに特權と保護とを與へて、その經濟的活動を活潑に展開したのであります。これは王室獨占よりはより大なる搾取的效果をあげたのであります。そこでイスパニヤの如きも皇紀二四四五年には王立フィリッピン會社を設けたが、やはり獨占と王室の保護を與へられた貿易會社にすぎなかつたのであります。西紀十八世紀まではいづれの國も利益をしほり取ることに専心して、土地の開発や住民の向上のために、金をかけることをしなかつた。彼等は南方圈に示し教へたことは功利的な思想であつた。その文化政策の實施の如きはごく新しく明治以降盛んになつたと申してもよいのであります。イスパニヤの三百年以上にわたるフィリッピン統治に住民に與へた文化的影響は物質的にはいふべき程のものがないが、精神的には現在フィリッピンの總人口千六百數十萬人のうち八割のカトリック教徒を遺してゐること



は注目すべきことであります。イスパニヤ、ポルトガルの如きカトリック系の國家の海外活動には宗教が必ず伴つた、否宗教が政治・軍事と半々に片棒をかつぐのが常であり、カトリックの文化活動は昔も今も注目すべきものをもつてをります。フィリッピンにおいて西紀一六〇一年には耶蘇會がサン・ホセ大學、西紀一六一九年にはドミニコ派がサント・トマス大學、西紀一六四〇年にはサン・レトラン大學の建設されたことなど、見のがすべからざることでもあります。西紀一六〇一年は慶長六年即ち關ヶ原合戦の翌年であり、西紀一六一九年は元和五年であります。

それに比すれば、蘭・英・米等のプロテスタント系の國々の方は、海外發展に宗教活動が伴つてはゐるが、カトリックの場合とは違ふ、即ちカトリックのやうに國家と一體になつてゐない、ミッションの各別々の活動になつてゐるのであります。

## (七)

蘭・英・米の文化工作について考ふるに、蘭・英はどこまでも實利主義、實際主義である。その統治においても宗教政策などは寛大で、土着住民の信仰に干渉や統制をあまり加へない、その代りこれを教育して向上せしめようとしなかつた。フィリッピン以外ではキリスト教の土着住民間における勢力は案外なものであります。一般文化系統をいふならば、馬來半島は英國系、舊蘭印は和蘭系、比島は西班牙系といふべきであります。フィリッピンにおける米國の教育普及の事蹟は否定が出來ない。フィリッピン大學は明治四一年設立、文學部、醫學部、工學部、農學部、獸醫學部の外に美術學校が附屬してゐる。それに對して舊蘭印は土着住民の九割七分が文盲のままに放置されてゐたのであります。

英人はシンガポールに明治三八年キング・エドワード七世醫科大學を、昭和三年にラッフルズ・カレッジを建てた。ジャワにはバンドンに工科大學があり、土木技師の養成を目的として居ります。また、研究所の如き施設には見るべきものがあ



ります。佛印において注目に値するのは明治三四年以後、河内ヘンイに開設された佛蘭西極東學院であります。

蘭・英・米の南方圏に對する文化的影響は、主として物質文化と科學的影響が大であります。これは科學を利用して植民地を開發し、その利潤をたかめるためであります。それから音樂・繪畫・映畫・ダンス等の藝術的の面が、一般大衆に對する影響として、あげられるのであります。

## (八)

以上のやまな次第で、フィリッピンにおいては、その文化の層が、固有民族文化及び東洋系の文化の層の上をイスパニヤ文化と、アメリカ文化が蔽うてゐて、アメリカ文化が、政治的實力を背景にして物質文化を以つて、見かけは立派な文化様相を誇つてゐるのであります。佛領印度支那になると、固有の民族文化、支那文化、

安南文化、フランス文化の四つの文化層が現在そのまま露出されてゐる有様で、フランスの佛印統治の政治力、文化力の不徹底さが窺はれるのであります。マライ半島及び舊蘭印には固有民族文化、印度文化、支那文化、回教文化、西洋文化の五つの文化層の複合が見られますが、イギリスの強力なる國家背景、及びオランダの長い統治の傳統が相當強く支配力を振つてゐましたが、文化的の浸透力は決して強大ではないのであります。彼等の政治的、軍事的支配の終焉と共に文化的勢力は急速に後退するであります。

思ふに、南方圏の特殊資源は人類の歴史に重大な關係をもつてをります。香料群島の香料やボルネオの樟腦が昔アラビヤ人や、ヨーロッパ人の冒險的な商人をひきつけて競争させました。ヨーロッパ人は次には固有の住民を使役して、ヨーロッパ向けの農業生産を強いて、利益を搾取しました。近くはゴム、錫、タングステン、ボーキサイト、鐵、石油等の重要資源を繞つて、列強の角逐が展開したのであります。



す。近代科學がこの資源獲得の最も有力な武器となつてゐるのであります。わが南方圏の指導經營は、この科學の力を動員することから發足しなければならぬが、本を忘れないことが大切であります。

### 第七講 南方圏に對する皇國文化の使命

——文化的にも必勝の信念をもて——

(一)

南方圏は地理的に觀ても複雑であります。民族の點から觀ても複雑であります。更にその文化に至つては、その程度において、その性格において、その歴史において、その背景において、實に複雑を極めてをります。複雑であるといふ意味は、要するに正しい秩序をもつてゐないといふことであります。英・米・蘭の南方圏支配の理念は、どこまでも彼等のための南方圏を考へたにすぎない。南方圏のための百年の計はなかつたのであります。英人の印度における、蘭人の舊蘭印における統治を知らんさい。英人は印度大衆の間に存する宗教的、人種的反目を利用して、そ



の統一と獨立とを抑壓して來たのであります。蘭人もまた舊蘭印において「統治せんがための分散」と稱して、住民の勢力を集中することと、民族的自覺とを巧に抑へて來たのであります。

## (二)

従つていろ／＼な民族の寄り合ひ世帯である南方圏は、いつまでたつても、銘々の生活、銘々の利益のみを考へて、當然まとまるべき地域内においてすら、まとまる事が出来ない、いはんや大東亞的自覺などいふことは、大多數の南方圏の住民には、これまでなかつたといつてもよいのであります。

政治的、經濟的、文化的の支配意慾を恣にする英米に心の中では反感をもち、敵愾心をもつてゐても、屈從してゐたのであります。

この英米等の支配を根本から艾除して、大東亞に新しい正しい秩序をうちたてよ

うといふのが、大東亞戦争の目的であります。

大東亞といふ大きな隣組を日本の指導のもとに道義的な協同生活圏として、建て直さうといふのが、大東亞戦争の目的であります。文化破壊の戦争ではない、偉大な文化建設のための戦争なのであります。今や南方圏の住民は、皇軍の赫々たる戦果と米・英の敗退をまのあたり見て、急速に自覺を高めつゝあります。過去の南方圏住民觀を以つて今日の南方圏住民を考へてはならないのであります。各國、各民族にそれぞれその所を得せしめるための大東亞戦争であります。新たに皇國の指導を仰ぐ南方圏の住民を見くびつたり、なめてかゝるやうなことがあつてはならないと思ひます。さればといつてその現實を買ひかぶつたり、安價な人道主義は禁物であります。

## (三)



思ふに新しい秩序の建設、正しい秩序の建設のために、その指導者である吾々日本人は、南方圏に對して正しい關係に立たなければなりません。

わが大東亞共榮圏の建設は、アレキサンダー以來西洋に見られた征服主義とは全く異なるものであります。既に政府が聲明してゐる如く、大東亞の諸民族、諸國家をして、その所を得しめ、皇國を中心とする鞏固な紐帶をつくるにあります。それがためには、寛容ではなく、信頼せしめなければなりません。道義的協同圏の建設にはこの信頼がうちたてられなければなりません。この信頼のある道義の基礎のうちに、大東亞のもしあがる共感共鳴を澎湃としてみなざらしめなければなりません。日本の立場は彼等に對して威壓であつてはならない、畏敬をもたせなければなりません。權威ではない、尊嚴を確保しなければなりません。この畏敬と尊嚴のうちに道義に基く大東亞が建設せらるべきであります。

## (四)

皇軍が必勝の信念によつて、御稜威のもと赫々たる戦果をあげてゐるやうに、南方圏、大東亞に對する文化的働きかけにおいても、吾々は必勝の信念をもたなければなりません。必勝の信念には、必殺の斷と、必活の妙とを發揮する必要があります。然らば何が必殺の對象でありませうか。米英の支配意慾であります。これを徹底的に、根こそぎとり去らなければなりません。それから米英流の搾取根性、これも徹底的に排除しなければなりません。それから經濟的にも、文化的にも、米英の支配下に大東亞に、特に南方圏に毒菌ドクダケのやうにはへてゐる乞食根性をすてさせなければなりません。

## (五)



次に必活の妙は、如何に發揮すべきか。この活かす働きこそ、皇國の肇國以來一貫してゐる皇國の皇國たる働きであります。資源を活せ、土地を活せ、機械を活せ、氣候風土一切の自然的條件を活せ、更に一切の人を活せ。日本的なる世界新秩序の建設は、廣大無邊なる大御心を奉體して、一切を活す秩序であります。何もこれからつくり出すのではない、これまでであるものに、生命を與へ、これまで眠れる魂をよびさますことによつて、當然完遂せらるべき秩序であります。

大東亞の諸民族に希望を與へ、光りを投じ、大東亞の文化に目標を與へる、これが現下の急務であります。この大業は困難な大業であります、然し決して不可能ではない、我々の必勝の信念によつて、必ず出来る、また出来上らせなければなりません。南方圏に對する文化的働きかけにおいて、急速に進めなければならぬ事柄は澤山あります。これはなるべく手際よく進めなければなりません。しかしながら文化工作は、工作といふやうな末にのみとらはれて、根本を忘れてはならない、文化政策は政策にのみとらはれて、根本義からはなれてはならない。「本立つて道生

ず」であります。

## (六)

本立つてとは何を意味するか。私は大御心を奉體することと、皇軍の戦果、別して護國の英靈を、大東亞共榮圏の確立において活かさずにはおかぬといふ固い決意と遂行力をあげ度いのであります。大東亞共榮圏の確立のため、一億同胞が皆、碧血を浴びて戦つてゐるのであります。この嚴肅なる現實のうちに「本が立つ」のであります。

肇國以來の傳統である崇高雄渾なる皇國の道に徹底するならば、何ぞ區々たる工作政策の貧困を來たしませうぞ。本立つて道生ず、道は八紘に通じます。皇國の道はこれを古今に通じて謬らず、これを中外に施して悖らざる道であります。我々は



自信を以つて必勝の文化的働きかけを南方圏に對して、ぐん／＼なすべきであります。區々たることに捉はれてはなりません。神経質な潔癖を以ては、大東亞の新秩序を建設することは出来ません。清濁あはせのめとは申しません。清も濁もいかすのです。飲めぬものを、飲むべからざるものを飲むのではありません、清も濁も飲めるものにするのです。論議ではない、工夫と実践あるのみです。

(七)

由來言舉せぬは皇國の國民性であります、大東亞戦争は議論や宣傳で、勝つてゐるではありません。黙々として 大元帥陛下の大御心を奉體して、必勝の信念にもえて、敵陣に肉弾とびこむ、あのハワイ強襲に燦として輝く特別攻撃隊の軍神のやうな精神と實行とによつて、皇軍がこの赫々たる戦果をあげてゐるのであります。文化的働きかけにおいても、中樞に雄渾なる文化參謀本部が必要であります



慶長二年八月十五日於全羅道南原長大明國軍女數千騎被討捕之因至普濟寺前四百丈人伐果樹  
同寺月朔日於高橋河川東大明人八百个立於此  
為高麗國在陣之間敵味方圍死之念感念之佛道也  
右於慶長戰時方士卒一當可於前敵根討者五千个人每塚之間  
橫死在之軍具雜記 薩州嶋根領所屬國臣義弘  
慶長第四記藏六月上朔 同子息 少將 忠恒 建

敵味方供養碑拓本 加世田六地藏の塔



それと共に國民の優秀有力なる人々が、黙々として南方圏の到る處に最も目立たない、最も報いられない仕事に、醜の御楯として、黙々と下座行をつむ文化戦士が要請される次第であります。

(八)

元寇の役の後、執權北條時宗は金光明經等を書寫供養して敵味方の戦死者の靈を吊ひ、佛光禪師を導師として戦死者の冥福を追修したのであります。また文祿の役に加藤清正は博愛を以て俘虜を遇し、終に敵國の人を感動せしめて生きてゐるうちに廟を造つて祭られたのであります。頼山陽は「猛は夜叉に似て兒童を怖れしめ、慈は菩薩の如く俘虜を感ぜしむ」と歌ひましたが、これが昔からの日本武將のやり方であります。高野山には慶長四年島津義弘と子の忠恒の建立した文祿、慶長役の敵味方供養塔がありまして、これは有名なものであります。爲高麗國在陣之間



敵味方関死軍兵皆令入佛道也」と刻してあります。義弘の祖父で島津家中興の英主であつた日新齋(忠良)の傳を讀んで、日新齋がしばしば敵味方供養のため碑や堂を建て、懇ろに吊ふたことを知つて、私は感じたのであります。この日新齋は「軍といふものは、敵に咎あつて、味方に理なくては、成りまじきものなり」といひました、この無名の師を起さないことと、戦争を破壊のための戦争ではなく、建設のための戦争をなすことが、我が國古來の傳統であります。正義の軍、建設の戦なればこそ、敵味方供養塔をたてるのであります。敵味方供養塔は敵味方の戦死者を活かすことであります。

日新齋が永祿四年十月嫡孫義久に與へた諫議の書に、

一 不動愛染の衆生愛顧の形容を見執可有事

とあります。不動明王の御姿は皆様御存じであります。不動明王は右手に降魔の利劍(智)をもち、左手に大慈悲の索(悲)をもつて大盤石(定)の上に立つて

をられます。その髪を七結して左の耳の邊に垂れてをられますのは、印度の奴僕の姿を表はしたものと聞いてゐます。即ち奴僕の姿をなして下座行を敢てなさる意味であります。

南方圏ばかりではありません、大東亞共榮圏の文化建設の態度は、すべからく、この折伏と攝受とをかね行ひ、しかも下座行をいとはない不動の信念と實踐とに立脚すべきであると私は考へるのであります。

(九)

最後に、謹んで金枝玉葉の尊い御身をもつて、夙く、千百年前に南方圏への皇國文化の進路をお拓き遊ばされた高岳親王の御盛徳を偲び奉りたいと存じます。

高岳親王は第五十一代平城天皇の第三皇子にましまし、第五十二代嵯峨天皇の皇太子にお立ち遊ばされましたが、後故あつて皇太子をお退きになつて、佛門にお入



りになり、弘法大師の御弟子となつて名を眞如と申されました。刻苦勤行を積ませらるゝこと四十年、遂に阿闍梨位に上らせられました。また奈良東大寺の大佛様の頭が故なくして地に墜ちましたので、これを修理することとなり、親王は修理東大寺大佛司檢校といふ役につかせられて、修理の事を督せられ七年かゝつて清和天皇の貞觀三年に功を竣つて、修理落成慶讃の法會を營ませられました。これが終ると親王は入唐のことを天皇に請ひ奉つて、同年三月三十日に御聽許がございました。親王の御一行はすべて二十九人、貞觀四年九月六日に解纜、九月七日に明州今の浙江省寧波に御着きになり、この附近に御滞在約二年、貞觀六年に北方に向はせられて、長安に御到着になりました。そして當時長安に留學してゐた天台宗の僧圓載の周旋によりまして印度に行く官符を得させられ、廣州今の廣東からいよゝ海路印度に向はせらるることゝなつたのであります。この廣州御出發の年代とその時の御年齢について、從來は御出發は貞觀八年正月七日で親王の御年齢は八十歳近くであ

らせられたと考へられてをりましたが、昭和十四年、廣島文理大の教授杉本直治郎氏が新研究を發表せられました、廣州御出發を貞觀七年正月二十七日、その時親王の御年六十七歳にましましたとされました。次に親王御遷化の御事でありすが廣州御出發から十七年目の陽成天皇の元慶五年に支那留學中の僧仲瓘が朝廷に申狀を上つて、印度に向はせられた親王は流沙を過ぎて羅越國に到り、逆旅に於て遷化あそばされたといふことを奏聞いたしたのであります。そこでこの羅越國がどこかが問題になるのでありますが、先年桑原博士が、羅越國はスマトラと馬來半島との間に在る馬拉加海峽の北岸に當る處で、スマトラのパレムバンの對岸地方であらうといはれました。杉本氏はマライ半島の南端オラン・ラウト即ちラウト人の國のことであると申されます。最近議會に、親王の御雄圖を大東亞戰爭下に偲び奉る建議案が提出せられたことを新聞で承知いたしました、洵に時宜に適したることゝ存じます。法を求めて南方圏に遷化遊ばれた眞如法親王の御事蹟は、南方圏に文化的働きかけ



をなす人々に嚴肅なる反省を促すのであります。

(10)

大東亞共榮圏の文化建設の構想として、第一に日本人自體に對するものと、第二に諸民族に對するものと二方面を聯關して考へなければなりません。そのいづれについても、必勝の信念をもたなければなりません。この氣魄のないことには、何事も出来ません。銘記せられよ、吾等の文化建設は悠久三千年の一貫した皇國文化の傳統の上に、雄渾にうち樹てられるのであります。畏くも宣戰の詔書に「皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ」と宣はせられた大御心を奉體し、南方圏の文化工作にも、必勝の信念と、雄渾周到なる構想をもたなければならぬと信じます。

## 大東亞共榮圏論

### 一、新東亞建設の世界史的意義

(1)

由來皇國の武は神武シンブと申します。シンブとは神武天皇の神武と同じ文字を書きま  
すが、音ではシンブと訓み、國訓では加牟多計備カムタケビとよむと嘉永元年に刊行された神  
隨舍信禮ヤマトタマシヒチカキフシヘの和魂ワムネ邇教ニキヒメノミコトといふ本に書いてあります。神武とは萬物を活かすための  
建設の働き、萬物を愛しみ育てる皇威の顯れであります。八紘爲宇の肇國の大精神  
は、即ちこの建設的な神武の大精神であります。この神武の大精神、八紘爲宇の大



精神が世界に擴充されて、各民族各國家が相携へて各々その本然の姿において、生々發展の道を辿る時、はじめて眞の世界の平和と、人類の幸福と、文化の向上とが實現されるのであります。今や世界は大變革の進行途上にあります。世界の大變革は、不正不當なる世界の舊秩序を排除して、正當なる新秩序を齎さうと云ふ建設の大變革であります。支那事變も、歐洲の戦争も此の意味において、一環の世界史的意義をもつものであり、昭和十五年九月二十七日に締結された日・獨・伊三國條約も此の意味において世界史的建設の目標を同じくして居るものでありまして、共に破壊が目的でなく、建設が目的なのであります。

而して此の新秩序の建設は、天・地・人三才の自然の法則にのつとつて行はれるべきであります。自然の法則を無視したところに、舊秩序の不正と行詰りがあるのでありますから、これを排除し、是正すべき新秩序が自然の法則に順應すべき事は當然であります。

何となれば、生々發展は自然の法則に順應してはじめて可能であるからであります。今急激に推移しつゝある世界の大變革は、いろ／＼な角度から其の原則的事項を究める事が出来ませうが、私は平凡ではあるが、其の一つとして今も申したやうに「世界の推移は矢張り自然の法則に従ふものである。」と考へてゐるのであります。自然の法則に則つて存在する天・地・人三才の關係は、換言すれば地理的關係と、歴史的關係と云ふ事であります。いくら飛行機の時代になりましたも、人間は矢張り地上に生れついたものであります。人間の生活は、物質的にも精神的にもその生活する土地・環境によつて規定されるのであります。人間は歴史的、地理的條件から逸脱する事が出来ないものであります。従つて人間の作つてゐる社會も國家も、又數個の國家のつくる特定協同體も、この地理的・歴史的條件を無視しては、安定もしないし、發展もしないのであります。もつと具體的に例を政治にとつて申すならば、政治的支配は、この地理的・歴史的要求と合致するのが自然であつて、



地理的・歴史的要求を無視した政治的支配といふものは、不自然であると考へるの  
であります。

## (11)

然らば、世界の舊秩序における政治的支配は、果して地理的・歴史的要求と合致  
したものであらうか。否、これを無視した不自然なものであつたのであります。御  
承知のやうに、大正九年ヴェルサイユ條約によりて樹立された、所謂ヴェルサイユ  
體制は、昭和八年一月、獨逸にヒットラー政權が確立された日に、既に崩壊の運命  
に遭遇したのであります。それ以來ヨーロッパには舊秩序を打破し、新秩序を建設  
せんとする獨・伊樞軸の陣營と、舊秩序を擁護せんとする英・佛の陣營との對立が  
次第に尖鋭化して、昭和十四年九月一日、ポーランド戦争をきっかけとして、遂に  
今日の情勢に立ち至つたのであります。これはヴェルサイユ體制は、地理的・歴史

的要求を無視して不自然につくり上げられてゐたからであります。

ヴェルサイユ體制によるヨーロッパよりも、もつと古くから、もつと深く深  
刻に地理的・歴史的要求を無視した不自然な體制を強ひられてゐたのがアジアの諸  
民族であります。英米を中心とするアジア支配は、アジア諸民族の地理的要求と、  
歴史的要求を全然無視した不自然なものであることは、説明を俟たないで明かなと  
ころであります。それ故ヨーロッパにおいて、英國を中心とする舊體制が崩壊する  
運命にある以上、アジアにおいて英米を中心とする支配の舊體制が、崩壊する運命  
にあるのは自明のことであります。

しかし天は自ら助くるものを助くでありまして、自らその使命を自覺し、自ら奮  
起するでなければ、運命をひらくことは出来ません。ヨーロッパに於ても獨・伊  
の乾坤一擲の大勇猛心あればこそ、舊體制を根こそぎゆり動かして、新體制へとぐ  
んぐん大勢を推し進めてゐるのであります。アジアにおいても皇國あればこそ、ア



ジアの東に新體制が實現しつゝあるのであります。

## (三)

前に申しました如く、英米を中心とする不正・不自然なる支配と云ふことから見るならば、問題はアジア全體の問題であります。江戸時代中期に、南北兩米を領有し、江戸時代後期には阿弗利加の分割をなし遂げた列強が、明治時代においてアジアの分割に着手した。明治三十七八年における日露戦争に、日本が勝たなかつたならば、恐らくは彼等のアジア分割の計畫が實現してゐたであらう。日本の力一つが、アジアを歐米列強の分割の運命から、一步手前で喰ひ止めたのであります。日露戦争における日本の勝利が、全アジア人に大なる刺戟を與へ、その覺醒を促したのであります。巧妙なる英・米の術策が、仲々アジアを解放しなかつた。アジアを彼等の植民地的状態に置いて、自國の利益を確保し、伸張しようと、政治的に、

經濟的に、文化的に、あらゆる手段を講じたのであります。高度の資本主義的性格をもつ英・米兩國は、最も強力をもつて、アジアに働きかけて來たのであります。

而して太平洋方面における、否アジアにおける英・米の唯一の強敵は、植民地乃至半植民地化されたアジアにおいて、唯一つ富嶽の姿そのまゝ東海に卓立する日本であつたのであります。門戸開放主義といひ、九ヶ國條約といひ、目的は日本を支那よりひき離して、支那を半植民地化しようといふためであつたのであります。滿洲事變も、支那事變も、要するに此の英・米の政策に眞の原因が存するのであります。支那事變は一般に認識されてゐる通り、二重戦争であります。英・米の政策に踊らされてゐる蔣介石政權といふ素面の敵との戦争と、援蔣政策を棄てないのみか、益々露骨になつて來てゐる英・米等の覆面の敵との二重戦争であります。

支那事變勃發のはじめ、我が國が不擴大方針をとらうとしたが、忽ち戦局が擴大



して長期戦に推移したのは、全く支那事變がもつこの二重戦争の性格が然らしめたものであります。

茲において、我が國はこの二重戦争を處理するためには、素面の敵だけを對象に考へることが出來ない。覆面の敵をより重大な對象として考へなければならぬのであります。而して前にも申しました如く、此の戦争は戦争のための戦争、破壊のための戦争ではない。建設發展のための戦争であります。神武の戦争であります。

## (四)

このやうな支那事變處理の目的を明かにしたのは、第一次近衛内閣以來の聲明に見えた、東亞新秩序の建設と云ふことであります。東亞永遠の安定と、共榮とを確保すべき新秩序を建設するのが、我々が戦つてゐる目的であるといふのであります。このことは畏くも昭和十三年七月七日、支那事變一周年に際して、下賜あらせ

られた優渥なる勅語のうち、明かに御示し給つたところでございます。

而して第二次近衛内閣の成立するや、大東亞共榮圏の確立といふ、一層はつきりした聖戦の建設目標が示されたのであります。即ち松岡外相によつて、「現下我が國の外交方針は、先づ支那事變處理を中心に、日・滿・支を其の一環とする大東亞共榮圏の確立を眼目としなければなりません。是はやがて力強く皇道を宣布し、公正なる世界平和を招來する所以でありまして、我が國民と致しましては、此の道程に横たはるところの有形・無形一切の障碍は、斷乎として之を排除するの覺悟がなければなりません。」と我が國現下の外交の方針と、覺悟について聲明があつたのであります。

東亞新秩序の確立といひ、大東亞共榮圏の確立といひ、その本質において、その大眼目において變りが無いものと考へられます。たゞ前申しました支那事變の二重戦争である性格が、日を経るに従つて益々露骨になり、それに歐洲の戦争によつて



捲き起されてゐる、世界變革の大嵐のために、我々の覆面の敵は、だん／＼その正體を明かにし、これに對應するため、我々の支那事變處理の目標も、一層はつきりしたものを要求されるに至つたのであります。即ち從來の東亞新秩序が日・滿・支の地域に限定されるかのやうに印象づけられたのに對して、今度の大東亞共榮圏の印象づける地域は、東アジア大陸と、西太平洋の陸・海にわたるやうになつたのであります。

大東亞共榮圏の確立は、我が國が當面してゐる支那事變處理のためにも必要であります。また高度國防國家の強化のために必要なる物資の供給の上からも必要であります。また我が國貿易の進展のためにも必要であります。しかしながら大東亞共榮圏の確立は、決して我が國の現實の要求から、一時的、便宜的に考へられた國策ではないのであります。そこには深く我々日本人が考へて見なければならぬ歴史的・地理的の必然性があるのであります。

共榮といふからには、其の反面に共損、共に損をするといふことも考へられ、共憂、共に心配するといふことも考へられるのであります。大東亞共榮圏の場合も、大東亞共損圏、大東亞共憂圏といふことも考へる事が出来る。世界の舊秩序である英・米等の支配的勢力の跋扈してゐる大東亞は、彼等に對する時、共損圏であり、共憂圏であります。此の舊秩序を排除して新秩序を確立するものでなければ、大東亞の共存、共榮が將來されないのであります。此の意味におきまして、大東亞共榮圏確立の要求は、世界史的に意義づけられなければならないのであります。

## (五)

そも／＼大東亞共榮圏の地域に、西洋の支配力が伸びたのは、わが戰國時代よりはじまつたヨーロッパ人の所謂發見時代以後のことです。發見時代といふ言葉からして氣にくはない言葉でありまして、東亞の天・地・人は彼等西洋人の發見



を俟つて出現したものであるやうになつたものでもない。東亞には彼等よりも古い立派な五千年の歴史があるのであります。ノルマン人がイングランドに侵入して今日の英帝國の基礎を据えたのは、我が國では平安時代の始めであります。彼等の傳統の、日本や支那に遠く及ばないことは申すまでもないのであります。發見時代以降、所謂世界政策なるものが、世界歴史の主流をなしたのであります。世界政策とは、世界にわたる海事が、その基礎をなすものであつて、航海・貿易・植民・産業等の發展によつて、世界全體にわたる關係において、自國を優越の地位に置かうといふ政策でありまして、西紀十五世紀より十六世紀までは、イスパニヤとポルトガルの優越時代、西紀十七世紀前半はオランダ優越時代、西紀十七世紀後半はオランダ・イギリスの競争時代、西紀十八世紀前半はイギリス・フランスの競争時代、西紀十八世紀後半はイギリスの優越時代であります。而して産業革命以後は、原料の供給地と、販路の獲得、餘剰資本の投資地及び過剰人口の捌口を求めん

とする新世界政策の時代となり、海上航路の外に、鐵道更に航空路へと、世界政策の様相もだん／＼複雑になつて來たのであります。

しかも西紀十五世紀以降、西洋人による世界政策が、常に東洋支配の理念で一貫してゐるのであります。ポルトガルとイスパニヤとの優越時代に、ローマ法皇が所謂ペーパル・ラインと云ふ南北兩極を結ぶ世界分界線を、世界地圖の上に劃して、ポルトガル人・イスパニヤ人が東洋において、仲よく領土利權を分けとるやうにしました。この頃より以來特に東洋に對する西洋人の支配的理論といふものが續いてをるのであります。

## (六)

大東亞共榮圏の確立は、英米等の東亞に對する支配的理論を打倒し、大東亞は、大東亞人の大東亞たる理論を現實に顯現し、世界新秩序の建設に指導的・推進的役



割を果すにあります。

思へば我々はこれまで随分煮え湯を飲まされて来たのであります。随分長い臥薪嘗膽の時代を辛抱して来たのであります。そして今や天の時がめぐつて来たのであります。天の時があつても、地の利と人の和がなければなりません。

大東亞共榮圏は、地の利と人の和を結ぶ上に、前述べました様に最も自然で、そして地理的・歴史的要求を一にする地域であります。而して此の大東亞共榮圏の指導者は、我々日本人であります。我々日本人は、世界史的に重大なる使命のあることを深く考へて、この困難ではあるが光榮ある使命の達成に、一億一心の努力を傾注しなければならぬ次第であります。我々は遠慮すべきではありません。米國人によつてアメリカ人のアメリカが唱へられ、ヨーロッパ人によつてヨーロッパ人のヨーロッパが唱へられると同様、否其れ以上の必然性と、天與の權利とを以つて、我々日本人は大東亞共榮圏の確立を提唱し、實現するに遠慮は毛頭不要であるが、

同時に非常に堅い決意が必要であると考へます。

## 二、積年の禍根を断て

### (一)

昭和十三年七月七日支那事變一周年に際して賜はりたる勅語に

惟フニ今ニシテ積年ノ禍根ヲ断ツニ非ズムバ東亞ノ安定永久ニ得テ望ムベカラズと宣はせられたのでございます。詢に畏き極みでございます。然らば積年の禍根とはそも／＼何であるか、大東亞共榮圏確立を使命とする我々日本人は、深くこの點に思ひを致すべきであると考へます。これについては、人々それ／＼考ふるところが或は違ふかも知れません。けれども違ふやうに思はれましても、それは考へ方の



緩急前後、または表現の相違でありまして、根本の問題のつかみ方に大差があらうとは思はれないのであります。

大東亞永遠の共榮を確立するためには、何よりも東亞の諸民族の相互の理解と、親愛がなければなりません。相互の理解と親愛を害してゐるものがあるとするれば、それは正に積年の禍根であると申さねばなりません。この意味において、私がこゝに積年の禍根として取り上げようと思ふのは、お互に相手を、とらはれたる偏見を以て観てゐる點であります。其の中特に支那人の日本觀と、歐米人の東洋觀とが相關聯して、東亞永遠の平和を阻害する禍根をなしてゐるのであります。支那人の侮日・抗日が支那事變の直接誘因となつたのであります。この侮日・抗日は、その源は遠く且深いのでありまして、支那人の中國思想に基づく文化優越感と、東夷的日本觀から來てゐると思ふのであります。そしてそれに油を注ぎ、火を點ずる役割をなしてゐるのが前述いたしました歐米人の東洋支配の理念であります。

## (11)

支那人は御承知のやうに、自らは決して支那人とは申しません。自らは中國人と申します。自分の國を中國又は中華と申します。これは支那中心の世界觀に立つてゐると同時に、支那人が常に文化的優越感を持つてゐることを示してゐるのであります。支那人は自分の國丈が文化的に優越してゐると思つて、周圍の民族は文化的に一段も數段も低く見くだして、東夷・西戎・南蠻・北狹と呼び慣らしてゐるのであります。日本は支那人に言はしむれば東夷でありまして、支那の史籍には我が國のことは東夷傳、または外國傳のうちに記してゐるのであります。支那人が傳統的にもつてゐる文化的優越感が、今でも根強いものがあると思ふのであります。日本に對しても武力では屈伏してゐても、心の底には依然として文化的優越感・文化的自負心を棄てず、日本人を文化的に東夷と見くだす傾向が残つてゐると思ふのであ



ります。支那大陸の住民は、九割強までは漢民族であり、一割弱が滿洲・蒙古其他の諸民族であります。其の他の諸民族の殆んど總てが、文化的には漢民族の文化に化せられてゐると申してもよいのであります。漢民族の文化の、異民族に對する魅力・同化力の強いことを、我々は深く考へて見る必要があるのであります。

支那の歴史を回顧いたしまするに、支配の主體になつた民族を以つて、時代を大きく區分いたしますと、六つの時代に分つ事が出來ます。第一期は、漢民族支配の時代でありまして、太古から我が國の平安時代の初期迄であります。第二期は、漢民族と北方民族の對立時代でありまして、我が國の平安時代中期・後期の頃であります。第三期は、北方民族の支那支配の時代でありまして、我が國で申せば鎌倉時代から吉野時代にかけての年代に當ります。第四期は、漢民族支配の復興時代でありまして、我が室町時代から安土・桃山時代にかけての時代であります。第五期は再び北方民族支配の時代でありまして、我が江戸時代から明治時代迄であります。

第六期は、漢民族支配の復興時代でありまして、我が國で申せば大正時代より現代に及んでゐるのであります。此の如く漢民族は屢々異民族の支配を受けてゐるにかかはらず、文化的には却つて征服した民族を同化して、文化的には常に漢民族の文化が優位を保つてゐるのであります。此の事は我々が深く考ふべき點であります。

## (III)

日本と支那との交渉の歴史を觀ましても、過去において日本が支那に求めましたものは何であつたかと申せば、政治的・領土的なものではなくて、漢民族の優れた文化であります。

事實漢民族の創造した文化が、日本文化に大なる影響を及ぼしてゐるのであります。古來支那を征服した異民族は、文化的には却つて漢民族のために征服されて來た事を我々は再認識しなければなりません。この意味に於て大東亞共榮圏の指導理



念を、直ちに支那の古典的精神文化をもつてせんとする一部の人々の再考を煩はしたいのであります。大東亞共榮圏の指導理念につきましては後でまとめて申し上げますが、こゝで申し上げたいことは、此の如き漢民族の文化的優越を基調とする東夷的の日本觀を、如何にして是正すべきかの問題であります。人の口は戸をたてることが出来ないが、其れ以上に人の思想に壓迫を加へることは出来ません。東夷的日本觀を捨てると申しても、それは思想的には却つて反抗と、侮蔑の念を増長せしむるばかりで、百害あつて一利無い事であります。寧ろ日本人自らが深く自己を反省し、日本人たるの大自覺に立つて、文化的自信を獲得發揮するに如かずと考へます。

支那文化を長い間攝取したため、日本人の一部の者が知らず識らずに文化的に、支那文化に支配せられ、文化的に我れ自ら東夷的卑屈の思想を抱いたものが過去において決して少くなかつたのであります。

この支那的思想、本居宣長の所謂漢意<sup>カラゴコロ</sup>を拂ひ除けるために、先哲、先覺者の苦心努力した事は非常なものであります。

今と昔とは勿論違ひますが、現代においてもこれに類する考へ方が決して絶無では無いと考へるのであります。支那人を理解し、支那の文化を理解するためには、支那文化に沈潜して研究し、利用しなければならぬことは申すまでもありませんが、手段と目的とを混同し、本末を認ることのないやうに注意する必要ありと痛感するものであります。要は支那人を文化的に指導するには、日本人が文化的にどこまでも自主的な文化の創造發展をつとめて、文化的の自信力、自尊心、ひいては日本文化に對して、支那人をはじめ、東亞諸民族をして心から敬服・依存するに至らしめなければならぬと思ふのであります。それがためには、日本人としての自覺發奮が第一でありまして、此の點から積年の禍根を彼に責めずして、我自らに反省する必要があると考へるのであります。



## (四)

第二の禍根は歐米人の東洋觀であります。歐米人が優越してゐる、歐米人に比して東洋人が劣等であるといふ考は、何等科學的の根據の無い妄想であります。此の東洋觀の成立は、全く歴史的事實が然らしめたのであります。前述しましたやうに、十五世紀以降歐洲人が、何等統一的防禦形態をもつてゐなかつた東洋にやつて來て、彼等の優れた武器と、科學と、資本とを以つて、容易に東亞支配に成功し、支那について申しましたも、前に述べた支那の歴史の第五期以降、詳しく云へば阿片戰爭以降は、事實において歐洲人の東亞支配の時代が展開したのであります。

阿片戰爭の勃發は、我が天保十一年（皇紀二五〇〇）で、今年はそれより一百二年になります。この阿片戰爭を考へて見ましても、阿片戰爭の影響を最も受けたものは或收國の支那ではなくて、日本であつたのであります。

當時日本の識者は、阿片戰爭によつて歐洲人、特に英人の東亞征服の企をはつきり見究め、その事が明治維新といふ新體制を實現する大なる導因となつたのであります。そしてそれに對抗するために、知識を世界に求め、大いに歐米科學をとり入れたのであります。

明治時代までの日本の合ひ言葉は、「歐米の先進國に相伍せん。」といふのであります。先輩の非常な努力の結果、歐米諸國に相伍する日が到來して、今日ではかういふ言葉は全く無くなつてしまつたのであります。

しかしながら歐米諸國に相伍せんとして、彼の文化をとりいれる事に専らであつた時代に、知らず識らずのうちに歐米崇拜といふ思想的屈從觀念が發生したのであります。これが歐米人をして東洋支配の觀念をいよく強め、又東洋人を劣等視する觀念を増長せしめたのであります。單に思想丈ではありません。現實の政治において、我が國は相當長期間歐米人の東洋支配の政策に對して、寛容たらざるを得な



かつたのであります。

日露戦争における日本の勝利は、東洋諸民族に刺戟と、自覺と希望とを與へました。

東洋の諸民族が、日本の興隆に刺戟され、奮起して、歐米勢力の支配を脱して自由と獨立とを獲得しようとして立ち上つた時、彼等は日本を唯一の頼としました。しかしながら日本は、彼等東洋諸民族の運動に十分なる支援を與へ得なかつたばかりで無く、其等東洋民族から見れば日本の行動なり、日本人の考へ方において歐米人と大差のない、否その追隨者を發見したやうな印象を與へましたことが絶無とは申されませんので、この點は誠に遺憾であります。

また筈を負うて日本に學んだ學生が、少からず日本において歐米的な考へ方の學問の傾向に接したことであります。

ここに於てか歐米に對する尊敬心を増さしめて、日本に對する輕蔑の念を起さしむる結果も少くはなかつたらうと考へるのであります。

## (五)

以上述べました日本に對する支那人の偏見、日本否東洋に對する歐米人の偏見と共に、日本人の支那に對する偏見、日本人の歐米人に對する偏見が無かつたかどうかを冷靜に反省して見る必要があります。もしあつたとすれば、これまた東亞の共榮を阻害してゐた積年の禍根であると申さなければならぬのであります。

大東亞の共榮圏は、獨り日本・支那ばかりでなく南方諸民族もその圏内に入ります。長い交渉をもつてゐる日支の間にすら前申した通りの相互の理解の不足、更に進んでは誤解が存しえた事を思ふ時、其の交渉の歴史に於て、支那に及ばない南方諸民族との間には、相互の理解が甚だ薄く淺いといふ事を思はねばなりません。

理解が薄いだけにまた過去の黒星が無いのでありますから、今後の努力によりま



して、急速に相互の理解親善をすすめる事が出来ると思ふのであります。これがためには、文化各部門の活潑にして能率的な活動を盛んにしなければならぬと思ひます。従来南方文化に對する我が國の關心は、決して大なるものがあつたとは思はれないのであります。従つてその方面の準備は必ずしも満足すべきものではないのであります。この點特に大東亞共榮圏確立に最も有効に役立つやうに、我が國の文化機關を整備する必要を痛感する次第であります。

國家の興隆は國民各個の興隆より來る。國民各個の興隆は、各個人の自覺と努力にあります。日本人も、支那人も、南方諸民族も、今こそ深刻嚴肅なる反省をなすべきであります。そして過去や行きがかりにいつまでもこだはることなく、相提携して前進する明朗さと、寛容さが必要であります。同時に共同の第一義的目的を達成するため、即ち大東亞共榮圏を確立するためには、非常な勇氣と氣魄とが要求せられます。かくするためには共榮圏の主唱者であり、指導者であるところの我々日

本人が眞先に積年の禍根を斷つべく、自ら目覺めねばならない次第であります。

## (六)

佛軍の敗退についてのポルドー發電報に、「フランスを今日戰敗の悲運に陥らせたのはフランスの政治家・共產黨、或は軍部が悪かつたのではない。フランスの個々の一人一人が眞に新しい生命に目覺めずして舊態依然として居つた罪である。」と報道してゐたのに、私は深く感じさせられたのであります。又フランスの首相レーノーは今回フランス軍の敗北に當り、國民に對して發した悲痛な聲明に、「舊き觀念の軍は遂に新らしい觀念の軍に敵しえなかつた。」と告白して居ります。我々日本人は此の點に深く心を寄せ、國の内外にわたつて眞に「もりあがる力」を以て新體制を急速に整へる必要ありと痛感する次第であります。明治維新の新體制が、明治以降の飛躍的な日本の發展をもたらしたのは、矢張りこの「もりあがる力」の活用にあつた



のであります。

五箇條の御誓文に「官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメ  
ン事ヲ要ス」と仰せられたことは、今更の如く有難く拜せられます。志を遂ぐる體  
制、倦まざらしめない體制は、生き甲斐のある體制であります。こゝに始めて明治  
維新の新體制が「もりあがる力」たりえたのであります。

今度の新體制も、眞に氣魄のある一億同胞の生命そのものの「もりあがる力」で  
あらしめねばならぬのであります。東亞の新體制においても、同じく東亞民族相互  
の理解提携によつて「もりあがる力」をもたせなければならぬのであります。そ  
れがためには、指導者である日本人がほんたうに第一義的な行動をなし、第一義的  
な政治を爲すべきであります。徒らに功を急いで却つて禍根を深めるより、大なる  
患を將來に残すことのないやうに用心しなければならぬのであります。それが  
ためには本末を誤らない事を第一につとむべきで、枝葉末節の小策を弄せざること、

どこまでも相互理解、相互尊重の間にも日本人の指導的立場を忘れずに、自信のあ  
る迫力が要求せらるべきであります。

私の愛讀する佐藤一齋の言志録に「信を人に取るは難し、人口ヒトクチに信ぜずして軀ミに信  
じ、軀に信ぜずして心に信ず、是を以つて難し」といふ一節があります。人は口に  
言ふ所を信じないで、身に行ふ所を信じます。人は身に行ふ所を信ぜずして、心の  
中にある所の徳を信じます。大東亞の新秩序を樹立し、大東亞の永遠の平和と、共  
榮とをもたらすためには究極するところ、日本人の徳に歸します。一億一心の協力  
は一億一徳の完成への謙虛精進の路であることを感じます。

### 三、文化的連繋の必要とその限界



## (一)

日本が大東亞共榮圏の確立を期し、其の指導者として、現下世界歴史の大轉換の重大な役割を荷負つて立ちあがつたのであります。然らばこれを如何なる方策を以つて實現すべきか、これが重大な問題であります。

先づこれについて考へられることは、第一には大東亞の安定を確保することであり、これがためには、大東亞における國際正義の確立、共同防共の達成等が考へられます。第二には經濟的の提携・協力でありまして、今後此の方面の工作の圓滿なる進捗を期待する次第であります。第三は文化的連繫でありまして、私がこゝに取り上げて申し上げようといふ問題であります。

大東亞共榮圏の確立は決して領土的野心に發したものでなく、近衛内閣の聲明のやうに「日本は大東亞の地域に於てアジア本來の姿に基づく新秩序の建設を期しつ

つあるのであります。」と申して居られる通りであります。たゞこれを實現する上に横はる容易ならざる困難を覺悟して、この困難を最も賢明なる方策を以つて克服しなければならぬのであります。

一億一心の翼賛運動は、一天萬乘の天皇を奉戴し、血液を同じくし、歴史を同じくし、感情を同じくし、利害を同じくし、理想を同じくする日本國民の自覺に基づく實踐運動でありますから、比較的容易であります。それに反して大東亞共榮圏の方は對者のある事であります。

しかし國家の體制を異にし、血液を異にし、歴史を異にし、感情を異にし、しかも利害必ずしも一致せず、理想必ずしも一致しない諸民族の協力を要求するのでありますから、國內新體制の比ではない困難を覺悟しなければなりません。

これを實現せしむるためには、机上の理想論では無く、どこまでも現實に即したものでなければなりません。協同協力する爲には利害の一致と感情的の共鳴・同感



がなければなりません。利害の一致は、現在及び將來の國際情勢を認識すること、經濟生活に於ける相互依存の緊密さを認識することによつて、現在既に其の可能性が充分あると思ふのであります。

しかしそのみでは、利益による協同、利益のための協同でありまして、利害の打算によつて離れるものと見做すべきでありまして、此の程度の協同協力を以ては、到底大東亞共榮圏の永遠性は期待出來ないのであります。どうしても理想を同じくし、進んで大東亞の新文化を創造する希望と熱意とがなければ、東亞共榮圏に魂が入らないのであります。

## (二)

大東亞共榮圏において、現在どの程度の文化的連繋が可能であるかといふことを考へてみる必要があります。アジア全體を考ふる場合、文化的にそれは決して單一

文化圏ではありません。早い話が印度と、支那とを一つにして考へることは出來ないのであります。この兩者の間に、文化交流の緊密なことは、歴史的に事實ではあります。民族・言語・社會・國家の成立、發展を異にするともこれまた歴史的事實であります。しかし所謂大東亞共榮圏として、現在我々に印象づけられて居る地域について考へます時は、文化的に餘程樂に考へられて來ます。

此の地域は文化的に申せば、日本と、支那と、南洋の三つに分けられますが、そのうち南洋は、文化的には入會地であります。支那の文化と、印度の文化と、近くは西洋の文化とが其の地理的・歴史的の因縁のまにまに流れ込んでゐるところであります。而して日本は、文化的に申せば世界隨一のプールであります。世界文化の渾然と融合した、貯水地のやうな性格を持つて居ります。日本の文化には、支那の文化も、印度の文化も、歐洲の文化も、最高水準のものが朝宗してをります。そして支那に亡びたものも、印度に亡びたものも、日本においては立派に生命をもち續



けてゐるものも少くないのであります。

これは全く萬邦無比な我が國體の御蔭でありまして、この御蔭によつて萬邦無比な、文化的特異性格が發達してゐるのであります。こゝに誤解してならないことは、支那の文化なり、印度の文化なりが其のまゝ日本に育つて残つてゐるのではない。支那からとり入れた文化的要素も、印度からとり入れた文化的要素も、完全に日本化されて、發育してゐると云ふ意味であります。

## (三)

先年物故された有名なる歴史家が、曾つて「日本文化とは何ぞや」と云ふ講演に於いて面白いことを申された事があります。文化の出來上り方に二つの種類が考へられる。一は例へば動植物が、一つの種から養分を得てそれが段々芽を出して、さうして育つて來たやうにして出來る場合。もう一つは例へば豆腐が出來るやうに、

殆ど豆腐の形が出來上つて居らんで、豆腐になるべき成分があります所へ、そこへに、がりを入れると、その成分がその爲に寄せられて豆腐になるといふやうな出來上り方であつて、同博士は「日本の文化は此の二種の出來上り方の中、どちらで出來上つたものかといふ事が一つの問題であらうと思ふ。而もこれが仲々むづかしい問題で、私はヒョツとすると後の方の方法で出來上つたのではないかと思ふのです。日本には文化の種が出來上つて居つたものではなくて、只文化になるべき成分があつた所へ、他の國の文化の力によつて段々それが寄せられて來て、遂に日本文化と云ふ一の形を成したのではないかと思はれるのであります。」これは日本文化の成立を考へる上に面白いばかりでなく、學問上示唆に富んだ説であります。しかし私は博士の考へ方には賛成が出來ない。

文化を靜的客觀的に見る場合は、かういふ考へ方も起るのであります。文化を生命的に考へる者にはこれとは違つた考へ方が存在するのであります。私は日本の



歴史、日本の文化を天地を貫いて生きとほす、無限生命の顯現と見るのであります。この意味において外國の文化をとり入れることを攝取すると申します。

攝取するとは、簡単に申せば榮養分をとること、食ふ事であります。支那文化を攝取したとは支那料理を喰つたといふこと。印度文化を攝取したとは印度料理を喰つたといふこと。西洋文化を攝取するとは西洋料理を喰つたといふことで、支那の文化も、印度の文化も、西洋の文化も、日本人が消化して、日本人のエネルギーにして、益々發育して來たのであります。この場合喰つたと食はれたとは、天地霄壤の差が出来るのでありますから、我々は主客本末を間違はないやうに考へなければなりません。日本人は文化的に今申しましたやうに、支那料理の味も、西洋料理の味も、充分身につけて味つてゐるのでありますから、大東亞共榮圏の文化工作の場合も、さうまごつく譯がないのであります。

支那人とは、支那料理の食卓で、充分御つき合ひが出来るのであります。それと

同じく、また私達は日本料理の食卓に、支那人も、印度人も、西洋人も一緒に招待しても、どの客にも満足して味はつて貰へる料理の用意が出来る筈であります。例が食べものになりました序に、もう一つ先の博士の豆腐の説であります。この場合も私は反對に考へる。日本の文化素質が豆のどろ／＼で、支那なり印度なり外國から來た文化要素が、にがりであるといふ見方を、私は反對に考へる。尤も日本の文化要素が、にがりだとは考へない。日本人の文化的働さが、にがりの作用をすると思へるのです。即ち支那でも南洋でもよい、外國から輸入された文化要素は、豆をすりつぶしたどろ／＼である、それににがりの働さを働かせて、豆腐といふ一つの用途を充たすものにつくり上げるのが、日本文化の特質である。人類の創造した文化に、眞生命をよきこむ力が、日本人の文化力である、と考へるものであります。

例が豆腐になつたから、豆腐にして話をもう少し進めて見ませう。支那なり、印



度なり、南洋なりから豆腐の原料をとりいれて、日本で豆腐を作つたとします。そして原料はち前の處から來たものだから、出來上つた豆腐を喰べられぬ筈はあるまい、何でもかんでも此の豆腐を喰べろといつたつて、それは無理であります。味をつけなければならぬ。支那人には支那人の好むやうに、あげるなり、辛くするなりして喰べさせるべきであります。南洋の人達には、胡椒をびりつときかすなり何なりしてすゝむべきであります。

この味は元です。文化工作のこつがここにあると思ふのであります。大東亞共榮圏と云ふ豆腐は、日本精神のにがりが必要でしょうしても出來ません。萬人向きの豆腐は無理想的です。しかしながら、それを仲間へ喰べて貰ふには、味つけまで窮屈な干渉はなすべきではありません。各人の好みにまかすべきであります。

## (四)

話が比喩になつて、或は却つて誤解を招くかも知れませんが、私の考へる大東亞共榮圏に關する文化政策の根本を、御汲み取りいたゞいて、何等かこの重大問題を考ふる上に、參考にしていたゞくことが出來ますれば幸に存じます。

餘り喩話ばかりして、問題が具體化いたしませんから、具體的な問題の一つに觸れて見ませう。

宗教をもつて世界人類の文化を大別すると、キリスト教徒が約七億人、佛教徒が約四億人、回教徒が約三億人と云はれます。大東亞共榮圏を考ふる場合には宗教ではないが、儒教の思想の浸潤してゐる四億乃至五億の人を考ふる事が出來ませう。儒教・佛教につきましては、御承知のやうに日本がその最もよい保持者であります。儒教も佛教も、日本において立派にその生命を保つてをります。こゝにおいて大東亞共榮圏の文化的確立に當つて、日本の儒教・佛教のもつ機能を、最も有効に働かせるやうに動員すべきであります。



しかしその場合、注意すべきは儒教も、佛教も日本の生命によつて、日本的に鍛冶純化されたものを必要とするのでありまして、支那人に追従するやうな文化活動は禁物であります。佛教ですが、今日こそ日本佛教徒が眞に目覺めて新體制を整備して、この重大時局の御奉公を完うすべきであります。傳統と形式に囚はれて、安逸を貪るのそしりを受ける點がないかどうか、眞劍に反省すべきであります。日本佛教の働きこそは、新體制に大いなる要素をなすべきであります。もしも佛教徒、特に僧侶がこゝに目覺めないならば、彼等は永久に日本人の現實の體制から遊離して、急速に没落する運命を辿るであらう。佛教のもつ一如精神を、國內の新體制の上にも發揮すべきであります。大東亞共榮圏の文化的確立には、最もこの一如精神の發揮が要求せらるべきであります。一如精神は調和の妙處であり、天地の大道であります。

對立のための對立を排除して、大東亞の共榮を基礎づけるものは、此の一如精神

を體した佛教徒の奉仕的活動でなければならぬと考へるのであります。

(五)

次に考へなければならぬことは、回教及び回教系の文化についてであります。回教圏はアジア大陸において、アラビヤからパレスティナ・シリヤ・イラク・トルコ・カフカス・イラン・アフガニスタン・トルキスタン・支那・蒙疆・滿洲などに及び、更にインド・マライ・蘭印・フィリッピン等を含むものであります。蘭領印度について申しましても、住民の九八%は土着の住民であり、宗教的には住民の大部分は回教徒であります。

然るに日本人は、回教とは殆ど直接的な交渉をこれまで持つてゐないのであります。従つて回教に對する日本人一般の關心も、驚くべき程稀薄であります。この頃、外務省及び民間の一部に回教に關する研究調査の機關も設けられてはをります



が、まだく手薄でありまして、この方面に對して、當局は一段の熱意を示すべきであり、學界もこの一大缺陷を補填する方策を急速に考慮する必要があると思ふのであります。

ひとり回教に限つた事ではありません。從來全般的に南方文化に對する調査研究が不十分・不活潑であつたのであります。言語・民族・歴史・地理等いづれの部分も同様の感を免れないのであります。此の方面に優秀なる若い學徒を働かせるやうな、文化機構の整備が斷然必要であります。そしてその場合人的資源の上からも、費用の上からも、また能率の上からも、一定方針の下に計畫されなければならぬと思ふのであります。從來日本の人文科學方面の研究機關が冷遇されて、その十分な活動をなす事が出来なかつたばかりでなく、其の全體における組織において、遺憾の點が少くないと感じます。獨善主義や割據主義等は、嚴重に戒められなければならぬと考ふるものであります。

人文・自然兩方面の學問に一大活力をあたへ、その學問の中より「もりあがり」來る指導力を期待するやうにしなければ、國內の新體制も、大東亞の共榮圏も、生々發展の一路を辿る事が出来ないのであります。源泉の裕かでない川は流れが短い。根のない樹木はすぐ枯れます。噴水の高さは水源の高さによつて規定されます。大東亞共榮圏の文化設計にあつても、我々は設計を誤つてはならない。文化資材の増産を量的にも、質的にも十分考慮する必要があると痛感する次第であります。

#### 四、獨創的指導理念を確立せよ

### (一)

大東亞共榮圏に魂を吹き込み、永遠性を與へるためには力強い、適切な指導理念



を確立しなければなりません。その指導理念について考へられる基礎的條件は、第一に國家・民族を超越して、共鳴し共感し得るものでなければなりません。出來うべくんば他からあたへられたと云ふ感じの起らないやうな、大東亞諸民族共通の感情からあがつて來るものでありたいのです。

この點において、眞に大東亞の歴史と、現狀に目覺めた「大東亞解放」・「大東亞感情」を振ひ起すべきであると考へます。英・米等舊體制の、大東亞に加へた積年の重壓に對する反撥心・反撥力が、容易にこの共通の大東亞感情を導くのでありませう。

## (11)

第二には、それがためには眞に新しいものが要求されます。東洋において、又は歐米において、論議せられ、強調されたものから一度脱却する必要があります。

支那に例をとつて申しても、古典的思想は東洋思想の尊重すべき源泉ではありませんが、其のまゝの觀念や、表現では果して現代の支那人に對して魅力があるかどうか、この點大いに工夫を要するのではなからうかと考へます。

さうかといつて、孫文の三民主義も決してそのまゝ採用が出来ないのみならず、支那人に親しみある指導理念は、一面支那人に共鳴せられ便利なやうであるが、其れを全面的に採用するならば、支那の舊體制にひきづられる結果になり、また彼等の輕蔑を招く恐れなしとしない。同じやうに、現にヨーロッパの新體制をつくりつつある盟友ドイツ・イタリヤの指導精神につきましても、參考すべき點はどん／＼採りいれるべきであります。但しそのまゝ取り入れんか、これまた大東亞の自主的な、本然の性格を没却するものであります。またかゝることは、大東亞諸民族をして思想的屈從を強ひることゝなる恐があります。以上は共に注意を要する問題であるかと考へます。



第三にそれでは結局どうするか、新しい東亞独自の指導理念を創造確立すべきである、と私は主張するものでありますが、新しいとは何ぞと云ふ事から考へて見たいのであります。

頼山陽は面白いことを云つてをります。學を論じ文を論ずるに、一字の法門と、二字の訣とがある。一字の法門とは眞、二字の訣とは曰く眞と新、而して「唯眞故新」と申してをります。これは學問ばかりでなく、一般に通ずることでありませぬ。眞理は永遠に新しい。眞理は永遠に、不生不滅・不増不減の絶對の價値を顯はします。大東亞共榮圏の指導理念も、國家民族を超越した普遍的眞理に立脚すべきであります。

聖徳太子の憲法十七條の第二に、三寶即ち佛教御採用の態度理由を明かにせられて、「篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧なり。即ち四生の終歸萬國の極宗なり。何の世、何の人か是の法を貴ばざる」と仰せられました。四生の終歸萬國の極宗なり云々とは、佛教は時間・空間を超越した、普遍的眞理であると云ふ意味であります。

## (三)

眞理も人を得て始めて顯はれ、人を得て始めて弘まります。大東亞共榮圏の指導理念は、その指導者である日本人によつて示されなければなりません。「世界の事業はすべて發起人を要し、次に多くの賛成者を要し、その後さらに多くの實行者があつてはじめて成功をみる」と孫文は申しました。日本人によつて示される大東亞共榮圏の指導理念は、須く多くの賛成者と多くの實行者を得るものでなければなりません。それがためには、日本において、日本人によりておのづから展開し來る普遍的眞理でなければなりません。

日本において、日本人によりておのづから展開し來る普遍的眞理は、國史の展開の上に常に生きてゐるのであります。國史の進行の過程は、大生命の成長の過程で



ありますから、決して單調なものでもなく、生命の波を打つて進んでをります。しかも動の中に不動なるもの、即ち天地を貫く國史の大生命の進行を規定するものは、天壤無窮の國體であります。神皇正統記の著者北畠親房は、これを正理と呼び、愚管抄の著者は、これを道理と呼びました。國史を貫く正理・道理とは、我が國體そのものであります。國史は即ちこの國體の正理・道理のまに／＼、天地とともに窮りなく定められてをるのであります。そこで時運の行詰りを打開し、克服する力は、常にこの國體に對する嚴肅なる反省・認識する事によりておのづからより上つて來たのであります。

この意味において、國史に現はれた維新、即ち新體制は、復古の形をとります。復古即維新であります。大化改新の新體制「古聖王の道に遵ひ」と仰せられ、皇祖皇宗の御遺烈を御紹述遊ばされたものであり、明治維新の新體制は「神武の創業に原づき」と仰せられました。共に形の上では復古であるやうでありますが、我が國史

における復古は形の復古ではありません。創造力の復活であります。この點において建武中興における後醍醐天皇は、有難い御訓を御遺し遊ばされました。

即ち建武中興をして、形の復古に陥いらしめないやうにといふ思召から「今の先例は昔の新儀なり。朕が新儀は未來の先例たるべし」とて、新なる勅裁漸々聞へけりとあります。即ち常に舊體制の行詰りを打開・克服するためには、思ひ切つた大膽な創造力が復活され、時代の要求に應じ、皇國の前進に活を入れるために、思ひ切つた新體制が整へられたのであります。此の國史に現はれた經驗と教訓とを、今日國內の新體制にも、また大東亞共榮圈の確立にも、最も有効に反省し活用すべきであります。

## (四)

大東亞共榮圈の指導理念も、同じく肇國の精神、肇國の偉大なる創造力を復活す



る事によりて求め得られなければなりません。それは世間一般に唱へられてゐる神武天皇の宣はせられた八紘爲宇の大精神であります。八紘爲宇の大精神は、外に對しては萬物を愛しみ育てる皇威の顯はれであり、内にありては萬物を活かす創造力の活潑なる發動であります。この八紘爲宇の精神を、言葉でなく實行・實踐する氣魄が最も大切であります。八紘爲宇の大精神は、取りもなほさず皇國の道、皇道であります。

大東亞共榮圏の指導理念は、皇道・皇國精神の實踐を、大東亞共榮圏に擴充する事であります。國際關係より皇道を觀れば、それは要するに各國民、各民族をして各その所を得しむるに歸着するのでありまして、「之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」といふ普遍に光被する皇道が、大東亞共榮圏の指導理念の根本であるべきことは、疑ふべからざる大原則であります。これに基づいて、大東亞における諸民族を一環とする世界觀・道德觀・人生觀の確立を期すべきであります。

おのづから仇の心もなびくまで

誠の道をふめや國民

と畏くも明治天皇は御訓へ遊ばされました。「誠は天の道なり、これを誠にするは人の道なり」と申します。我々日本人は、此の聖旨を奉體して、誠の道をもつて大東亞共榮圏の確立に不退轉の努力をいたすべきであると考へます。

(五)

大東亞共榮圏の確立は、急速に成就せんことを念願致すのではあります。その文化的指導理念の擴充については、氣短かではなりません。滿洲事變後でありましたか、支那の某要人が、或日本人にかういふことを云つたといふことを聞いたことがあります。「私達中國人は、豚を氣長に御しながら目的の場所に導きますが、貴國の人は氣が短かくて、豚を脊負つてつれて行かうとするのですから、さぞかし